



始



大藏大臣井上準之助閣下書

善道

清

溪



剛質

健實

大分縣知事本山文平

# 天地玄黃 宇宙洪荒

大分縣教育課長

渡邊善三郎

## 序

西諺に曰く一致は能く獅子の勢に克つと、誠に然り、凡そ大は國家社會より小は一家一郷に至るまで、其發展進歩を期せんと欲せば、協力一致に如くはなし、能く協力一致を得んには、親子主従老若貧富等各階級者、互に思想上の諒解を得ざるべからず、今日社會に續出せる、各種の紛議衝突、例せば學校騒動と言ひ、小作爭議と言ひ、労働問題と言ひ、將た日常の家庭、又は取引上爭議と言ひ、悉く相互思想上の諒解を得ず、意思の疏通を缺如せるに原因せざるはなし、而して思想上の諒解を得んと欲せば、先づ互に其思想を發表せざるべからず、然るに在來の著作刊行物の如き、多くは老年者より、青年者に對する教訓的のものにして、青年者の思想の果して奈邊に存するや、見るに足るべきもの甚だ尠きを遺憾としたり。松本、藤

本の兩氏、茲に見る所ありて、大分縣出版協會を組織し、廣く縣下各中等學校の、在學生並に卒業生より、其所感の論文を募集し、之を編纂し、名づけて「學生の指針」と稱し、廣く一般學徒並に父兄に頒布する。ここへせり、編中政論あり、文學あり、哲學宗教あり、思想問題あり、實踐躬行談あり、實に百花爛漫として、滿開の觀を呈せり、一讀せんか、學徒及父兄は勿論、社會各方面の人士として、互に思想上の理解を得せしめ、協力一致を促がし、小は一家一郷より、大は國家社會の進運に寄與すること、蓋し鮮少ならざるべし、一言以て序辭とす。

昭和四年十二月

辯護士 堀之内松十郎

### 發行に臨みて

明治、大正は既に過去となり、昭和も早や四年を去らんとするに當り、編者具に當今の世相を觀察するに、現代社會程眩惑を生じ易いものはない、社會人が此の時流に掉して立脚すべき底邊を見出す迄の幾多の努力奮闘こそは、青年學徒にこりて未開の天地と云ふべきである、男女青年學徒は空想の世界を望んで、幾多の理想に憬がれてゐる、是等純眞にして旺盛なる意氣は尊敬すべき價値がある、就中、中等教育を了へたる青年男女こそは、進んで高等専門の學を修むべきや、將又直ちに現實社會に投じ、此の荒浪に掉して所謂生活の途を求むるか、の岐路に立つを常とする、斯かる場合、世の有識經世家の同情ある眼は、必然的に茲に注がれる、殊に是等青年の父兄としては一層其將來の歩むべき途について過ちなからし

むるを期する爲に思想及理想の那邊に存するかを知りたいとするのは當然である、是が爲には學窓を出でんとする青年男女の思想、理想の表現たる論文を集め併せして各校出身先輩諸氏の現實社會に於ける體驗並に家庭婦人の實驗等の寄稿を依頼し以て學生の指針と題し刊行して一般學徒は勿論父兄に頒布せんとす

昭和四年十二月

編者識す

目次

題字	大藏大臣 井上準之助閣下
全文	大分縣知事 本山 文平閣下
序文	大分縣教育會長 渡邊善三郎
師弟の道	辯護士 堀之内松十郎
家庭教育より始めよ	樺山 資英
消費經濟と家庭婦人の力	井上 準之助
自助自成一の眞價	松田 源治
早く人生の目的を確立せよ	渡邊 善三郎
先づ脚下より耕せ	恒藤 規隆
忠義の魂	頭山 滿
建國の精神	床次 竹次郎
國民教育に對する根本政策	松本 重矩
處世と學問	元東洋大學助教授 桑原 重矩
自己を語る 訓話指導者の價值批判	大分縣立工業學校卒業生 佐藤 勇生
政爭王國の青年諸君に告ぐ	東京日日新聞整理部部長 中里 眞清
國民教育に宗教を	日田工藝學校教諭 難波 照明
直ちに社會生活に入られる人の爲めに	日田漆器會社支配人 寺川 由己
農の根強さ	谷口 茂夫
實社會に處する覺悟	都甲 格
農村青年子女に反省を望む	松本 干城

ナラリマンの感想(附消費節約の經濟的及道德的意義に就し)………高橋保六  
生意氣盛の子供に對する最良なる教育手段………近藤政夫九二  
同胞意識の喚起………堀之内克二九四

大分縣立大分中學校の部

- 現代青年を誦む………仲町 容 六
- 學生の立志………平川 千博 九
- 現代の青年を誦む………佐藤 正見 一〇二
- 學生の立志………吉弘 貴 一〇三
- 學生の本領………高橋 安美 一〇四
- 學生の本領………黒田 明良 一〇六
- 學生の本領………矢野 正一 一〇〇
- 學生の立志………西 強 一〇三
- 學生の本領………清水 俊之 一〇四
- 學生の本領………房前 今夫 一〇七
- 學生の本領………永野 健二 一一九
- 學生の立志………阿部 精一 一三三
- 學生の立志………麻生 一雄 一三四
- 學生の立志………二宮 章藏 一三五
- 學生の立志………正田 吉藏 一三七
- 學生の立志………板村 眞一 一三〇
- 學生の立志………赤嶺 貫之 一三三
- 現代の青年を誦む………横山 大 一三五
- 我等の前途………中山 一二 一三〇
- 我等の前途………二宮伊五郎 一三〇
- 我等の前途………丸井 壽 一三〇
- 我等の前途………安部 正 一三〇

我等の前途………高橋保六  
我等の前途………近藤政夫九二  
現代の青年を誦む………堀之内克二九四

大分縣師範學校の部

- 我等の前途………竹田津文人 一五五
- 現代の青年を誦む………高島 涉 一五五
- 我等の前途………宮内 實 一五五
- 現代の青年を誦む………伊藤 學 一五五
- 我等の前途………成貞 久 一五五
- 我等の前途………平山 盛雄 一五五
- 我等の前途………石田 茂 一五五
- 我等の前途………元重 廉直 一五五
- 我等の前途………青柳 干城 一五五
- 我等の前途………杉木 與市 一五五
- 我等の前途………阿南 房夫 一五五
- 我等の前途………小川 高治 一五五
- 我等の前途………河野 憲一 一五五
- 我等の前途………山本 宗夫 一五五
- 我等の前途………田村 孝治 一五五
- 我等の前途………本莊 吉雄 一五五
- 我等の前途………河野 繁喜 一五五

- 二部入學する迄の動機と將來………伊東玄八郎 一七九
- 師範を志すまで………橋本 哲二 一八〇
- 師範學校に志して………渡邊 陸雄 一八二
- 苦しい中の喜び………鹿苑 鼎 一八三
- 私の希望………後藤 孝士 一八四
- 全 上………吉瀬 求 一八六
- 我が志望………小南 勝人 一八七
- 教育者となりし動機………黒川 秋義 一八八

大分商業學校の部

- 卒業後の理想………河野 良春 一八〇
- 卒業後の方針………大隈 千年 一八三
- 卒業後の理想………坂東 清一 一九四
- 卒業と社會………甲斐 禎一 一九七

大分縣立大分高等女學校の部

- 女性と趣味………山田 邦子 二〇一
- 何處に光を求めん………相良 光子 二〇三
- 何處に光を求めん………佐藤 房惠 二〇四
- 現代思潮に就いて………森永 菊子 二〇五
- 現代思潮批判………高橋 アヤ 二〇〇
- 思想國難に就いて………三田ツヨ子 二〇三
- 婦人問題に就いて………佐藤 てい 二〇三

私立岩田女學校の部

- 學窓より見たる社會………工藤千鶴子 二〇六

大分縣立白杵中學校の部

- 日本青年としての吾人の覺悟………尾崎 肇 二〇九
- 理想の前に立ちて………遠藤家一郎 二一〇

現代の世想………工藤 一夫 二三三

進まんとする吾人………古長 直 二三三

我等の理想………濱野 豊實 二三三

學窓より見たる世相………尾山 博 二三三

感するまゝに………窪田 豐 二三三

遠く離れて………田中 由七 二四〇

初夏の自然より………麻生 幸子 二四三

土の香………内藤フミ子 二四五

延びゆく物………瀬戸口ノ子 二四六

インダの自然………渡邊あき子 二四八

衰頹せる現代農村を歎く………村井 君子 二五〇

現在の世相………三代 律夫 二五一

労働を愛せよ………工藤 房男 二五二

我等が使命………阿南 文夫 二五三

現在我國の農界を思ひて………後藤 勉 二五九

感 想………内野 武美 二六二

農民として………寶珠 一幸 二六五

愚 感………梅木 正通 二六八

述懐………中山又二郎 二七〇

英雄出でよ………高等研究科 H K 生 二七五

一般學生諸兄よ………高等研究科 緒方 文夫 二七六

………第一 年 田吹 敏郎 二八三

河原の夕	小野ナツエ	二六六
清水の瀧	野中ヨシ子	二九三
涼臺にて	乙津三千代	二九五
病院生活の思ひ出	神田クニエ	二九七
去り行く二月	清水 規子	二九九
幼かりし日	大垣 チズ	三〇一
春	西野フミ子	三〇四
川	井上 富士	三〇五
我等の郷土を謳歌せん	有瀬 フミ	三〇七
大分縣立日田高等女學校の部		
三つの道	大内 包	三〇九
理想的家庭の建設へ	武内八重子	三二二
母への修養	長野 フミ	三三三
卒業後の方針	藤野 照代	三三四
私が卒業したら	小倉 玉枝	三三六
卒業に直面して	原 トシ	三三八
大分縣立中津高等女學校の部		
社會に對する若干の愚かな考察	小山 和子	三三〇
雜感二章	矢野 チズ	三三七
思つたまま	武井 政	三三三
中津商業學校の部		
學窓より見たる社會	西ノ明 操	三三六
學窓から	津崎 三壽	三三九
學窓での社會觀	松田 登	三四三
現代社會感想	田中 憲男	三四五
學窓から	小野 春義	三四六
大分縣立中津扇城女學校の部		
卒業したならば	武石 魚子	三五三
卒業して	高田 秀子	三五五
卒業してより	柏井しげる	三五四
私立扶桑中學校の部		
我等の使命	阿部 元親	三五五
卒業前の感想	酒井 爲安	三五〇
大分縣立四日市高等女學校の部		
學生時代の誇大理想的行衛	卒業生 生山 やす	三六一
汚濁せる現實社會を如何にして淨化すべきか	卒業生 小山田春子	三六三
結婚生活の眞意義と媒約人任せの結婚	卒業生 井上 敏子	三六五
女學校を卒業する人々の爲に	卒業生 中野百合子	三六九
大分縣立四日市農學校の部		
人口論	仲 正希	三七二
農業經營の改善	森瀬 義康	三七四
臺灣のパナナ	岡田健次郎	三七七
夕	光永 勉	三七八
大分縣立高田高等女學校の部		
女子教育に對する私の愚考	安藤マチエ	三八一
巢立たんとする現代女性の覺悟	神戸 タセ	三八二
私の進路	佐々木富子	三八四
吾は上級學校へ進まん	有永 チエ	三八六
私は上級學校へ進まむ	佐藤 幸子	三八七
私達の醫學を研究する目的	尾上高枝	三八八
大分縣立國東農學校の部		
我等の前途	安田 文雄	三八九

我等の覺悟	末房 正人	三九一
現在の私	小田原治郎	三九五
我等の覺悟	社藤 直人	三九五
大分縣立杵築中學校の部		
我等の理想	山村仁太郎	三九七
青年は如何に人生を觀るべきか	黒田 弘	四〇〇
學生の行くべき道	堀 真雄	四〇一
大分縣立日出高等女學校の部		
學習の希望	阿部 静子	四〇四
我が學習の心得	吉井 ナカ	四〇六
大分縣立宇佐中學校の部		
學窓から觀たる現實社會	高橋 重樹	四〇六
青年學生は如何に人生を見るべきか	安東 哲男	四二一
日本青年としての吾等の覺悟	佐藤 善昭	四二三
學生の行くべき道	吉松鮮二郎	四二五
教育は何の爲に受くか	竹下 忠實	四二七
何處に光を求めん	吉田 篤	四二八
何處に光を求めん	末 秀道	四三〇
何處に光を求めん	吉岡 泰	四三三
何處に光を求めん	安部 千雄	四三四
青年學生は如何に人生を見るべきか	常盤 洗	四三五
作文「何處に光を求めん」	陸門半次郎	四三七
作文「何處に光を求めん」	丹生 幸夫	四三八
大分縣立中津中學校の部		
進路と努力	滝次 三郎	四三九
吾人が瞥見せる社會	角野 正	四四三
	瀬野 敦	四四五

目次畢



明治天皇御製

はるかにもあふがぬ日なしわが國の

しづめとたてる伊勢のかみ垣

ちはやふる神のこころを心にて

わが國民をおさめてしがな

人もわれも道を守りてかはらずば

このしきしまの道はかはらず

師弟の道

樞密院副議長  
法學博士

平沼騏一郎

我邦忠孝の教、民の心に入るを深く、東方君子國の稱あること尙し。然るに歐米詭矯の思潮一たび浸潤するに及んで、兇險亂を好むの徒進んで之を唱へ、年少血氣の輩従つて之に和し、世風漸く一變して、忌むべく惧るべきの問題は頻々として續出し、不孝不弟を以て新奇と爲し、長上を凌轢して得々たる者日に其の多きを加ふ。殊に學生の如きは師を視ること路人の如く、學校を以て智識の市場となし、少しく意に満たざる所あれば黨を結びて我が意を主張し、往々紛擾を醸す者あり、其の亡狀言語に絶すと謂ふべし。

論語に有子の曰く、其の人と爲りや孝弟にして上を犯すことを好む者は鮮し、上を犯すことを好まずして亂を作ること好む者は未だ之れ有らず、君子は本を務む、本立ちて道生ず、孝弟は其れ仁の本たる歟と。蓋し孝弟は人類の資質中最美なるものなり。仁天下を覆ふも亦此の孝弟に胚胎す。故に有子之をし賛て仁の本と爲せるのみ。然らば則ち不孝不弟は仁の讒賊、道の罪人にして、惡むべきの

甚しき者なり。

禮記の學記篇に曰く、凡そ學の道は師を嚴にするを難しとす、師嚴にして然る後に道尊し、道尊くして然る後に民學を敬することを知ると。然るに今學校を輕視して其の命に従はず、學業を荒廢して徒らに紛擾を事とするが如きは、己に師を嚴にする所以にあらず、道何によりて尊きことを得るや。民又何によりて學を敬することを知るや、從來國家が學を建て師を設けて民を教へし所以のものは、倫理に基きて學藝を進め、其の親を親とし、其の長を長とし、上下各々其の生を厚うして、永く天下の治平を致さんと欲せしに外ならず。蓋し倫理は人類必由の大道にして如何なる智識も、如何なる事業も、總て此の大道を経由するに非らざれば何等の價值を生せず。換言すれば處世の要素は全く倫理に在り、之を缺けば即ち人類に非らずと謂ふも不可なし。故に下は小學より上は大學に至るまで、總ての學校は倫理の府たらざるべからず。従つて總ての學科、總ての技藝は盡く倫理に立脚して教授さるべきものにして、一度校門を潜ぐれば即ち倫理の府に入りたることを自覺し、其の教ゆる所は師長も之を實踐躬行し、其の學ぶ所は學生も之を實踐躬行し、造次頓沛、必らず此に於てするを以て主眼とせざるべからず。是れ實に東洋倫理の特色にして、二千年來之を實行したる我邦の政教風俗が、世界に冠絶したる所以なり。

學校已に倫理の府たり、然らば則ち之が師たる者亦頗る難しと謂はざるべからず。荀子致仕篇に曰

く、師術に四あり、傳習は與らず。尊嚴にして憚らる、以て師たるべし。耆艾にして信なる、以て師たるべし。誦説して陵られず犯されず、以て師たるべし。微を知りて而して論ず、以て師たるべし。韓退之の師説に亦曰く、師は以て道を傳へ業を授け惑を解く所なりと。然らば則ち師たるものは固より他の儀表たるべき學徳なかるべからず。朱は嘗て其の弟子某々等が淫靡の行ありて有司を溺せしを悲しみ、先聖に告ぐるの文を作り、蒸芻に自ら惟ふに身道を行ふ能はず、以て其の人を牽驅する能はずして此に至らしむ、又蚤く刑辟を正して以て之を彈治する能はず、即ち是れ徳刑兩ながら弛みて士の率はざるもの遂に禁すること無きなりと曰へり。其の自ら責むること斯の如し、以て始めて人の師たるべきなり。師己に斯の如くならざるべからずとすれば弟子も亦其の師に對して徹頭徹尾弟子たるの道を嚴守せざるべからず。禮記の曲禮に曰く、師に事へては犯す無く隠す無く、左右就きて養ふ、方なし、服勤して死に至る、心喪三年と、今日の學生に三年の心喪を望むは或は酷なりと謂ふ者あらむ。然も師の尊嚴なることは常に斯の如くなるべく、服勤して死に至り、滄る所有るべからざるや論なきのみ。禮記に又曰く父召せば諾無し、先生召せば諾無し、唯して而して起つと。小學にも亦樂共子の語を擧げて曰く、民は三に生ず、之に事ふること一の如し、父之を生み、師之を教へ、君之を食ふ、故に一として之に事ふるなり。と師の尊嚴にして其の恩の君父に齊しきこと以て見るべし。釋氏も亦師恩を擧げて國主恩、父母恩、施主恩と共に四恩を爲せり。東洋倫理に於て師の尊貴なるこ

と由來する所遠くして且つ深しと謂はざるべからず。然るに此の良風醇俗は今や漸く破壊し去られむとす、豈浩嘆に堪ゆべむや。

昔は字津木靜區、其の師大鹽中齊の舉兵を諫止せんとて容れられず。然し之を官府に密告するに忍びず、又之を棄て、奔るの道に非らず、進退兩ながら難きを知り、窮に其の身の潔白を表明するの方を案じ、一書を從者岡田穆に託して郷里彦根に致さしめ、然る後に從容として首を中衛の部下大井正一郎等に授け、以て師弟の誼を完ふせり。斯の如きは洵に非常の變故にして、千歲空遇の事件たり。然るに靜區能く弟子の道を守り、又大義名分を失はざりしは、禮記の所謂犯す無く隱す無く、服勤して死に至りしものにて、天下後世、其の志を悲みて其の死を壯とする、亦決して所以なきに非らざるなり。論者或は曰はむ、今の師は古の師にあらず、唯だ俸祿の爲に教鞭を執るに過ぎず、學生をして之に服事せしむるに數千年前の舊禮を以てせんとするは時代錯誤なりと。呼、是れ何の言ぞや。今は猶古の如く、古は猶今の如し。人心は古今と無く一なり。倫理豈新舊の別あらむや。論者の言の如きは勞働者を以て師を遇するなり。固より俱に教育を語るに足らず。之を要するに予は決して師を揚げ弟子を抑へ、以て得たりと爲す者に非らず、師には自ら師たるの責任あり、徳を積み行を礪き身を以て群生を奨率せざるべからざること論を待たずと雖、弟子にも亦弟子の義務あり、銳意其の義務に服従し、斷じて則を超ゆるの行爲あるべからざること力説せんと欲するのみ。(完)

## 家庭教育より始めよ

貴族院議員 樺山資英

我國の學校教育の現状に就きては、我等は決して之に満足して居るものではない。小學校より中學校高等女學校等、それ／＼に希望もあり、不満もある。しかし世人が、我が大切な子女の教育に對して、學校をのみ咎めて、家庭教育の事は顧みぬ傾向に在る事は、甚だ遺憾の至りである。教育とは學校に於ける教科目のみをいふのではなく、朝夕の行往坐臥より洒掃應對に至るまで、悉く教育ならぬものはない。故に學校は學校として益々改善し發達せしむる事を要するが、子女の教育、殊に人格教育に就いては、主として家庭が之に當る考へでなくては、完成は出來ぬ。古人は子を易へて教ふといひ、父子の間は善を責めずともいひて、孔子の如き大聖人で、現に多くの子弟を集めて教育して居られるに拘らず、我子の教育は人に託して、自らは其子を遠けて何事も教へられなかつたといふが、それは學校教育に屬する範圍で、家庭教育といふ意味のものではない。家庭教育即ち庭訓といふ文字は、孔子が堂上に立つて居られた時、其子の鯉が趨つて庭を過ぎたのを呼び止めて、詩を學んだ

か、禮を學んだか、詩を學ばねば人と話が出来ぬぞ、禮を學ばねば人として世に立つことが出来ぬぞと教へられたのに始まるといふ。孔子豈に家庭教育を忽にせんや。孟母の三遷の話や、歐陽修の母が其の子の訓育に心を砕いた事は有名な話であるが、古來孤兒にして賢母の手に育つたものに大人物の多いのも、家庭教育の大切なることを表示するものである。學校教育は勿論大切で、それは學校に託せねばならぬ。従つて學校教育の改善は甚だ重大事であるが、それに相應じて家庭教育も大に謹まねばならぬ。

近來不良の少年少女の年々増加の傾向に在るは、甚だ残念なる事であるが、それが家貧にして教育の出来ぬ爲といふよりは、繼母などの關係で、親の温き愛情が注がれず、家庭的注意の届かぬ所より來るものが多い、是れは己むを得ざる事情であるが、父母も俱に存し、教育も十分に届き、親の人格も相當なる良家の子弟中に、比較的不良兒の多いといふ事は不思議の様であるが、實は現今の良家といはるゝ方面に、家庭教育の行はれぬ所が、却つて多い様に思はるゝ、父親は政事に實業に日々多用にして、朝から晩まで外で働き、子供と緩り話をする機會などは無い。母親も社交とか慈善とかいつて、赤坊を家に寝かして出歩き、留守に子供が何をして居るかを知らぬ。是で教育の届かう譯はない。社交も慈善も大切ではあらうが、子女の教育は更に大切ではなからうか。

昔の家庭の母親は、女大學とか女四書とかいふ類の讀み物で養はれたのみで、是といふ教育は受け

ては居なかつたが、それでも祖先以來の武士道があつて、精神も儀禮も傳統的に訓練され、家庭的に仕込まれて來て居るから、子供にも早くから躰けて、朝起きては父母に「御早う御座います」と挨拶し、夜寝るには「お休みなさいまし」といひ、膳に向つては「頂きます」といはしめる。基督教信者の如き、神に感謝の祈りはなくとも、そこに自然と敬虔の念が養はれ、起居動作にも一定の作法が出來て行く。又折に觸れては、聞き覺えた孟母三遷の教とか、貞女烈婦の話、忠臣義士の講談を、子女に談して聞かせる。是によりて知らず識らず、子供の品性を涵養した事は非常なものである。武士の家庭で、子供が外で喧嘩して泣いて歸ると、喧嘩して負ける位なら死んで來いと叱られる。是等の精神が今日まで、我國が外侮を受けず、金匱無缺の國を維持し來つた所以ではなからうか。我國の思想風俗は、本と儒教の精神から成り立つて居て、萬事忠孝を本として居る。古は徳川將軍があり、各藩に藩侯があつて、天皇陛下に事へるといふ觀念は明でなかつたけれども、君國の爲には何時でも身命を差し出すといふ決心は、絶へず磨かれて居た。此の心持が親に向つては孝となり、長者に向つては悌となり、社會に對しては犠牲の念ともなりて働き、美しき風俗を形成したものである。東洋道德の根本は此に在る、此思想を養ふことは、現今と雖も家庭教育上重要な點であるが、所謂新しい家庭に在りては、之を歐米風に持つて行つても差支は無からう。歐米人は老後子供の世話にならうといふ考はない。故に子供に孝といふ觀念も教へぬが、それは飽くまで各自獨立して行く事を道德の根本とし

て居るからである。故に親は子供を育て乍らも、自分は一生の生活を維持する丈の準備をして居る。而して子供には獨立して行ける丈の教育を仕込んだ後は、つき放して自立して行かしむめ、各自に依頼心を持たぬ、是も結構である。我が國の古諺に「可愛い子に旅をさせよ」とあるも獅子が其の子を千仞の谷に突き落すといふのも、亦此の獨立心の尙ふべきが爲である。

我等は何も舊式の家庭教育を望む譯ではない、新しい思想によりて文化生活をして居る家庭でも、父母の眞面目な愛情を以て子女の教育を考へられる事を望むものである。眞面目に子供の爲を考へさへすれば、子供に見せて好からぬ事や、聞かして不爲になる事は、自ら注意されるであらう。今日の若い男女に夫婦別ありなどと説いても、耳にも入れまいけれども、相當の子供があるに及んでは、自然に眞面目な父母らしい態度になることは疑ひない。其眞面目な態度を以て、朝夕に子女の教育上を目を離さぬ様にして貰へば結構である。子女教育は必ずしも嚴なるを好しとするのではない。父母の愛を必要とする。愛といへば現代では直に戀愛、それも動もすれば性的慾情の意味に用ひらるゝが、西洋人の所謂ラブといふものは、左様のいやらしいものではない。殊に父母の愛は神聖なものである。此父母の愛を以て、遠く子供の生ひ先きを考へて、朝に夕に氣をつけ導いてやる。そこに家庭教育は成り立つのである。子供の家庭教育としては、其の平素の讀み物に就いて、深甚の注意を拂つてやらねばならぬ。歐米などでは、第一に社會が目覺めて居て、大新聞等は、男女の駈け落ちとか、身

投とかいふ様な下らぬ記事は始めから書かぬ。若し其人が有名な人であるか、地位ある人であれば書かぬ事もないが、其書方は嚴肅な批判的態度であつて、決して猥褻な方面には涉らぬ、日本の新聞の社會部記事の如き低級な事を書くのは、特に黄色新聞と稱して、良家庭では餘り讀まぬ種類のものである。又左様な記事を載する雑誌の類も日本の現在の如く多くはない。而して心ある家庭では子女には勿論、大人も餘り讀まぬ、内證で讀むことがあつても決して机の上には載せぬ。讀んで爲になるも人前に出しても恥しくないものでなければ、机の上には載せさせぬ。此邊は却つて歐米の方が遙に行き届いて居る。現代ハイカラの徒が、歐米新流行の如く考へて真似しようと思つて居るものは、一部デカタンの惡風たるに過ぎぬ。決して歐米を代表する風俗でもなければ思想でもない。

我國の風俗といひ思想といひ、維新以來大變化を來して、傳統的の美しい者は殆ど影を潜めて居るが、まだまだ實際には根強きものが存して居ることを疑はぬ。今に及んで各家庭で大に目覺めて、子女の教育の爲め、父母も姉兄も言行を慎みて身を以て之に先づ考になつたならば、國家教育上に及ばず効果は偉大なものがあらう。學校を萬能の如く考へて、一切萬事學校に打ち委せて、學校にさへやつて置けば、偉い子供が出来上る如く考へて居るのは大なる間違である。學校教育も家庭教育と相待つて始めて成績を擧げ得るもので、子女の精神や素行の方面は、寧ろ家庭教育に待たねば完成は望み難いものである。世の人々が學校改善を唱ふる前に、先づ家庭教育の改善を望みて止まぬ。

## 消費經濟と家庭婦人の力

大藏大臣 井上準之助

此の度大分縣出版協會から學生の指針と云ふ書物を刊行するから郷黨の先輩として何か參考ともなるべきものを寄稿せよとの御頼みですが、何分御承知の通り組閣以來政務多端の折でもあり、充分御依頼の要旨に添ふことになるか知りませんが、私の現在の立場からは獨り大分縣と云ふ様な小部分的の問題ではありませんが、大藏大臣として此機會に於きまして、將に巢立つ學生は勿論既に家庭の御婦人方に特に御話し致したいと存する次第であります。

### 國民經濟の立直

我れは此の國民經濟の立直を致すために、政府のつかいます金を減じ、同時に國民に向つても、つかふ金を有効に——無駄な費ひ方をしない様に、御協力を願ひたいのであります。それに就きましては、婦人の方々は消費者として、最も有力な方々であります、皆様は御自分が消費經濟に於て有力なる地位に居られるか、或は自覺されて居ないかも知れない、然しながら世の中の十の内の九

以上は皆様が金をお使ひになるので有ります、どうか致しますと一家族の中で金の取れる内の十の九まで使ふ。或はより以上にお使ひになる、借金までしてお使ひになる方も有ります、私が勘定致しますと一國の中で十の内の九割以上は必ず婦人の手に依つて消費されて居ります。皆様方が、此の消費節約の事情をお聞き下さつて、吾々に御協力下さるならば之れより有力な事はないのであります。

消費者としての婦人の地位は皆様方がお考へになるとスグ判ります、皆様方が國の生産と云ふものを司つて居ると云つてもよいのであります。假に申しますと我國に輸出される品物は別としまして、内地で消費致しまするもの、九割迄は、皆様方の差圖に依つて出來て居るのであります。皆様方と直接關係のある日本の織物の産地を歩いて御覽なさい。

この頃では日本婦人にこう云ふ好みがある、あゝ云ふ好みがある、こう云ふ物をこしらへて買つたら宜からうと云つて生産者は皆婦人方の意嚮計り探つて居るのであります、之れは織物の産地計りではありません。家庭に於ても一家で使ふすべてのものは婦人の趣味嗜好がどこにあるかと云ふ事計りを氣にして居るのであります。言を代へて申すならば皆様が生産を司つて居ると云つてもよいのであります。それでありますから吾れが今日やらんとする目的を達するには婦人の方々が消費者としての位地を自覺されてどうしたならば此の一家の經濟が合理的に行くのか、有効に——金が少くして無駄をせずにごつして一家が健全なる發達をして行けるだらうかと云ふことをお考へに成りさへす

れば、吾れ／＼の目的の十の八九迄は達せられるのであります。日本に於きましては消費經濟の一方から申しますと消費者の地位と云ふものが完全に認められて居らるのであります。稍もしますと生産者が保護され、消費者が無視される様な事が有ります。然し乍ら何れの國と雖も、日本の先進國の状態を見ますとこの消費者の地位と云ふものは段々向上されてまいりまして消費者が即ち一國の政治、一國の社會の制裁者となることは段々先進國に見る所であります。

私は婦人經濟思想に付きまして私の體驗したことを皆様方にお話し致したいと思ひますが、實は日本と云ふ國は非常に貧乏な國なのです、國體と云ひ、其の他人種と云ひ、私は世界各國に誇れると思ひます。然し乍ら富の程度に於きましては、日本は殆んど獨立の資格の無い程貧乏な國であつたのであります。然るに大正三年から歐州大戰が始まつて來て日本は非常に羨ましい位地に立つたのであります。非常に巨額の金を儲けまして、皆様方が言ふだけでは理解されない程な、四十億圓と云ふ様な大金を日本は其時取つたのであります。從來は日本は毎年外國に金を借りる一方であつた、輸入超過の國で有つて日本は外國に賣るよりは買ふ計りの國であつたのであります。然るに戰爭中五六年の間になんよ位地に立つたのであります、之れはイギリスは勿論アメリカと比較致しましても日本の方が比較的よい位地に立つたのであります。

それで私はその時こう考へたのであります。これで始めて日本は獨立國に成れた、即ち世界に轉飛

する資格が始めて出來たと云つて喜んだので有ります。然るにどうでせう、その後の状態を見ますと儲かつた金を贅澤に使つて仕舞まして今日では外國に一文の金ものこらず、今では外國に金を借りようとしても上手には借りられぬ、外國に持つて居つた十億圓の金は全部使つて仕舞つたのであります。これは要するに日本人の經濟思想が低く、經濟組織に對する理解が無いからであります。殊に其の上に付て遺憾ながら、日本の婦人は世界各國の婦人に比べて最も經濟思想に乏しいからであります。私から申しますと大部分とは申しませんが、半分以上は婦人の責任であります。貴女方が無理の消費と無理の贅澤をされた結果が折角日本がいゝ位地に立つたのが今日は又再び元の空阿彌と云ふよりも尙一層悪いのであります、今日は世界に向つて總ての意味に於て日本の信用は地に墜ちつゝあるのであります。其の裏面には婦人の經濟に對する理解が非常に少なかつた事が大なる原因となつて居るのであります。日本は一時アメリカよりも比較的金融餘計にしたのであります、アメリカは今日非常な繁昌をし、日本は今日は非常な不景氣であります。アメリカと日本と比較して見ると、アメリカの婦人の方が此の公經濟と云はず、自分の生活——私經濟に非常に理解が深いのであります。自分自身の生活と云ふ事に付て非常に深刻なる理解があるのであります。日本婦人は遺憾ながら自己の生活に付ての考へが薄いのであります。

即ち空々漠々としてこの日本全体の經濟界の状態を御覽に成つて居るから、自分の知らぬ内に金融

が出来たり、自分の知らぬ中に經濟上悲境に沈淪する様なことになつて居るのであります。之れが皆様方の頭に々一響いて居られるかどうか恐らくは非常に薄いだらうと思ひます。だから日本は家庭内の經濟から改良してかゝらなくては本當の經濟の基礎を固める譯にはゆかないと云ふことを深く私は體驗したのであります。

もう一つ私の體驗と申しますと何年頃でしたか教科書事件と云ふものがありました。學校の教員校長文部省關係で澤山な賄路を取つて立派な方々が牢に入つた事があります。其の場合の法定の調書を讀んで見ますと、背後には必ず婦人があります。どう云ふ犯罪であつたかと申しますと現金を賄路に取つた人は少くは多くは反物何反、呉服券を幾枚貰つたと云ふことでありまして其の立派な主人の背後に常に此の贅澤をされ、虚榮に富まれる婦人が有つた爲に此の犯罪の大部分は出来たのであります。そんな事が今日の様なだらけた社會には澤山有りますので、此の一家の生計、自分の家を維持して行く自分の主人をして立派に社會に仕事をさせようと云ふ迄になると、遺憾ながら日本婦人は自分の虚榮の食を阻止する丈けの意思が非常に薄弱と云ふ事を常に考へさせられるのであります。經濟界が今日の様な状態に成つた時には直接皆様方に訴へて皆様方の悪い處を代へて貰らふより外に日本の經濟は立直らぬのであります。

そこで皆様方に婦人の立場からこの難局を解破していただきたいと希望するものであります。即ち家庭經濟の合理化、家庭經濟を掌つて居る皆様方の精神的の改善に依りまして初めて之れは出来るものでありますから、うるさいと考へられませうけれ共、日本は今日非常な危機に瀕して居るのでありますから特に願うるのであります。どうして如斯困難な地位に立つたか、それは前に述べました様に大正三年から始まつた歐洲大戦争に際して、日本は世界中で一番經濟上羨ましい地位に立つて所謂成金の澤山出来た時代、非常に皆様が贅澤をなされた時代、總ての物の値段が大變高くなつた時代、處々方々に日本は享樂的空氣の充滿した時代であります。然るに大正七年にヨーロッパの戦争が濟みますと形勢は逆轉して外國人は日本の品物を買はなくなりました、而も日本人には金が溜つて居る、贅澤に成つて居る、國民の收入と云ふものはうんと減りだしたのであります。皆様方に一番よくお判りになる例を申しますと皆様方の着て居らるゝ生絲が今日と其の頃を比べますと値段が四倍もしたのであります、生絲百斤が其時は四千圓もしたのでありますが、今日は千貳百八十圓しかして居りません。即ち四分の一少し位の値段になつてをります、之は四千圓の生絲の時分には賣つた人は非常に儲かつたのであります、然るに千貳百八十圓に下つて來ると儲かりますすけれ共儲けの程度はうんと減じたのであります。これは皆様方の主人が給料を取つて居つたならば其の時は賞與金も殖ねました、今日は賞與金が減つてをります、株の配當も減りました。然るにどうせう、收入の多かつた時に出来た暮しが収入が減つた今日でも之れを減らすことが出来て居ないのであります。これは要するに虚榮に富ん



で居るからで、日本國を通じて皆んながそんな状態であります。商賣に付て言ひますれば利益は減つたが利益の多かつた時の暮しに入つた丈の金はどうしても減せないと云ふのであります。

政府の財政がどうであるかと云ふと政府には戦争中は非常に巨額の租税が入りましたのであります。其の時に段々政府の使ふ金も殖れた、此の頃は租税が非常に減つたのであります。それでもどうしても——あれ程有力な、あれ程聰明な政治家が澤山よつて議會に何百人と云ふ皆様方の選出された立派な代議士が寄つて居つても——此の歳出がどうしても減せないのです、減せない結果が最近には毎年一億圓宛位の借金をして支出して居るのであります、皆様方に之れを例へて申ますれば、収入は減つたが御家庭の暮しはどうしても減らせない、止むを得ぬから質に置くか或は借金をして年々々々の暮しをして居ると云ふこと、同じ事でありませぬ。皆様でもこんなことではいけない、それでは破滅すると言はれるに相違ない、然しながら事實は遺憾ながら政府の財政も過去數年間は借金をして漸く歳入と歳出の缺陷を補つて居るのであります。皆さん方の直面される、大分縣下の財政はどうか、それ以下の地方町村と云ふものも皆んなこれと同じ事でありませぬ。

今年の年度には租税に對する支拂が足りませぬ。従つて貳億五千萬圓と云ふ様な大きな借金をして日本全國の市町村は經濟を立て、居るのであります。こう云ふ状態は國や市町村計りでは無いと思ひます。遞信次官中野正剛君の語に「東京の街の中で一千坪も有る廣い地所に家を建て、自動車に乗り

廻して居る奴はロクナ奴でない」と云はれましたがそれも以上述べた意味であらうと思ひます。さう言ふ方々に限つて以前は非常に成金で有つたから、成金生活をして居たが今日は金が減つて暮しが立たないが銀行から借金をして矢張贅澤をして居ります。こう云ふ辻褃の合はない間違つた事をしてゐるから非常に罵倒される譯だらうと思ひます。まア皆さん方も一つ考へて御覽んなさい、月の暮を其の月の収入で出来て居るいはゆるトン／＼暮しをして居る人がなか／＼多からうと思ひます。それよりもよくなつたらどうか、さうすれば此の月は多少の貯金も出来て安心したと云はれませう、然しこのまゝで五年、十年経つたならば自分の所にいやが上に殖える子供の教育も安全に出来るかどうかと云ふ事を考へて見るとさうは行かないと云う位のセチ辛い情態を皆様方が経験されて居るであらうと思ひます。これでは精神的にも日本國は伸びません。もう少し經濟的に樂に出来、ゆつくりした伸び／＼した家庭が出来て其の伸び／＼した家庭に子弟が育たないと皆様方の小供さんも立派な小供になれないのであります。

今日色々思想が悪化して皆様方は小供に就て常に心配されてゐる精神的に日本人は段々墮落して居ります、それは多くこの經濟上の辻褃の合ない不合理な處から來て居ります。即ち金は取れない、借金も出来ない、依然として贅澤はしたいと云ふ様な状態が今日尙残つて居る事が、此の日本の精神の頽廢、思想の悪化なりに重大な關係があるのであります。これを立直さなければこの日本の發展は

險ない、この根本を立直さなければ日本國の財政と云ふものは困難であります。この根本を立直して行かうと云ふのが私共の使命であります。そこで政府と致しましては、借金をして其の日の暮しを立てる様な辻褃の合ない事を断じて止めやう、即ち一般會計——と申しますと皆様方の日常の家庭の暮しであります——それには借金を一切止めます、これ迄一億に近い公債を計上して居りましたがそれを断じて止めて今後は入るを計つて出るを制する、即ち相當の餘裕迄残して見よう、又今日皆さん方は非常な不景氣に遭遇して収入の減つた國民であるから理想的には是非租税まで減らさうと云ふ理想を持つて居るのであります。それから今度は此の地方々々の市町村にも今後借金をして其の日の暮しを立てることは相成らぬ。即ち今後は一文の借金もせずに地方の財政を立て、行こう、こう云ふことを定めて、段々實行しつゝあるのであります、現に我が大分縣に於きましても昭和五年度の豫算に於て九拾萬圓以上の節約をすることゝなつて居ります、そこで皆さん方に折人つて御協力を願はなければならぬことがあります。それはこの日本の問題であります處の金の解禁をどうしてもしなければ、よし一時經濟界は安定しましても將來又この様なことに成るのであります、何故にこの金解禁をするのに皆さん方の御協力を願ふのかと申しますと、この世の中は經濟界と云ふものは世界共通であります、世界共通にして初めて、極端なる經濟界の變動がなくて行くのであります。それで殆んど世界を通じて金貨本位と云ふものが布かれて居ります、金貨本位と云ふのは金貨を日本銀行——中央銀行の

庫の中に入れて置いて、それに對して紙幣を發行してさうして皆さん方が其の紙幣を使ひます、そして金が殖えれば物價が高くなります。物價が高くなればいつでも外國から物をよけい買ひます、そうなるご其の支拂の金を持つて行かなくちやなりません。そこで外國には紙幣は通用しませんから日本銀行に有る金貨を外國に持つて行きます、金貨が外國に行けば紙幣の高が減ります、紙幣の高が減れば皆さん方の使ふ金が減りますから自然と日本の物價が下ります、もう一つ言へば金利が上ります、物價が下りますれば外國から物を買ふ力がなくなるから外國から物も買はずに濟みます、そう云ふのが普通なのです、この外國——アメリカ、イギリス、日本或はフランス等の間ではいつも自然に節約が付く様に出來て居ります。現在の如く政府も家庭も非常な放漫な財政々策を樹て、借金で毎年辻褃を合せて居れば日本の金貨はドツサリ外國に出て行つて國民全体は非常に苦しんで居なくてはなりません。然るに金は大正六年以後外へ持出す事はならぬことになつて居ますから皆さん方は何にも感じませんが、即ち借金をして皆んなが間違つた不合理な消費をして居るにも不拘ず自分の眼の前の金貨は一つも減りません、外國から物を買ふのは依然として殖えて居ります、そして皆さん方の眼の前には何も判つて居ません。

然れ共判らなければならぬことが一つある、それは何かと云ひますと物を買ふには金が入ります、そこで便法としては外國にある金で支拂ふのであります。今日は無くなつて仕舞ました、皆さん方が

時々お聞きになる日本の爲替相場がいくらく／＼下がつたと云つて世の中の人が騒いで居るのは其の爲であります。爲替相場が一割下がつて居ると云ふ事は紙幣の價值が一割下り日本の金の價值が一割下がつたと云ふ事であり、即ちそれは外國に支拂資金がないのであります、どうしても此處で日本の經濟を立直し將來まで安全に基礎を立直さうとするには、此の問題を解破しなければなりません。要するに今の様な不合理な生活をして、物の値段が高過ぎたり、皆さん方の生活費が下らずに尙外國から來るものが非常に多い、それを直さぬ以上は、この金の解禁と云ふことは出來ないのであります。この儘で金の解禁をしたならば恰度堰が切れて大洪水が出る如く日本の金貨は外國に一時に出ます、さうしたなら日本の經濟界と云ふものが破壊されます、即ち皆さんの暮——日本の暮をキチツトしてからでなくては出來ないのであります。然るに政府はどうであるかと云ふに一年に三十八億はご使ひます。地方の市町村を入れますと五十五、六億萬圓と云ふ金を使ひます。而し皆さん方のお使ひになる金と比較しますると非常に少ないのであります、皆さんのお使ひになる金は何十億、何百億であります、そこで私は愈々借金は止めます、今後は自分の歳入で暮して行きます、歳入も成丈け減して國民の負擔を軽くしようと思ひます。皆さんでいへばなるだけ暮しを安くして、そして貯蓄でもしようと思ふことでもあります。こうした上ではなくては効力がないのであります。皆さん方の御協力を願はねばならぬ理由はそこにあるのであります。協刀される意味に於きましては、御婦人位有力なものは

ないのであります。皆さまは家の中を掃除して御覽なさい、皆さんの家の中には大正三年頃戦争の時儲かつた時代のいらぬものが澤山あります、今頃では買ふではなかつたと後悔される様なものが澤山あらうと思ひます、また皆さん方の暮しをなさる頭の中を一つ掃除してならば日本の經濟は困つて居る、我れ／＼も一つ共鳴してこれ丈けの節約をしようと思ひ付かれること、思ひます。

斯る空氣が起つて來たならばそれ位有力なことはありません、これは多數の方が共鳴され共力されるならばそれも改善することはなんでもない、何等の苦痛もなしに出來ます。私しでさね思ひ切つて我國の十六億七千萬圓の豫算の中から九千百萬圓の節約をしたのであります。それは平常ならば出來る仕事ではありません——現に政府で豫算を改めて議會を通過して何十萬と云ふ官吏に持つて行つてこれでやつてよろしい——お使ひなさいと云つて既に四ヶ月たつて居るがドッコイさうはならない己はお前にやつた筈の金だが取揚げるんだと云つて九千七百萬圓の節約をしたのであります。皆さんがこの日本の經濟はそこから始めなければいかんと云ふ觀念で行きますと何でもないのであります。こゝうゆう空氣が起つてこれが續いて日本の經濟が合理的に立直れば、日本の經濟は安泰で金解禁も出來ます。そうでありますからこゝうゆう日本の經濟上の危機に瀕した時には是非皆さん方は公經濟——政府の經濟はどうか、日本の國の經濟はどうか動いて居るかと思ふことを時々御研究なさらないけません。これからの婦人は特に私經濟は勿論であります、公經濟に於ても消費者として非常に力の強い

方であります。消費經濟——私の申して居ります消費の節約とはどう云ふ事を云ふのであるか又どんなことを眼目として居るのであるかと申しますと、第一に借金して暮しを立てる様なことを止めます、それからには其の上に個人なら貯蓄をする金を出します、政府ならば國民の負擔を軽減する金を出さうと云ふのであります、それが即ち我々の消費節約の標的であります、そして政府が財政の整理緊縮をして、皆さん方に協力を頼んで、消費節約をなし結局此の金解禁と云ふ大事業を執行しようと思ふのであります。これをしたならば今日の日本の經濟は立て直ります。昭和五年度の豫算はこれからきめますが、出来るだけ整理節約を爲す考へで居ます。

私は自分が消費節約に付き最近實行した實例を一つお話し致します。昭和四年度の財政計畫を立て直す爲に先づ不要なものは削ぐらうと考へました、それで外務大臣の官舎或は商工大臣の官舎とか農林大臣の官舎の新築の豫算をして數百萬圓の豫算がありました、勿論今の官舎は可なりボロ家でありますが兎に角雨の漏らない家である、そこでこれは全部削つたのであります、然しながら我々の仕事をやるものは地震後に拵らへたバラックで已に大正十二年から今日まで六七年立つてもう五六年しか命がないのであります。それで諸官署の方は着手して建築することにしたのであります、然し一軒に五百萬圓、二軒建てますのでそれが壹千萬圓であります、同じ坪數で同じ堅牢さでさうしてむだのもの、飾りをはぶくと二百萬圓の節約が出来たのであります。壹千萬圓に對し二割節約することが

出来たのであります。こう云ふ事は皆さんの日常體驗されて居る中に澤山あるだらうと思ひます、所謂る食ふものを減らしなさい、腹が減つても我慢しなさいと云ふ様な消費節約は決して申しません。

私がよく申すのであります、小學校の建築——立派な建築が出来て居ります。皆さん方が小供さん方を入れられるのに學校の立派なのは非常に結構であります。然しながら今日日本の公經濟で小學校ほど贅澤なとして小學校程澤山の借金を持つて居る處はないのであります、私に言はせると同じ坪數で同じ堅牢さならば少し贅澤をはぶいてもよくはないかと思ひます、それだけでも學校の方の租税が減せる皆さんの小供さんを學校に入れるに付て非常に節約が出来ます、さう云ふ事を段々研究してまいりましたならば私共この世の中には止めてもよいものが澤山あります、要するに私は前申した通り大藏大臣と云ふ立場から申し上げたので幸に大分縣出版協會が出版せんとする學生の指針に依り先づ郷土の皆さん方へ私の意のある處を述べて御協力をお願いする次第であります。

金

一錢を笑ふものは

一錢に泣く

## 自助自成一の眞價

拓務大臣 松田源治

先般歸郷の砌大分縣出版協會が縣下各中等學校教育者と協力し將に學窓を出でんとする青年男女の爲め之等青年男女が表現宣傳の皮殻を以て蔽はれたる當今の社會に求めむとする各自の理想及思想の表現たる論文並に各校出身先輩諸氏の現實社會に於ける體驗並に家庭婦人の實驗談等の稿を蒐め「學生の指針」てふ書籍を刊行すると云ふ事を知つた、此の眩惑し易き世相を有する我國の現代に於て近く第二の國民として國家建設の重責を有する青年男女の教養こそ最も緊要事である我大分縣に於て此の青年男女の爲め先輩諸氏よりの處世上の豫備知識を與へると云ふ事は洵に國家の爲め慶賀すべきことである。余も亦此の趣旨に賛し一稿を寄す。

今日の青少年は學校中毒に罹り中學校に入りたい、専門學校へ進みたい、大學に學びたい、しかし自分の家は貧乏なので學資が續かぬ、残念だが落伍者とならねばならぬ、とさういふ風に考へて、自己の境遇を悲觀して居るものが多く果は自暴自棄となるものさへある。

一体學校教育はそれほど有難いものであるか、横井小楠が曾て、松平春嶽の爲めに起草した「學校問答」の中にかういふ事を云つて居る

「和漢古今を問はず、明君が世に出ると、屹度先づ學校を起す然るにその實際の成績を見まするのに學校から拔群の人物を輩出した例を聞かない、また學校の力によつて、教化行はれ風俗敦くなつたといふやうなことは尙更御座いませぬ、早い話、これを支那について見るならば聖人君子といはれた人々は、大學生の中からは出て居りませぬ、唐の太宗は大學を興して、八千の學生を集めたが此の中からは、一人の英傑も出て居りませぬ。徒らに文運隆盛といふやうな虚名を博したと云ふに過ぎませぬ、退いて今これを我國の實際について見ますと、各藩ともみな學校を設けて、なかなか旺んなことではありますが、一向人材を出して居りませぬ」

言奇矯の如くして、實は玩味すると甚だ暗示に富んで居るのみならず、今の世相にもピッタリと當てはまる。成る程、維新の創業に關係した南州、甲東、松菊此ういふ様な人材も、藩の學校が生み出したのではない。彼には少年時代或は藩校の門をくぐつたであらうが藩校の教育宜しきを得たるが故にあれだけの大器と成つたわけではない。ことごとく自己修練の力である、されば諸君が今立派な人物にならうとするならば、何も學校教育の有無によつて、それが決定するわけではない。學問とはそんなものではない、も一度小楠の言葉をかりる。

「古人の所謂學なるものは、我方寸の修行である、良心を擴充して、日用事務の上にて功を用うれば、すべて學に非ざるはなし」

これである良心をみがき人格をきたへ、これを實際生活の上に實現することである。従つて中學を出たからといつて、大學を卒へたからといつて、眞の學問はそれで終る筈はない。

堯も舜も、その一生涯がその學問であつた、孔子も釋迦も、基督も、同じくその一生涯が尊い修業であつた。

即ち刻苦精勵、自己の完成を志すものにとつては、學校教育の如きは、問題ではない。また事實に最高學府を卒へた知識人であつても眞人として缺くる處があるならば、これ一個の知識人たるに止まり、一世の儀表として仰ぐわけには行かぬ。人間がわらいわらくないの標準は、知識のみではない主なるものは徳であるのだ。かるが故に眞の人物は、自助自戒の結果作らるべきであつて他助他成によつて生るゝものではない。

リンカーンは、吾輩の崇拜する偉人であるが、彼の如きは、一年足らずの小學教育をうけたのみであつて、他は獨力獨學全く學校教育をうけた事はない。傳ふる處によると、彼が勞働の傍ら、丸木小屋の中にあつて讀破したものは、第一にラムセのワシントン傳、第二にヘンリーグレーの傳、第三にインツプ物語り、第四にバンマンの天路歷程であつた。

これらの書物によつて、彼はいかなるものを學び得たか。

「自分は公人として、世に立たん」

かく決心した。無學なる一勞働者が、節くれだつた大拳をあげてこう叫んだ時、彼の周圍は嘲笑した。立派な教育をうけたものが公人として立たんとするなら、こは當然のことだが、當時のリンカーンの如きにとつては、痴人夢を説くの類であつたかもしれない。しかも、彼は自分刻苦した。

公人として立つ以上辯論の練習が必要であつて、勞働の傍ら、八哩もある處を徒歩で、討論俱樂部に出かけた。

「君は文法の研究をする必要がある、どうも君の言語の遣方は誤つて居る」

グラハムに注意をうけて、早速文法書をさがしたが、六マイル隔つた隣村にわづか一部しかない。

彼は其處へかけつて、これを借りうけ、かつ讀破して自力をもつて文法に通ずるやうになつた。

かくてこの貧少年は第十六代米國大統領となつて、丸木小屋から白聖館へ出世したのであるが彼の學問は、小楠のいふ方寸の修行である、良心の啓發である、人格の陶冶である。これを生活に實現するに當つては、敬天愛人の政治となつて、ついに奴隸の鉄鎖を斷ち切つた。リンカーンが、堂々たる校舎の中から生れずして、森林の中に建てられた丸木小屋から生れ出でたといふ、今も尙世界の貧少

年に對し異常な刺戟と感激と發奮とを與へて居る。

吾輩の如きも、その始めは九州の田舎町における電信技手に過ぎなかつた。さりながら一度リンカンの傳を讀むに及んで、奮然として志を立てた。富家の子弟何者ぞ、學校教育何者ぞ、自ら鍛へ自勵み、自ら勉むることによつて、自己を完成しようと思へたら。吾輩の今日あるは、彼に負ふところ尠しとせぬ、勿論修行は一生のものと心得て居る、吾輩は現在を以て満足して居るものではない、過去に於て刻苦したるが如く現在に於ても刻苦しつゝあり、また將來においても刻苦する決心である。かくして男子の一生のことは棺を蓋うて定まるのである。

年わかき諸君にすゝむ、諸君は道境に届してはならぬ、不幸に恐れてはならぬ、貧苦に悲んではならぬ。いかなる人物と雖も、自ら切磋琢磨すら事によつて、立派な人格をきづきあげることが出来る。不徳不義の者が、一時世に榮て居るからといつて、これに眩惑されて、諸君が習俗に媚びるやうなことは、吾輩の斷じて與せざるところ。真人の眞價は、生前において認められずとも、必ずや身後において赫々たる名聲を齎す、そこに着目せねばならない。「道徳を樓守するものは一時の寂莫たり權勢に依阿するものは、萬古に凄凉たり」と、かくいふ語があるが兎角、現在の功名を趁ふに急なるの餘り、往々邪惡に墮するものが多い。しかしながら、死後の審判は、極めて公平である。リンカーンの如きも、奴隸解放の爲、南北戰爭を惹起した結果、身邊をねらふものが多かつた。

「閣下の一身は危険ですせひ護衛をつける様に御願します」

周圍から注意を與へたが、彼は聽かなかつた。「自分は自分の責務を完全に果した、審判はこれ死後に求むるが故に、今殺されても最う差支へない」

かう言うて、平然としてわた爲ついに兇徒の一彈をうけて倒るゝに至つたが、正しき心をもつて正しき道を踏むものにとつては、死はあへていとふところでない。

生命は短し、然れども、大人格の光輝は萬世を貫いて、赫々として居る。二十、三十で死ぬのも一生なら八十、九十で倒るゝも一生、一かして今日吾々の心の看板にハッキリと映象となつて残つてゐる人物の中には、二十、三十の者も居る。却て八十、九十の高齡者でもは醉生夢死に終つたものその名さへも記憶せられずして過去の世界に葬られて居るが、例へ若くして死んでも真人として生甲斐のある生を終へたものは、永久に生き得る。死して後生きるの心こそ吾等人間のみが有す尊嚴である。

吾輩はくりかへして云ふ

正規の學歴を経て、小學校より中學へ、事學よりは高等學校へ、高等學校より大學へ、かくして學士となり、また博士となる。貧困の家に生れる青年にとつては、それが不可能であるが故に、身を立てることも出来ぬと思ふたら非常な間違である。

手を拱いてゐても、誰も吾々の人格を完成してくれるものはない、自ら志を起して、自ら鍛錬するより外に途はない。最後の目標が身後の審判にある以上、これに到達するの道は、一にしてつきず、乗物の便によつて樂々と鐵路を走りつゝ、終着驛に出發する輩もある、さりながら、健脚健歩山を越へ川を渡り、こゝに難路をどらねばならぬとするならば、リンカーンの如く、躊躇せずして、雄々しく勇ましく、突進せよ

史上に英名を馳せて、永久不滅の生命を維持して居る東西古今の先輩者の多數は、みな此の難行路を經過して居る。名人の爲し得る處、吾何ぞ爲し得ざらんや、卓然として振起するならば途は、必ずそこに開かれる。古人曰く「志あれば道あり」と。これ先人の立身策にして、また吾輩の立身策、しかして後進たる諸君の立身策でなければならぬ。(完)

### 趣味

身邊の或る一つのものをヨク／＼仔細に觀察すれば自然に其物に對する面白味が生ずるのである  
其れは何物でも構はない物には必ず其物特有の他の物と變つた點がある其の他の物と變つた點が多ければ多いほど其の物の趣味が深いことになる。そして同じ一つの物でも幾度も重れては仔細に觀察すればするほど趣味の度が高まるものである

## 早く人生の目的を確立せよ

大分縣教育課長 渡邊善三郎

予の今日最も痛感することの一は我國は實に國家社會の各方面に於て「行きつまり」の深刻なることである。

### 一、今日の世相

今日の我が國は社會各方面に於て「行きつまり」甚しく、之を對內的(家庭上)から見ても對外的(國家、社會、都市、農漁村上)から見ても我々日本國民殊に學生、青年等は随分苦しい立場に居られて居る。

祖先から或る程度の資産を頂き幸福なる家庭に人と爲れる者は暫く措き農、漁村や都市に住む大部の者は何れの方面から比較的恵み薄き人間同志と云はねばならぬ、進んで相當の學問知識を修め得る者も卒業後の就職と云ふことが痛切なる第一問題である、義務教育のみで終る者も相互の肉體を實際に働かして其に依り日暮しをなして行かねばならぬ中産階級以下——筋肉労働者——小作人——が其の大部分を占めて居る實狀である。



又誠に準備修學の時代を経て實際活動、生活に入るべき筈の有爲の青年にして年々學窓より吐き出される數萬人の中、世に迎へらるゝ者に至りては、僅々二割強に過ぎずと云ふに至りては寔に戰慄を禁ずる能はざるものがある、而も嘗に其の準備を學園に修むる者のみならず、中央、地方共に雄心を抱いて君國に報せんとする青年は決して少くないが一方社會は果して如何なる準備をなして此等の青年を迎へて居るか、之を思へば實に沈痛なる歎きなきを得ないのである、同時に此處に青年並に國家、社會の爲に怖るべき危険がある、思想的病患の如きも兎角かゝる時代、かゝる間隙に乗ずるものであるから青年は勿論、社會も亦此の間の真相を感觸して自ら警め且善處する所がなければならぬ。

## 二、働くことの意味

「食ふ爲に働く」のか「働く爲に食ふ」のか此等の議論は別として吾人が働くのは更に重大なる意義を有せねばならぬ即ち一天萬乘の大君を戴き祖國日本を背負ふて立つ一分子なりと思ふとき吾人は一日たりとも働かすには居られない、單なる自己満足の爲に働くものに非ず單なる自家繁富の爲に働くにも非ず、大君の爲の働きであり開關二千五百八十九年の日本國家を維持し彌榮に榮わしめむが爲に働くのであつて欲しい、然るに現代を構成しつゝある吾人の父祖は遺憾にも上述の如き眞の働きの目的、精神を十分に教示してくれなかつた「何の爲に働くのか？」と云ふ質問に對し彼等は

「自己の幸福の爲に——自家の榮達の爲に——」と答へたのである此の結果は又社會、國家に種々の現象を惹起誘發したと思ふ。

### (一) 惡現象(結果)としては

#### (イ) 青年並に學生の都市集中

働くことが單なる自己の爲、自家の爲のみならば結局金の多い所で働くに限る、朝から晩まで専心働いて一日僅少の報酬しかない田舎よりも製鐵所や炭坑乃至商工業に就職せば多分の手當ありと云ふが如く大部分の者は打算的勘定より多く農村を後にするに至る

#### (ロ) 生存の意義を滅失せしむ

上述の如く働きの最終の目的が國家的にあらず社會的にあらずして一にも金、二にも報酬——と斯くの如くなつては餘りに人間味無く又奥床かしさがなくなることは勿論、更に金錢のみを目的としては人間生存の意義何處に在りやと云ふべきである。

### (二) 善現象(結果)としては

#### (イ) 個性尊重の觀念收得

此の觀念が果して收得せられ得らるゝや否やは尙研究を要す、然れども働くことが本來、自己の爲に——自家榮富の爲に——と云ふ立場より働くものであれば少くとも個性尊重の

觀念に立脚して居るは否むべからざる所であらう、が之には賛成出来ぬ。

之を要するに予は上述の如く働くことの眞目的は根本に於ては一天萬乘の大君を戴き祖國日本を背負ふて立つ一分子なりとの信念を以て一意専心國家の爲に働くことであり、次には自己の幸福の爲に、自家榮達の爲に働くとの心持を以て努力することであると信ずる。

### 三、學生並青年と國家との關係

例令、學生並青年にして上述の如き目的の下に君國の爲に奮闘努力せむとするも國家、社會にして「行きつまり」あらむか十分の働をなし得ないものである、國家社會に行きつまり有らば如何に國家の重きを擔當し得る有爲の青年、學生も遂に時と所とを得る能はず、可惜、其の教養も滿々たる霸氣も之を善用するに途なく不安悶々の情を抱いて轉々たる者の多きに至る國家の損害も亦實に此處に存すと云ふべきである。

蓋し一國盛衰興亡を卜する者は必ずや青年の生活其のものであつて青年の生活が底調したる時は必ず國力が内に萎靡する時代であり之と反對に青年に深く且つ力強き精神力が動いている時代には必ず國家としても新興の氣勢に躍動する時である西洋でも例へば七、八十年前に於ける獨逸及び伊太利統一時代に於ける青年の霸氣は實に精彩激洩たるものがあつた、我國に於ても明治維新時代の青年は何れも一死を以て君國に奉じ新日本建設を目的とする大理想に燃れたものである斯くして今日

の國家が大成したのである蓋し上に聖明 明治天皇陛下を戴いたと同時に此の二心なき青年こそ眞に創造の力となつたのである。

同時に考ふべきことは其の時代が又此等青年を能く迎へ彼等をして滿々たる霸氣を君國の爲に伸べさせた事である、併し時代は移る、今日の青年は如何、予は今日の青年に昔日の霸氣なく勃々たる雄心なしと斷する者ではない、素より往時に比して青年、生活が一層緊張したとは思推されなげせよ、今日の世相が青年をして自由に其の進路を開かじめない事だけは指導の任にあたる者が忘れてならぬ點であり同時に之の打開が考察されねばならぬ所である。

### 四、行きつまれる社會の打開策(各種の社會政策)

思ふに今日は獨り學生や青年のみならず世を舉げ國民を舉げて悲むべき時代に置かれて居るので或る意味に於て國民的受難の時代とも稱すべきであらう、之れ政治家としての責任は勿論、國民として慎重考慮しなければならぬ重大問題である、而して此の悲むべき環境を打開し國民を舉つて國家の爲に滿々たる能率を挙げしむる爲には總動員の躍進がなければならぬ、而して此の間警むべき事の一は徒に退嬰萎縮する事なきよう覺悟することである、而も予が特に學生、青年に同感禁する能はざる所以は學生、青年として其の純眞なる未だ社會の急激なる濁流に試煉を受くべき經驗に乏しき點あるが爲である。

而して今日受難時代の打開策としては政治、經濟、教育、思想等各方面に互々種々あるべきも其の主なるものを擧ぐれば

(一) 農、漁村に於て種々の政策を講ずること

イ、農漁村民心の改善が農漁村改善の基調である

ロ、農村問題の解決をなすこと

自作農の維持擴張

小農及小作農の保護

肥料政策

税制の整理

農村の金融問題

ハ、農漁村に於て合理的産業經營をなすこと

農業其他の經濟的經營を重視すること

一年間の勞働計畫を立つること

夜の時間の利用

(二) 教育上に種々の政策を講ずること

イ、知育偏重を避け情操教育に重きを置くこと

ロ、移植民教育に重きを置くこと

ハ、中等學校の實業學校化

ニ、教育の地方化、實際化

ホ、卒業生の指導に一層力を用ゆべきこと

(三) 社會政策として各種の方法を講ずること

イ、思想善導

ロ、教化總動員の計畫

ハ、移植民の道を講ずること

ニ、海外發展の思想養成

ホ、体育獎勵に重きを置くこと

#### 五、學生並青年の進路

觀じて茲に至れば今や獨り青年と云はず學生と云はず我等は國民として試練の時代に置かれて居る之を打開することが總動員の努力でなければならぬ、殊に我等の切なる願は其の至誠熱烈なる金鐵も之を溶かす雄心の所有者たる青年、學生が有する愛國奉仕の感激に對し時と所とを得せしめて自

由の天地に活動せしめたい事である。

學生並青年自身も十分今日の世相を通観して一には君國の爲に努力するの覺悟あり二には自己運命の開拓の爲に熱心努力せられたいものである、之が爲には早く特に學校卒業前に人生の目的を確立して以て「我等は今にして何を爲すべきか」「將來如何なる方面に進むべきか」即ち自己の進路を考索せられたいものである、之れ子の如く志を青年、學生に有する者の常住坐臥忘るゝ能はざる所である、同時に予は學生並に青年と共に此の時代を打開することに精進したいと庶幾ふものである。

×

×

×

×

×

×

×

×

## 先づ脚下より耕ぜ

農學博士 恒藤規隆

### 一、國家發展のメソッド

水は平を求めて流る。狭小なる國土の上に、蠢爾たる多數の人口を有する日本が、その過剰人口の調節策として、海外發展の手段を執れること、固より當然でなければならぬ。年々八十五萬の人口増加は、廣大なる國土を有するものと雖も、之れが始末には相當の考慮を要するであらう。況や狭小なる島帝國に於てをや、加ふるに國內に於て經濟生命の根源たるべき原料物資に乏しく、今日既に衣食住の原料一として自給自足し得るものなき状態である。斯の如く日本の今日は、宛も四十年前の獨逸の如く、強力なる内部的壓迫により、海外發展を強ひらるゝの境地に立つて居る。然るに日本移民は、今や世界の到る處に於て排斥され、移住禁止の制札は高く掲げられ、其門戸は永久に開かるべくもない。米國は其建國の理想をも破棄して、排日立法を敵てした程である。世界各地、自哲人種先住の地は、何れも列強の勢力範圍に屬し、強いて之に割込まんとすれば、經濟的競争は國家相互の衝突

をすら惹起せんとする虞れがある。然らば日本は今後如何にして此大人口を養ひ、發展の方途に出べきか、此過剰人口の調節、又は食糧原料の供給を策すべきか、惟ふに、是は實に我國策の根本を爲すべき問題にして、優勢國たらんとする日本の解決せざるべからざる發展策である。

發展の形式は固より人民の移住する移民政策のみではない。政略的施設、經濟政策等の形式あるを認むるが、現今世界の趨勢は、漸く經濟的手段に信頼して、其利害の打算を以て發展の要件となすに至れること、茲に贅言を要せぬ。則ち日本は其人口激増の對策として、新なる經濟政策を樹つるの外適當なる方策を見出し得ない。是れ吾人が茲に述べんとする食料問題の根本策にして、内に我日本民族の生存を完うせしめ、外に世界と共に國を成すの策を致すこと、國際共存共榮の絶好策なるべきを確信するものである。

## 二、人口調節の三案

### 移民は賽の河原の石積み

世界の人口分布状態を見るに、其人口國別數に於て、日本は世界大國中の第四位に在り、人口密度に於て又第三位に在る。而かも我國人口増加の趨勢は、明治二十七年以後、同四十一年に至る十五年間は平均毎年一千人に對し十一人、九の割合を示し來つたが、其後増加率は十四人、五に上り、其自然増加のみを検するも、最近二十ヶ年平均千人につき十一人六となり、之を人口に計上すれば、一ヶ年に六十

五萬人の割合を以て増加しつゝあるを知る。即ち一年間の増加人口は、實に石川縣富山縣等の現在人口數に相當するものと云ふべく、こは經世家ならずとも、秦人、越人の肥瘠を見るが如く輕々に看過し得ざる事實であらう。而して此過剰人口を遠く海外に移住せしめ、以て日本人口の増殖と食糧の不足とを調節せんとすれば、日本移民禁止の制札は世界各地に掲げられて、其障礙困難寔に排除し難きものがある。

南米は太平洋の彼岸に於て、日本人の爲めに開放されたる移民地の如く思惟せらるるも、其内我移民の自由に入國し得るは僅かに伯爾西一國あるのみ。而かも其地理的關係は邦人の移住に便ならず、政府の奨励あるも、年々移民三千を越えざるの状態である、今後如何に之を奨励するも、年々一萬の人口を送附するは覺束なきことに屬し、移民に依る日本人口問題の解決は到底不可能なりと爲すも過言に非ず。試みに大正九年十月の我國勢調査に見るも、全世界に散在する日本人の總數は六十四萬八千九百十五人に過ぎず、其内六萬三千四百五人の朝鮮人と、四千七百六十二人の臺灣人を差引くに於ては、内地人の總數僅々五十八萬四百二人、我國開國以來五十餘年、極力海外發展を奨励したる結果が一ヶ年の人口繁殖數に充たざるは、以て如何に海外移住の困難なるかを推察せしめ、移住に依る人口調節の殆んど不可能たるを思はしむるものがある。

論者あり、這次の米國に於ける排日立法を以て、青天の霹靂となし、彼の反人道的態度を非難しつ

あるも、談笑坐中、竊かに鳩毒を置く者獨り星光旗國のみに非ず、今日正義は尙國際關係を支配するの力を持たぬ。國威の及ぶ所少き地方への移民が、遂に養の河原の石積み同様、國力發展の礎石とならざる一事は更に移民政策の難點でなければならぬ

ロ、消極政策は國民の英氣を削ぐ

而して又、人口問題、食糧問題の消極的調節策として、今日世に唱導せらるゝものは、産兒制限、食物調節、特に雜食の獎勵等を其主なるものとす。

第一の産兒制限に關しては、時にバートランド、ラッセルやエチ、ジー、ウエルスの如く、世界的思想家にも、日本の人口調節は只之に依るの外なかるべしと忠告する者あり。最近我國に於ても之を高唱する者漸く多き模様であるが、之を歐米の實際に徴するに、過去二十年の事實に照し、本法に依り人口の増加を消極的に調節し得たる國は、世界中佛國の一あるのみ、英米獨其他に於ても既に久しく實行せられ、和蘭の如き政府自ら之を獎勵し居るにも不拘らず、何れの國も過去二十年（歐洲大戰の年をも加算して）の平均人口千人に對し七人以上十四人、六の割合を以て増加しつゝあるの情態を知らば、我國の如き國情民風の異なる國土に於て、斯かる方法に依り、人口の調節を行はんとすは、百年河清を待つゝの類と云はねばならぬ。

更に第二の食糧の經濟的利用、雜食獎勵等に依る食糧調節は、米國に於ても近來漸く唱導せられ、

其研究の結果は絶えず各方面に宣傳せらるゝに至つた。其内の主なるものは國民常食の標準を、現在の米七雜三の割合を變更して、米五雜五の雜食を爲すに於ては、當分日本の糧食は自給自足し得んとする説、或は又我主食糧たる米に代ふるに馬鈴薯を以てすれば、人口一億八千萬に達するも優に自給不可ならずとすの説である。併しながら、現在の農耕地面積より今日以上の増收を擧ぐるも、其量は僅少なるべく、同時に國民の嗜好を變更せしむることも、民度の向上、適應性の訓練等に俟たざるべからざるが故に、之を以て急速なる人口増加の所要に充てんとするは、全く不可能と謂ふも過言にあらざるべしである。

而も此の如き消極政策は、國民の英氣を喪失せしむるの結果を招來すべく、又、吾等が偶々日本國に生れたるが爲に、殊更かゝる制限を加へらるべき所由なしとも謂ひ得るのである。産めよ、池に滿つるまで。食へよ、腹に飽くまで、斯くてこそ國民に衝天の意氣舉がり、國家に激瀾たる生氣起らん。觀じ來れば、我日本の人口、糧食問題の解決は、今日の場合一に拓殖開發、生産増加の方針により廣く内外より物資を多量に生産、供給すべき經濟政策の外、力を傾倒するの策あるべしとも思はれぬ

### 三、生産第一の經濟策

(イ)母國の土の香に親しめ

上述の如く、我民族には萬里の長風に送られて、海外に運命を開拓するの自由なく、さればとて、

消極策に甘んじて、人口、食糧の調節に心を摧くの意志なしとすれば、其年々激増しつつある人口を如何にして處理し、不足の食糧、原料を如何にして補給すべきか。そは唯生産第一主義の經濟策樹立の他にはないのである。

我等は先づ脚下の内地未開墾地開拓より始めて、次いで朝鮮及支那大陸の拓殖開發に國力を傾倒せしめ、以て之が解決の鍵を、其自然の寶庫に求めんとする者である。其地盤は常に東亞の一部に局限されては居るが、幸にして滿蒙に於ける日本の特殊地位は、稍々列國の諒解する所となつた。而して又日支の關係も特に一轉の機に際會したる觀がある。我等は此地理的優勝地に據りて、永遠の計を確立せねばならぬ。

日本内地の農作が極端なる集約法なるの故を以て、之に未墾地を得んとするは、石人身上に毛を求めんとするの類なりと謂ふ者がある。然れども、此拓殖開拓の方針に依り畫策するに於ては、一見限なく開墾し盡されたるが如き狭小の日本内地と雖も、今後開墾して耕地と爲し得る見込のもの、猶田畑を合して二百萬町歩に及ぶ。我國の農牧用土地面積は國土全積の一割七分八厘に過ぎず。英吉利の七割七分二厘、伊太利の七割六分三厘、佛蘭西の六割九分五厘、獨逸の六割四分八厘、其他歐洲諸國が概ね六割乃至七割なるに比較して、甚だ寡なるものである。

又耕地のみに就て謂へば、我現耕地は國土總面積の一割五分に充たぬが、歐洲諸國は四割乃至五割

を算してゐる。我國如何に山岳多く、河川多しと雖も、斯農地の僅少なるは必ずや其原因あるべく、之を以て決して開拓の極度なりと斷定するを得ない。今比例尺五十萬分の一の全國圖を基礎とし、約十五度以下の傾斜地面積を算出し、尙河川、崖地、都市敷地、荒廢地等を四割と見込み、之を控除し殘數を以て平地と假定し計算すれば未開墾地は二百餘萬町歩に達するのである。其内水田見込地として七十七萬六千七百町歩を計上するを以て、之を年に三萬九千町歩宛開拓し行くに於ては、今後二十年間、米穀の不足を免かれし得ることとなる。但し最近の内地開墾趨勢に調すれば、明治三十八年以降二十年の平均面積は年五萬三千町歩に過ぎず、内水田は僅少一萬三千町歩の割合なるを以て、今後は何等か開墾助成の方法を講ずるの要がある。

而して更に朝鮮の拓殖開發に力を及ぼすに於ては日本の食糧給源は決して悲觀すべきものに非ざるを觀取する。(完)

◎寒牡丹の趣味。寒牡丹は又冬牡丹とも云ふしかし冬から春へかけて咲く一二月頃が最も多い。寒中咲く花は水仙でも山茶花でも梅でも凡て小形のものが多い。さした花は夏から秋へかけ凡ての草木の繁茂する時期が多い。寒牡丹の特色は嚴寒の頃眞夏に咲く花のようなふさふさとした花のびく／＼とした葉を持つのが珍しいのである。春と夏の交花の類の澤山ある時期でさへも牡丹は「天香國色」さか「富貴の花」さか稱されて珍重される花が萬目簫條として絶へて花のない雪の中に咲く點が珍重される價値のある處で趣味は其所に存する。

# 忠義の魂

頭 山 満

古今を通観して、最も愉快に感ずるのは、何と言つても四十七義士であらう、我輩も子供の時分から四十七義士が大好きで、大の義士崇拜となつて居たから、特に四十七士の人格風采が惚ばれる。義士は皆揃ひも揃つて愉快なる人物であるが、堀部親子の如きは、大に異彩を放つてゐる。彼の彌兵衛老爺の如きは餘程豪膽な中に面白い所がある。あの老爺なればこそ、あの豪放不羈の安兵衛を養子にする事も出来たのである。あの老爺が始めて淺野侯に仕へる時の話など随分振つて居る。彌兵衛が淺野侯に惚れ込んで、どうしてもあの人に仕へねばならぬと決心して、八方に手を廻した末、其當時の江戸詰めの家老の何とか云ふ人物に面會する事となつた。家老は、一体汝は何が出来るかと思つて、拙者は別に是れと云ふ藝もありませぬが、書道だけは一通り心得て居りまして、諸侯の御祐筆などにヒケは取りませぬ。恐れながら御藩中の書手と云ふ人にも劣るまいと思ひますと述べ立てた。家老はそれを信用して君侯に言上して愈々召抱へらるゝ事となつた。それから四五日過ぎて、淺野侯は何

か書き物の御用があつて、其家老に今度抱へた人物が書道の名人と言ふから、之を書かせよと命せられた。家老はその事を彌兵衛に言ひ付けると、彼は頭を掻きながら、それは飛んでもない事で、拙者は一体字など申すものは右に曲げるか左に曲げるかも存せぬ位で、御大切の書き物など中々以て出来る譯でありませぬと臆する態もなく言ひ切つた。家老の驚きは一方ならず、それは大變である、貴公は何も出来ないが書だけは名人だと云ふから、其の事を言上して御召抱へになつたのに、今更字は書けぬなど、あつては、貴公許りでない貴公を推薦した拙者迄が、君侯を欺罔した罪を免れない。何とも閉口至極ではないかと、非常に困惑して居つた。而かも彌兵衛は儼然として誠に御氣の毒の次第である、併し拙者は此の君以外に御奉公する人はないと決心して、色々苦心したが、中々容易ではない此間貴殿から何が出来るかと聞かれた時も何も出来ないと答へたなら、斷られるに決つて居る。そこで書道の名人と申したのは、召抱へて戴きたい許りの方便で御座る。是非君侯に奉公したいと思つた願が叶つて、一日でも御家來となつた以上は、最早毛頭思ひ残す事が御座いませぬから、如何様とも御處置を願ひたい、一体拙者は別にこれと云ふ藝能は御座いませぬ、一旦御奉公した以上は、何時即刻其座に於て一命を召し上げらる共、決して未練がましい心は起りませぬ。よく理不盡の仰せでも何でも立ち所に、此一身は君侯に捧げます。是れだけが拙者の藝能でもあり、長所で御座います。書道の名人など、申したのは、唯御召抱へになりたいた許りの拙者の誠から出た嘘と申す者、最早一日



でも自分の願つた御方と君臣の誼を結んだ以上は一身一命は愚かな事、如何なる御處置でも、甘んじて受けますに依つて、左様言上願ひ度いと、滔々と述べ立てた。家老は煙に巻かれた体で閉口したが、隠す事も出来ないで、其儘君侯に言上すると、たとひ、字は書けなくとも、其言ひ分が面白いからかまはず抱へておくと仰せられたと云ふ事である。此の事實は嘘か本當か知らないが、あの彌兵衛老爺の事だから、此位の事は朝飯前にやるだらうとも察せられる。此忠義の精神が日本の魂である。此魂を最高度に發揮したのが即ち四十七士である。今日の如き内外國難の時局に際しては特に此忠節義勇の精神を興さねばならぬ。(完)

## 建 國 の 精 神

床 次 竹 次 郎

歐洲戦争の際、英國の大學生は、義勇軍に加つて、戰場に臨んだものである、國家有事の場合、奮つて國難に當り、壯烈の働きを爲すことは、國民として大に推奨すべき事柄である、忠君愛國と曰ひ

義勇奉公と云ふ事は、日本國民の魂とする所であるが、英國に於ても、此精神が、國民の間に流れて居る、學業に従事する大學生が、手に武器を把り、身に軍服を纏ひ、櫛風沐雨、よく千軍萬馬の間に馳驅し、粉骨碎身の艱苦に耐ふる事は、餘程の決心がなくては出来ない事である、彼等の戰場に臨んで、突撃に移るや、殆ど運動競技に従事するが如く、戦争の寧ろ愉快なものなる事を語つて居つた云ふ、英國のみならず、爾餘の諸國に於ても、青年や學生の活動は、随分注目に値するものがあつた道徳は世界に共通する人類の生命である、忠勇義烈の精神は、諸外國に於ても、相應に存在して居る事を認めなければならぬ、日本國民は、道徳に於ても亦傑出し居る、日本の國体、日本の國民道徳は、世界に冠絶する美點を持つて居る、國を榮むること宏遠に、徳を樹つると深厚であつて、建國の根本に於て己に他國と其趣を異にする、この國本の眞義を精察し、日本國民の天分を全ふし、世界に對する日本國の使命を完成するに力めなければならぬ、近來頻りに人心の變化が傳へられる、不健全なる思想が流行し、往々國民としてこの本分に負く言動あるを見聞する、是の如きは國家の爲め實に不祥なる事である、政治及教育その他社會公共の事業に従事する者は、深くこの人心變化の原因を尋ね、その禍根の何れの方面に在るやを調査して、之に對する最善の方法を講せなければならぬ。

# 國民教育に對する根本政策

早大助教授 松 本 洪

## 一 參政權と教育

立憲政體は國民を舉げて政治に參與せしむるものである、政治は國の大事である、其の得失は直に國の盛衰、民の休戚に關係する、學なく識なくして妄に之に參する事は出來るものではない、古は政務に與るものは士といつて、農工商の上に置き、特別の待遇をしたものである、従つて士は學問人格の上に相當の修養あるものとしてあつた、而し此の士は今日の所謂役人で、立憲政體の參政權とは自ら異なる所がある、國民一般の有する參政權は帝國議會の議員選舉に一票の投票權があるに過ぎぬ、是には必ずしも多くの學識は要せぬが、それでも其の候補者の人格識見と、其の政見とを了解せずしては、投票は出來ぬ善である、運動員の口車に乗り、世間の評判に眩惑し、雷同し、多少の日當で買収されて、無我無中で投票するものは、未だ之を稱して參政といふには足らぬ、然らば苟も參政權を行使せんとすれば、少くとも新聞の政争記事は讀めて、政治の何の狀たるかを多少たりとも知る所があら

ねばならぬ、之を知らしむるは教育の外はない、是れ國民に教育の義務を課し、義務教育を四年より六年に、六年より八年に延長せんとする所以である。

## 二 兵役の義務と教育

國民は獨り政治に參與するのみならず、國民皆兵主義によりて、皆國家の干城となつて、一朝事ある時は奮然身を挺して陳頭に立つの義務を荷つて居るものである、孔子は「教へざるの民を以つて戰ふは是れ之を棄つると謂ふ」と教へて居る、御尤千萬の事である、孔子は又「善人民を教ふること七年なれば、亦以て戒に即かしむべし」と教へて居る、七年の教育、これは兵役の上よりするも、國民全部に仕込んで置かねばならぬ、國民教育は實に國家の大事にして、また一日も緩うし難き急務である。

## 三 國民教育の發達

明治以來我が國力を國民教育に用ひたるは、實に莫大な者である、小學制度の布かれて以來數十年今や其の効果は著しく現はれて、苟も都會と名の付所、目ばしい町村は云ふまでもなく、津々浦々の寒村の果まで、小學校の設けあらざるはなく、何れも輪魚の美をなし、森の彼方、田畑の真中、點々たる小茅屋の間に、巍然として路行く人の目を驚かして居る、而して其の數は年一年に増加し、既に全國數萬の多きを數へて居るか、猶は不足に不足を重ねて、都鄙共に二部教授の行はれる所は殆ど稀なる有様である、兒童は男女を問はず、聾啞痴呆に至るまで、滿七歳以上のものは皆就學し、文字通

りに咄嗟の聲が天下に満ちて居り、樵夫蠶女と雖も眼に一丁字なきものは殆ど無くなつて來た、洵に聖代の盛事と謂ふべきである。

#### 四 教育費の負擔過重

教育の盛なるは邦家の爲に慶賀に堪へぬ所であるが、頭を回して此の教育に要する費用の方面を窺いて見ると、是は又塞心に堪へぬ事實が存して居る、工商を以て殷賑なる都會地は別問題として、全國人口の六割以上を占むる農村に在りては、直接國稅たる地租の納稅額に對し、實に三倍以上の府縣稅町村稅が賦課されてゐる、而して其の大部分は實に教育費である、近年國庫より地租の總額と相似たる六七千萬圓の補助金があるに拘らず、猶此の如き巨費を要して居る、此の教育費は年々増加するのみで、永久に減する見込はない、地方、殊に農村は此の教育費を負擔するが爲に、土地の收益は平年作以上の場合に於てさへ、耕地の賣買價格に對し三分に足らぬ状態である、金利の最低たる公債にしても、事實上六分平均には相當して居るのに、帝國の首都たる東京市に於て、獨占といふ特權をさへ與へられて居る瓦斯會社が、九分の利益配當を不足とし、過年來利率増加の猛運動をして居た世の中に、耕地の收益のみ三分にて甘せねばならぬ農民の負擔過重は誠に氣の毒の至りである、さらぬだに農村疲弊の日に甚しき際、此の成り行きに任せ置いたならば、地方は教育によりて破産せざるを得ぬ運命ともなるであらう近年教育費の國庫負擔の増加、及び地租の地方移讓等の議論が盛に唱へらるゝのも、農村救済の急なるを示すものではなからうか。

#### 五 既往教育の効果如何 一

かく地方農村の住民が、自家の生活を脅かさるゝまでに、兒童の教育に熱中して居るが、其の教育の効果は果して所期の目的を達して居るであらうか、國民を擧げて眼に一丁字なきもの、殆ど無くなつたことは事實である、不十分ながらも手紙を読み且つ書きて、親戚朋友同志の間の通信には事缺かぬ様になつたことも、否むべからざる所である、文はやりたし書くは持たずとは、昔話としての笑草になつて了つた、是は古人の想像もし得ざりし大成功であらう、しかし立憲政體の要求する所たる小學校卒業者の全部が、新聞の政争記事を読み得て理解し、代議士候補の人格政見等を正しく批判し得て、清き一票の投票權を有意義に遂行し、明治天皇が憲法發布の勅語に於て、我が國民に對し、其ノ朕カ意ヲ奉體シ朕カ事ヲ獎順シ相與ニ和衷協同シ益々我カ帝國ノ光榮ヲ中外に宣揚シ祖宗ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナラシラムルノ希望ヲ同クシ此ノ負擔ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ハサルナリと期待された御聖意を虚しうせぬ事が出來て居るであらうか、大正天皇が國民教育の普及を認めて、普通選舉を御許しになつた敕諭に幸かぬ事が出來るであらうか、率直に言へば國民を擧げて、參政權を遂行し得るに至つたであらうか、是は篤と考慮せねばならぬ。

#### 六 既往教育の効果如何 二

教育普及の効果は商工業者にしてそれ／＼組合を組織せぬものはなく、工場其の他の職工雇傭人より一般の労働者に至るまで、各々其の團體に於いて組合を組織し、相互の扶助、奨励より、利益の保護、権利の主張等、盛な活動振りをさせて居る、數千年來天地自然を相手にして、帝力我に何か有らんと、勤勞以外何事も思はざりし農民さへ、種々の組合が出来つゝあつたが、普選法の發布せられて以來は、俄に勞農黨とか、農民黨とかいふ政黨さへ組織されて、やがては天下の支配權をも其掌中に握らんと意氣込む形勢となつて來た、此の點から見れば、教育の効果は既に十分とも云へさうである明治天皇の期待されし所は既に實現されたりとも見られ様が、世の中の事はしかく簡單には皮相上の觀察のみで判斷する譯には行かぬ、彼の「柑を賣る者の言」の如く、其の外は燦然たる玉質にして金色なりとも、其の中は乾ける敗絮の如きものなしとも言へぬ、彼の勞働組合、農民組合の内情は果して各人の教育上、自覺する所ありて、其の内的要求上己むに己まれぬ所から出發せりや否や、或は二三のリーダーに率ゐられて、無我無中で雷同的に騒いで居るものが多いのでは無からうか、或は嘗て筋肉を勞した事もない一種の智識階級の野心家に利用されて、何の考へもなく組合に加入して居るものがあるのでは無からうか、或は學校の窓から少しばかり外國の空氣を吸ひ込んだのみで、實際には烈日の下で禾を鋤して汗を禾下の土に滴らし、粒々の辛苦を経験したのでもなくして、小作人をおだて、衣食の料を得、それを踏み臺に社會的地位でも得ようと圖る横着者に欺かれて居るものが有りはしま

いか、是亦罵と考究せねばならぬ所であらう。

#### 七 人各能不能あり

尤も現在世に立つて居るもの、大多數は、國民教育の猶ほ不十分な時代に育つた人々であるから己むを得ぬが、其の後四年の義務教育は六年となり、今や將に八年にもなるとして居る、故に十年後の社會状態は自然今日とは面目を一新し來り、苟も參政權のある程のものは、一廉の學と識とを備へたものとなるであらうし、又八年教育を受けたる人々の時代ともなれば、更に面目一新し來つて、七千萬人悉く古の士分同様の智識と人格との修養が出来るであらうも知れぬ、其の時は我等は天が崩れて墜らたらごうしようと憂へた杞人の類と笑はれるであらう、誠に左様なれば邦家の幸は是に若くものなしである、けれども現在の學校を參看しても、甲乙丙丁悉く所定の學科を完全に理解するものは考へられぬ。

天地萬物は其の何種なるを問はず、決して平等なるを得るものではなく、長短、大小、強弱、優劣等の差別あるは免れざる所である、人また自ら才不才、能不能ありて一樣に行くものでない、上古は教育法の發達しない爲もあつたらうか、孔子程の聖人でさへ國民の悉くを教育することは不可能なりと諦めて「民ハ之ニ由ラシベシ、之ヲ知ラシムベカラズ」と歎じて居る。後世此の語を曲解して、孔子は「民が政治の内容を知つて彼れ此れ非議し始めると面倒であるから、態と民に教育を施さず、之

を野生のまゝの愚物にして置き、政治方面の事は一切理解なからしめるのである」と説くものもあるが是は秦始皇帝の宰相の李斯あたりから唱へ始めた事で、決して聖人の本意ではない、孔子は民に知らしめ得るものならば、如何なる教育をも施すことを辭せなかつたであらうが、凡民以下は到底教育することを得ぬと知つて諦められたのである、民を愚にして置きたいと考へるものは、姦惡な政治家ならざる限り無い事である。

#### 八 畫一教育の非理

我が國は建國以來農を國本として來た關係から、「タミ」は農夫といふ意味から出來た言葉で「田人、田部、田身、田見」などと、語源研究者は稱へて居るが、漢字は古人が多年の經驗から作つたものと見れば、説文には「衆萌也」と説き、而して萌とは暗として知る所なきの謂であると注してある、苟子禮論の注にもまた民は沢として知る所なき者と云つてある、其の他「民なる者は冥なり」といひ一民の言たる萌なる、萌の言たる盲なり」ともいつて、一般の民は結局思ふ様な教育も出來ず、又少々教へても物の道理を知るに至らしむることの難きものとしてある、時代の進歩、人智の發達は今日も猶然りとは、決して言はれぬが、如何に教育法が進んでも、萬民を同様に教育する事は出來得べきものではない。

肥沃の土地は善く物を生ずる點に於ては、何れも同様であるが或は稻に適し桑に適し、蔬菜に適し

て、其の生ずる所の物を同じうせぬ、唯々荒瘠斥鹵の地のみは、見渡す限り黄芽白草と古人と云つて居るか、國民全體を同様に教育しようとするれば、水平線を非常に引き下げて、日常生活の用を達し得れば足るといふ黄芽に止めねばならぬ、是に於てか、秀才教育といふ論が段々高くなつて來る。

#### 九 秀才教育の必要

早稻田大學の有力者に二男子が有る、甲は何と努力しても、師父がいくら心配しても、中學二年より上に上級することが出來ずして廢學し、乙はやつと四年までこぎ付けたが、到頭そこで行止りとなつた、學校に於ては低能兒の標本ともされたらうか、其の後甲は好きな寫眞を始めることノキ、上達して、當時天下第一の譽の有つた小川一眞氏さへ舌を巻く程の成績を示し、乙はまた三味線を執つて斯道の家元の杵屋一家の者を驚かし、今は天下有数の達人として、其の道の人々から敬はれて居る、按摩に鍼に音樂に成功せずして、盲目の身を以て學問に大成功をなした埒保己一もある、相撲界の大關横綱は必ず學問界のフンドシカツギたるを免れる、人格天稟を異にする以上、其の天職に従つて其の才を伸すを眞の教育とすべきであらう、秀才教育とは即ち是である。

意ふに明治天皇が「此ノ負擔ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ハザルナリ」と宣らせ給ひしは、國民一人殘らず憲法の精神を知りて政治に參與する様になることを期待されたものではなからう、國民の大体を代表するに足るだけの人々を指されたものであらう、其の餘は之に由らしめて行くより外に仕方はな

い、よし國民の義務教育を八年に延長しても、猶政治の何たるかを解するに至らぬ者あるを免れぬであらう。故に全國一般に八年の義務教育を課するは、其得失は大に考慮を要する所である。

#### 十八年の義務教育

八年の義務教育を課するとなれば、教育費は更に八分の二以上を増加せねばならぬ、今日でさへ農民の負擔過重で教育費が農村疲弊の因となりて居るのに、更に數千萬圓を増加したならば、農村は如何なる状態となるであらうか、それは國庫に於て負擔すれば好いことでもあらうが、十五六才と云ふ勤勞の習慣を付くるに最適なる時期を、學校生活にあこがるの徒とならぬとも限らぬ、今日でさへ農村疲弊するにつれて都會の膨脹するのは、一面教育の弊にあらずとは謂ひ難いのに、若し八年の義務教育が此の弊を益々助長する様になつては、邦家の前途に取りて、利害得失果して如何であらう。

余は決して國民をより多く教育することに反對するものではない、されども本來學問には不向な者にまで、強て畫一的に長期間の教育を施すことの得失を考慮して居る者である、六年間の小學教育は農民として自用を足らす位の文字は誰にも覺われよう、且又引續き教育するに足る素質ありや否やも品定めすることが出来よう故に強制的義務教育は、一先づ此の邊で打ち切り、自然の節に一節にかけて見込あるもの、みに、更に二年の高級義務教育を施すことにすれば、教育に無理がなく、又無駄がなく、才も不才も、能も不能も各々速に其の所を得る様になるのであらう、然るに其の人其の人の

特性特質を顧みずして、國家の威力を以て畫一平等に教育せんと試みるは、國民を擧げて黃芽白華たらしむるもので、教育上の荒唐斥函の謗を甘受せねばなるまい。

#### 十一 教員不足に因る弊

被教育者の増加は直に教育者の増加である、需要の多き所は物價騰貴し、品質下落するは己を得ぬ事情ではあるが、近年小學校の増設に伴ひて小學教員の不足甚しく、各縣に男女の師範學校を置き、給費制度を設け、兵役輕減の特權を與へ、更に年數回の檢定試験を行ふ等、あらゆる手数を盡して教員の補充に勉めて居るが、其の結果は纔に規定の資格さへ備へて居れば好しとし、學力の貧弱は論ずるの邊がない、況や人格の高下、思想の善惡等をや、是等は始より問題とするを得ぬ所である、試に各小學校を參看して見るに、何れの府と縣とを問はず、モットモらしい年輩の先生は甚だ少くして、思想未だ定らず、且動もすれば危激に陥り易い廿歳前後の若先生の多きに驚かされる、女教員亦同様である、是等の先生は學科の教授、即ち智識的教授にも危なつかしい感なき能はざるに、人格的陶冶思想的涵養等の教育上の特に大切なるものに果して遺憾ないのであらうか、殊に知らず、此の若先生方は、我が國體の尊嚴、建國の精神、我國固有の家族的道德、敬神崇祖の念等には何程の自得せる所があるであらうか。(未完)

## 處世と學問

元東洋大學助教授 桑原重矩

職なきは憐むべし

孔子の語に「飽食暖衣、逸居して教なければ禽獸に近し」とある、人間としてこの世へ生れて來ました上は、何等かの職業に従事しなければなりません、單に衣食の途を得ると云ふ問題ではありません、祖先の遺産に依つて座食し得る者も、徒らに無爲に一生を終るのは、甚だ恥づべきことであります。

この國家、社會は忠實に職業に従事する人々に依つて維持せられる、何等かの職業に従事することは、獨り生活の方便たるのみではありません、又國家、社會に對する義務であります、西聖の諺に「勞働は神聖なり」とはこのことを意味する、フランクリンはいつた「立てる農夫は、座せる紳士よりも高し」と又孔子は座せる紳士は禽獸に近いとも云つて居ります、坐食を貴しとして、職業や勞働を輕視し、又は勞働を卑しむ風があるのは、日本人の最も戒むべき一弊害事であらうと思ふ。

職業は如何にして撰ぶか

そこで職業の撰び方、即ち職業の撰擇方針如何と云ふこと、これが一番大切な問題であります、世間の多くの人は、職業を撰ぶに方つて、先づ第一に、世の中の需要如何を觀る、こうしたことが果して當を得た態度でありませうか、西人シドニー・スミスは、

天性の欲する事業に従はんか、汝は必ず成功すべし。天性の欲せざる事業に従はんや、汝は全然事業に従はざるよりも萬倍悪し、と云ふて居ります。

又サー・ヘンリー・リットン、バルフーは、

予は徹頭徹尾反覆すべし、曰く、吾等は永く我が性質に敵し得るものに非ず、我が性質に敵して勝利を得るは、能はざる所なりと、人生成功の原則は、吾が方向を定むるに方りて、我が體質と性癖とに逆らはず、寧ろこれを利用するにあり、と云つて居る。又エマーソンは、

人間は或る種の職業を好む性癖あり、その職業に従はんか、必ず世間に用ひられ、幸福を受くるに至るべし、稱して成功すべき天運と云ふ。

と云ふ風に先賢の偉人は教へて居るのであります、その何れを是とし、何れを非とせんか、將に學窓を出でんとする若人達の篤と熟慮すべき問題ではないか。

先づ自己を顧みよ!!!

天性の存する所は、天命の存在する所であります。天が人に或る種の趣味、嗜好、性癖を授けたのは、その方面に於きまして、生活させやうとするのである、と申し上げることが出来ます、己に適した職業を撰ぶのは、天の命に従ふことになるのであります、己に適した職業こそ文字通り即ち天職であります。

先賢者の所謂「己れ自身を知れ」と云ふことは、哲學的にも考へられますが、通常の意味で申し上げれば、己の天性、性癖、趣味、又は嗜好と云ふことを知ることであり、單に世間の需要如何を見まして、職業を撰ばうとし又は撰ばさんとする人は、己れ自身又はその人を知らないのであります。

只知らないだけならばまだしもですが、己自身を侮るのであります、他と異なる個人性は所謂、天性、性癖、趣味、嗜好等から成立する、個人性に従ひまして、個人性を發揮するによりまして、生活の意味があるのであります。世間の需要をのみ見る人は、自己を物的に取り扱ひ、個人性を蔑視するものであります、即ち自己を侮るの甚だしいものと云はねばなりません、然うでなければ、そんな人には個人性がないのである、實に恥づべきこと、云はねばなりません。

#### 「所謂」一藝一能の人

職業を撰擇するに方りまして、世間の需要を思ひ考へる方は、畢竟報酬問題に捉はれるのである、

例へば醫者はこれ／＼の収入、軍人になれば、これ／＼の収入、書家は何うこう、商人はこれ／＼の収入と云つた具合に、先づ第一に収入を考へる、さうして世間の需要の如何のみ問ふて、自己の天性、性癖、趣味、嗜好の如き個人性を等閑に附するものが多いのですが、これは甚だ宜しくない。

凡そ學問なり、技藝、其他百般のことを學ぶには、學問は學問そのもの、技藝は、技藝そのものと云ふやうに、即ち直接その者に興味を以つてしなければならぬ、報酬を目的とする修業は、間接的興味の修業である、間接的興味の修業は、必然的に上滑りになつてしまひます。

即ち報酬が得られるやうになれば、その時限り弊履の如く打ち捨てられてしまふ、斯くては學問、技藝其他百般のことは、その堂に上ることは出来ない、假りに或は堂に上り得たとしても、室には入ることは、全然不可能なことであります。

現今の輕佻浮薄なる、今日の學生は、只單に卒業のために勉強し、一枚の卒業證書を握ると同時に各自が學んだ書物を抛つて顧みない方が多いではないか、彼等が卒業を目的とするのは、即ち報酬を目的とするのであります。

「孔子は、君子は食を謀らず」と云つたが、利に喩きは凡俗の常で、彼れは何事にも報酬を念ふ。然し又「孔子の語に學ぶや、祿その中に在り」と申したのは實に確固不動の真理であります、自己の天性に適した職業を撰び、所謂一藝一能に達したならば、必然世に用ひられて、それ相當の報酬を得る



ことが出来る、別段に報酬を思はずとも、自然に報酬は得られるのであります。  
要するに、世間の需要を顧みず、報酬問題に捉はれずして、たゞ自己に適した職業を選び、修業をなし、以つて一藝一能の人となる、これが職業を撰擇するに就ての最も肝要な、そして賢い方針であると思ふ。

## 自己を語る

### Ⅱ訓話、指導者の價值批判Ⅱ

大分縣立工業學校卒業生

東京日日新聞整理部副部長

佐藤勇生

#### ◇永遠の未成品

青年の思想的水準が昂まり、世俗的關心の複雑多岐に、涉つて來たことは、僅か十年の過去に比較しても、著しき隔差を呈し、驚くの外はない、況や學生の行動の理論憧憬ともいふべき状態は、爲政家の行政的施設を要するまでに立ち至つてゐる、かく、思想的に豊かなる生活を營みつゝある若き人

々の意思の力はどうであるか、これは、統計的に、検討し難き問題ではあるが、私は、原始時代と相去る遠からずと斷するものである、その反證は、學生、青年といふが如き若き人々を對照とする教訓の箇條の昔に比して、著しく殖えて來たこと、これである、經世家、社會事業家、教育家、宗教家は筆に、舌に、青年の頭に、火でも降つて來たやうに叫び、且つ指導する、そして、その結論として「世は堯季」と嘆く「世は堯季」といふ言葉は、日本に支那から文字が傳つて以來、ズツと幾世紀をかけて通用してゐる言葉である、つまり、この言葉は、永遠に現存するといふ決定を與へ得られる、換言すれば、人間が道徳的に極めて幼稚で、永遠に未完成であることを物語り、且つ正しき道へ意志する力の極めて薄弱なることを説明するものであるとの解釋が得られる、私が統計的に求め得られざる若人の意思を付度して、原始時代と相去る遠からずと、斷言して憚らざる所以はこゝにある。

#### ◇「指導」に對する疑惑

そこで率直に言へば、大分縣出版協會の今回の企て「學生の指針」編纂が、實質的に、どれだけの効果を齎らすか、といふことに、私は必然的の疑問を挿みたくなる、その企ての善惡はいはず、その對照たる若き人々の心の上に、どれだけの影響を及ぼすかに疑問を懐く、この疑問は勿論、前述、押しなべて、若き人々の意思の力に對する、私一個の不安である、従つて、私は、開き直つて、教訓がましいことを述べるために、ペンを勞したくない、假令「學生の指針」が對照とするところの若き

人々の意思の力に、私が疑問を抱かずとしても、私自身、まだ／＼上長なり、多数の先覺的立場にある人なりから、耳にタコの出來るほど、訓へ、導き、戒めを受けつゝある身分であるからである。三十五歳の私にして然り、今學窓から、實社會へ出でやうとする人々の前途には、私以上に「教への道」「指導の叫び」「人生の燈臺」が、手を擴げて待ち受けてゐるのである、實のところ、私は學生の進路に、一燈を點する資格はないのである、同時にまた、手を擴げて、待つてゐる多数の指導者の中に、私までが割り込むことは、青年諸君は煩はしきを増す外、何の利益もないことであらう、たゞ、私は大分縣出版協會の溫き指導觀念に讃意を表する形式として、若き人々へ、他山の石ともならば、といふ婆心から、御參考までに、私の乏しき體驗を披瀝しやう。

#### ◇運命の支配

私は、母校を出てから、かれこれ、十八九年になるが、まだ、謙遜なしに、如上の如き、ひげめを申上げねばならぬことは、勿論私自身の修養の足りない結果でもあるが、また實世間が如何に、多難なるかを想像して、いただきたいものである、そこで、私は、この「學生の指針」の内容に盛るべき一つの角張つた課題——セオリを設けず、自己そのものを語る。

元來、工業學校等の如き實業學校にあつては、そこに學ぶ人々の運命は既に、その學ぶ科目によつて、局限せられてゐるといつても差支へない、局限せられてゐるといへば少し語弊もあるが、一つの職業人としての教養を受けつゝあるのである、けれども實世間に出ると、思はざる事情や、自己批判が生れて來て、中等程度の實業教育が教へてくれただけでは、飯は食へても、精神的満足が得られなくなつたり、周圍の影響で、迷ひを生じ、又は、餘儀なき事情から轉職するといった結果になる、現に私が工業學校の蒔繪科を卒業しながら、新聞記者になつたことなどが、その一例であらう、また私と同時に指物料を卒業した學友が、陸軍省の屬官になつたり、商賣人になつてゐる人達もある、この現象は、甚だ非科學的の見方であるかも知れないが「運命の支配」と名づけたい。

#### ◇明暗二つの場合

事實、人間一個の上には、自分では何等意思せず、何の約束をしたこともない、大きな強制の力が作用して、自分の目的とは、非常に駆け離れた義務を負擔させて來るものである、固り、これには明暗二つの場合がある、工業學校の課程を終へて蒔繪師たるべかりし私が新聞記者になつたと云ふこと、そのことだけから考へても、他の普通教育を授ける中學校の卒業生諸君等に於ては、如何に進路を定むべきかに、迷ふことが一段と深く且つ複雑であらうと想像される、蒔繪師から新聞記者への宿命的プロセスを舒すれば、こゝに、私が、述べる以上の紙幅を費やしても、猶足らぬものがあるが、要するに、これも、約束しなかつた義務の強制が作用したといへる、そこで、この外的力の作用が、實は、私の場合には「明」の部に屬した、若し、地下幾百尺の抗内で動く炭坑夫になつてゐたならば、

職業に貴賤はないにしても、私は、これを運命的に「暗」の部に属するものと、解釋したであらう「新聞記者」といふ職業が、私に好都合だったからである、若し「炭抗夫」であることが、精神的状態に於て好都合だったならば、私はこれを運命的に「明」の部に属せしめるのであらう。

#### ◇心の訓練

つまり、この外的作用は、自己周囲の事情や、経過や、突發的事象が、自己に豫期せざる幸福に運行、影響する場合と、豫期せざる不幸に導く場合とである、これを、私は、さきに、明暗二つの場合と名づけて、幸禍いづれにせよ、この外的作用を、受け、消化し、善處するの道は、どうても、内的用意に待つ外よりはない、心の訓練、これである、が、こんなことは「處世訓」と銘打つた書物などには、とつくの昔に、書いてあるかも知れない。もし書いてないとするれば、それは甚だ不親切な書物だといつてよからう、けれども、それがかりに處世訓や青年訓話などに、麗々しく書いてあるにしたところが、現在といはず、何れの時代の若人も、敢て、それに耳を傾けやうとしないであらう、よし耳を傾け、眼を注ぐことは、あつても、心の耳、心の眼を、傾注しないであらう、私は、敢てそれを責めない、人間は「明暗二つの場合」に、現實に逢着しなければ、心の耳眼を打たないからである、また幾度か「二つの場合」に遭逢ない以上、私が「内的用意」と銘打つたところの、心の訓練を志す心にならないであらうからである、従つて、私が、冒頭に於て述べたやうに、指導的企ては、結局空に

歸するやうな氣がしてならない、若し、この指導的企てが、大分縣下各學生諸君の一人半人に反映することがあるならば、私は皮肉なしに「學生指針」の大成功に、萬歳を三唱することを約束する、ヨシそれが、十年二十年の後であらうとも！

#### ◇体 験 と 省 察

かゝる状態であればこそ、青年指導を名とする社會教育家、宗教家、また指導を職業とする演説家、官公署の一部課等、等がウヨ／＼と生れたのである、中に就て保守的分子は、精神復古を叫び、剛健の思想を云爲し、これに對し急進派が、社會組織を科學的に解剖、研究、批判、清算して、個人の安住の地を、理論上に求め、新しき經濟的組織の上に人生を劃一せんとする、われ等は、この新舊と區別されるどころの指導者の説に去就するに就てすら、一つの指導を俟たねばならぬほどの煩はしさを感ずる固より、これは、団体を念として、解釋すべき社會問題であつて、こゝに述べべき範疇に屬しないが概ね、世の指導とか、指針とか、名づくべきものゝ、餘りにも多く、餘りにも煩瑣なる一例として、こゝに擧げたのに過ぎない、自然、かく煩はし時代に個人として、多岐多端なる外的作用に、働きけられる青年の執るべき、選ぶべき道は、たゞ一つ、前述の心の訓練であらう、運命への達観でなければならぬ、而して、運命への達観には、多くの心的經驗を要し、若き體驗を必要とし彼此一つに歸して、正しき省察を加へ、自己を批判して、進み、且つ退くの用意がある。

#### ◇自己の地位を観る

以上は概して、私の体験による、一つの抽象論に過ぎないが、各中等學校を卒業して、直ちに、社會に出られる人に（上級の學校に進まれる人でも、行く／＼は社會に出る人であるが）申上げたいことは、自營される人も、ある勤務を求めて、奉職される人も、己れの業務を、自己の生活と、緊密に結びつけられないことである、同時に自己の業務が、自家は勿論、自己の勤務する會社、官公署に於ける自己の地位を、絶えず念頭に置き、自己の負擔する仕事は、他の追隨を許さぬまでの研究と熟練とを積まれんことである。かくすることが、前段屢々述べたところの、外的作用を、可及的に自己に有利に導く基礎となり、地位の優越を齎らす基となるのである、運命の開拓ともなるのであらう、そこに與へられたる「自己完成」が輝く、多くの修身教科書や、處世訓や、青年訓話には、不屈不撓の文字が現はれる、單に、そんなことを、今の若い人に言つて聞かせたり、書いて見せたりしたところでの何の反映も、効果もない、それは單に文字に示すのみで、實質を指示せぬからである、が、空虚に聞こえこの言葉も、私の述べるところの、自己の業務に於いて、他人の間接を許さぬ研究と修熟とを得た結果の、如何に輝くかを明示する時、大きな意義と生命の脈打ちを看取することが出来るであらう。

#### ◇自己批判と檢討

單に「不屈不撓」の場合に於て然り、世の訓話業者や青年指導業者といふもの、價値は、要するに

以上の如きものであつて、それ等の言といへども、頭から、ケナシつける必要もないが、要は、社會人としての良心に基く自己批判と檢討に優る處世訓はない、この場合、徒らに總てを体験のみに基くといふことは一つの躰で容易なことでないから、心の訓練による省察を生かして使ふことが必要である、省察の基礎は、自己の体験は勿論、他人の体験や研究の結果を可及的多く取り容れることである、他人の体験や研究を可及的多く取れ容れると云ふことは、一々他人に聞いて廻るわけには行かないから、出来るだけ讀書することである、讀書は自己を客觀させ、自己を批判させる基礎である、現代には、讀書には、非常に好都合の時代である、讀書時代といへないにしても、出版時代である、五圓十圓を投じなければ手に入らなかつた貴重な文献が、非常に廉價に手に入る時代になつた「圓本の洪水」といはれる時代になつた、私は、日本の新しいにネットサンスを現代に見出したやうな心地がする何といふ自己清算に好都合な時代であらう。

#### ◇讀書と思索

實業教育を受けた人々の陥り易い弊害は、自己の修業した業務にのみ編執して「人間」たることを忘れるところに端を發すると思ふ、これを救ふの道は、寸暇を割いて、各方面の書籍を涉獵するにある、業務上の優越を完成すると同時に「人間」として「社會人」として「國民」として、完成へ志す者こそ、現代の「優れたる人」でなくて何であらう、政治家が、地方分權を叫び、都市と田園との文

化の平衡を高唱せずとも、出版時代は如何なる僻遠の地にも影響して、心理文化の遍照を期待することが出来る、これを取り容れる心掛けの所有者は、時代に生きる人である、たゞ、讀書に留意すべきは、國体を念としたる精神的基礎であり、批判的態度と、讀後の思索である。

以上、私は、殆ど自己を語り、在來の訓話、指導者の批判を以て、學窓を出でんとする人々へ、他人の石を投じ、自己以外に、この世に、頼るものゝないことを説いた積りであるが、文業末だ成らず殊に晝夜を分たざる業務の都合上、反讀の暇もなく、大分縣出版協會の温き指導精神に、深き讀意を表して筆を擱く。(四、七、一一)

## 政争王國の青年諸君に告ぐ

中 里 眞 清

吾が大分縣は、世間から政争王國と稱せられ、一も政黨二も政黨、政黨ならではの夜の明けぬ土地柄と世間から視做されて居る。乍併政黨熱の熾なるは獨り吾が大分縣のみの專賣ではない、殊に近年は各地ともに、政争王國が聯立して居る。立憲政治の運用上政黨政派の必要なることは、今更ら事新し

く説明するまでも無いが、世間多くの人達は兎角政黨なるものゝ眞意義を没却して、之を社交上は勿論個人營業上にまで及ぼすに至つては、眞に沙汰の限りと云はざるを得ない、政黨は政見の上に立脚するので有るから、政見の相違に基くならば、縦令ひ夫れが親子兄弟の間柄たりとも争ふが良い。是れは決して沌理論ではない、苟くも多少の教養あり事理を解するものゝ當然の行爲である。之れを譬ふれば如何に親密の交際ある男女間と雖も性的問題は別なるが如く、政治上の主義と處世上の問題は全然別個に取扱はねばならぬ。世人が吾が大分縣を目して政争王國と稱するは、因より冷評的の有つて稱讚的の代名詞でないことは言ふを俟たないが、其の冷評的なるは前記の區別を混同したる無智を嘲笑せるに外ならぬ。而かも所謂政黨屋と稱する政治を以て一種の職業と爲す輩は、政敵即ち商敵であるから、社交上にも睥み合ひ營業上反對することも多少恕す可き點ありとするも政黨屋ならざる常人が、政黨の異なるか爲めに、互に相仇敵視し犬猿も管ならざるに至りては、實に言語道斷と云はざるを得ない。之等の弊たるや必竟政界に於ける先輩者が、其の指導を誤りたるに基因す可しと雖も、教育に従事する者はよくこの區別を青年子弟の腦裡に浸潤せしむるの必要がある。最近縣下の某中學校長が其の職を去るに臨みての述懐は大に傾聽に値ひすると思ふ曰く。

「大分縣の政争の激甚なのは全國的に知られて居りますが教育界にまでこの弊風が浸潤し來つたことは返す／＼も遺憾なことで生徒は教師を馬鹿にし教師は政黨屋に氣兼ねしてその日暮しの無責任とな

つては本縣子弟の將來は何うなるでせう國家のため眞に痛嘆に堪へません、識者の一考をわづらはし  
たいと思ひます」と。

人の將さに死せんとするや其の言や善し、蓋しこの校長も亦恐らく黨弊に禍されたる一人で有らふ  
と思ふ。黨人が時の要路に強要し小學教員を入れ替へ、駐在巡查を動かす如き、尋常茶飯事の如く心  
得ゆるに至つては、全く以て驚くの外なし。私は敢て政黨を否認する者でもなければ、拒絶する者で  
もない。要は只社會構成の中堅たる青年諸君は、政策の當否を研究し徒らに附和雷同することなく、  
其の父兄が何黨で有らうと、其の朋友が何派で有らうと、自己の所信に向つて邁進すると同時に、政  
治問題を離れては、政黨もなく政派もない。虚心坦懷以て世務に従はねばならぬ。

往年吾が財界の巨人にして縣出身の先輩たりし和田豊治君は、吾が大分縣が常に政争の巷と化し、  
産業の發達を阻碍することの甚だしきものあるを憂ひ、事業家に勧誘し、事業經營上には、吳越同舟  
主義を實行せしめたるが爲め事業界に於ては幾分其の遺風を傳へ今日に及びたるは洵に慶賀すべきこ  
となりと信ずる。庶幾くは教養あり訓練ある現代人の後繼者たる青年諸君は、諸君の父兄が爲したる  
が如き前蹤を踏まず、世人をして政争王國たるの惡聲を放たざらしめんことを切望に堪へない。

## 國民教育に宗教を

眞の人格者に物質の富は無用だ

唯物本位の人間には一滴の徳操はない

靈 師 難 波 照 明

純眞なる人格を涵養するには、宗教の力を待たねばならぬ。然るに我國民教育には宗教を教へるこ  
とを許していない。是れは今日の時勢から考へて見ると甚だしき誤謬の様である。尤も明治初年の經  
世家諸士の考としては、或は頗る當を得ていたことであつたらうが、今日から見ると甚しい誤謬の一  
つであると思ふ。本來宗教は人間の善行生活に必要なものである。信仰家と不信仰家との行爲を比  
較して、その善惡的懸隔が大なることは、一々事例を擧ぐるまでもなく明白なることである。如何な  
る詭辯家も正しき信仰家に對してその背理的理由を見出すことは、よもや出來ないであらう。人間の  
眞の人格は宗教に發するのだ

抑も人間の活力の盛な時期。所謂活動時代には「宗教など誠に面倒くさく考へられて、唯だ野豬的

に各自の事業に猛進し、夫が爲めに富又は地位を得る場合が少くないのである。そして其人は自己の運命は自己で造つたものであると考へて、其の成功なるものに酔ふていられる人々が常に多いのである。然かれども斯る人は其の一生を人格者として飾るほどの善行に入ることが稀れであるようだ。しかして其の事が結局社會の輕侮を買い風教に利ならざるのみならず、自家の幸福をも遂に裏切ることとなるのである。一体宗教なるものは宇宙に人間以上の人格者があつて、吾々に臨んでいる處の信念から生れるものであるが、當世の唯だ物質本位の人間は此の宇宙に人間以上の生命や、人格物がなと思ふから、宗教を侮り寧ろ之を無用視するのである。人間以上の優者を認めて之れに敬畏するのでそこに良心の琢磨が出来るのである。

明治の教育方針が兎に角物質文明の輸入に急なりしたため、學校に宗教を許す心がなく、或は一面にはまた政教一致を不得策と思ふ心も、大に手傳つたのであるから致方はない。且つ又宗教の善惡に精通しない教師が勝手氣儘なことを教へて、却て生徒を誤らすと云ふ心配と宗教は熱し易い性質のものであるから、生徒が之れに熱注したときは、學問の妨げになるとの點を慮っていたからである。是れは抑も根本的な大間違である。幼童や少年に成長後人たるの道に缺けしむることのなからしめん事を目的とした教育に、少年だから宗教は無用だと云ふ理は毫もないのである。寧ろ幼少の時から宗教心を養成してをくのが、それだけ必要か判らぬのである。現代の如く上下人心の腐敗、思想惡化の

時代、殊に總てが物質標準で先輩に對する禮儀、恩人に對する謝恩、甚だしきに至つては物質の爲めなら親子兄弟でも、法廷で争ふといふ時代には、最も宗教が必要である。如何に學校で倫理とか修身とか、如何に八ヶ問敷く、正義だの忠孝だのと教へたからとて、教員が教儀おかもしないで、物質さへありついでいれば、よいと云ふ心術が先きである時代には駄目である。殊に當今の如く無神觀論跋扈の時代に、幼なる少年が道徳なる窮屈なものに、なんとしてその求道心を馳せせよか。

目下當局を悩ましている過激思想の如きは、悉く皆な若い無宗教者に發しているのを見れば、又吾人は思ひ半に過ることである。近次思想惡化の張本が、智識階級其他高等學府にある生徒らの人々にあるのを驚く。宗教を迂遠とか迷信視する學者、活動家などは相共に率いて、國民の人格を墮落せしむるから、此のまゝに進めば邦家社會の將來の爲めに、實に寒心に堪へないものがある。宜しく學校に吾人は宗教を入れて、少年時代より道義心の涵養に資すべきは、目下の教育政策上の重大なる要件であらうと思ふのである。

既往の事は是非もなし。遅蒔ながらも今日からでも國民教育に宗教を吹き込ますがよい。然し世には無宗教でなければ、實業は發達しないと云ふ論者も出るであらうが、幾百萬の富を造つても、その行いが不善であつたら何になるか。天下の大富豪家や、地方の名望家が盛に専門の法學士を高級で使つて、國法あれども脱税問題を研究して實行している。そして夫等の猛獸が威張る世の中だ。

今や耳新らしきこと、一億圓近い負債を各方面の銀行や個人に残して、破産處分を喰つた大阪の相場師石井定吉が始りて、積善銀行が其の當時の先驅者で、京和、報徳、九州、幾多の銀行が突發しては支拂停止の醜態を暴露し、幾千萬の零細なる預金者に、痛慘なる迷惑をかけた、世の暗流は益々現時を壓迫し、至る處に暴威を振ふ不正事件の續出してゐるが、一人として品性と徳操の所有者でない。吾人が常に敬虔するような宗教家や信仰家は見當らないのである。

顧るに社會主義者だの、百般背徳的行爲の簇出するのは、要するに信仰心に缺けたる低級なる品性の所有者の其の多くで満されたる現象であらねばならぬ。嗚呼現代は國民道義の落魄が、社會人道の不安は瀕々として吾人を襲ふのである。斯の如く國民性の危機迫る、之れを救濟せんには、先づ國民教育より遣らねばならん問題である。眞の人格者には物質の富みは無用である。由來日本人とは宗教あつて清廉にして、義勇奉公なる純眞なる國民性を有するものである。

終りに一言を試みる。今や中等學校を卒業して、續て上級學校に前進せんとするもの、或は家庭の都合上により直ちに活社會の一員として大に其の試練的抱負を展開せしめんとするもの、何れも將來に有爲の青年男女である。此の無垢の青年が初めて社會の濁流に新なる一步を印して、自己の信する舞臺に向つて然かも前途の光明に導かれんとする其の意氣や愛すべく、又掬すべきものである。然るに社會の空氣は何れの天地を問はず、國民固有の精神美を根底より破壊しつゝ、ある環境に立てる。折

角有爲の青年男女も遂に眩惑せしめられ、最初の貴ふとき一步を誤るものが多い現代である、須らく初心の變動し易い最も大切なる時期であり、尙ほ又學生時代には勿論宗教的精神はなくして、直ちに活社會に立つ以上は、特に信仰の道によりて自制心の修養が緊要であると思ふ。常に一舉一投足正義を辿て進路を開拓して行くならば、其の成功や期すべきである。人生の貴ふときは人格なり。純眞なる人格は宗教に發せずして他に道あらんか。人間、をんすめの目的たる最後の勝利者は必ず宗教的信念の結晶にあるのである。

## 直ちに社會生活に入られる人のために

日田工藝學校教諭關註  
日田漆器會社支配人

寺川由己

近來多くの人は上級の學校へ學校へと進まれて居り、又此の方面には非常に強い希望をいだいて居られる様であります。之は資力體力智力の三つが完備してゐる人は誠に結構であります。之等の内には多少無理をしても上級へと進んで居られる人もある様であります。之は深く考へねばならぬ事柄で



ありまして勉學のため資産と體力の大部を費消し、漸く卒業して相當の位置を求めても仲々就職の出來ない所謂就職難を託つ人も澤山ある様であります。又最も不幸なる人は餘りの苦闘に體力を使ひはたし病魔の爲に再起不能となり、又或る人は不遇を恨み果ては左傾思想を抱く人さへ生るゝに至る其のものは元より國家のため誠に嘆はしき次第であります。抑々學問をすれば相當の職が得られると思ふことが間違でありまして、殊に職を得んがために學問に志すと云ふことは根底に於て大なる誤謬であります。即ち學問と生活とは全然別問題であります。例へば好況で一般の人の生活が安全である時は政府も大學、専門、高等、中學と次から次に新設擴張し、又父兄も子弟も上級へ、學問へと突き進んで行くが一度今日の不況に立ち至れば實業でなければと實業學校又は實際職業へと走り、ために一部の中學校は志望者少なくその存続をも怪まれるものさへある有様であります。此の状態は學問と生活とは別問題であると言ふ事を社會が如實に語つた證據であります。

然らば比較的上級の學問を修めた者は生活に就職に現在の状態から離脱するを得ざるか、又如何なる覺悟を要すべきやを深く考へて見まするに、吾國は舊幕府以來の士農工商の宿弊は實業を賤み勞働を厭ふの惡風が昭和の今日に至るも未だ國民より一掃することの出來ぬ状態であります。ために有爲の青年の多くは學校へと、將來の就職難生活難の狼穿をも顧みず命の限り進んで居り、一方國家の根源をなす實際勞働には殘餘の比較的微力なる人々のみが進んで居ると言つても敢て過言ではありませぬ、之では如何に政府や識者が殖産興業、國力涵養、經濟國難を叫んでも効果が擧るわけではありませぬ、戰爭でも士官が多過ぎて下士卒が不足ではとても勝利は望まれまい。

茲に於て諸君は自己の境遇と個性を熟視し強き信念の下に實業に就くべし、而して諸君の今日迄の教育と識見を其の業務の上に發揮し以て經濟國難の現状を救ひ生活の安定を計るべきであります。

近來諸君の内に此の點に覺醒せられたる人のあるを大いに力強く思ひます。それは本年四月日田工藝學校漆工科に中學卒業生二名入學しました。一人は昭和二年の日田中學出身で繪畫に堪能で今一人は大正十二年の筑上中學出身の豫備少尉で藝術に多趣味なる人であります。學校では學科を免除し實習のみ課して居りますが、其の作業振りの熱心真面目なるは實に嘆賞の外はありませぬ。今更ながら自覺と信念とより生ずる力の偉大さを感じました。之等の人こそ眞に中等教育の價値を發揮活用したものでありまして、即ち其の學力常識を以て實際勞働に従事し幾多の研究を藝術上の創作に勞力の能率に工場經營に果た勞資協調に努力したならば必ずや實業界に牢固たる地位と名をなすに至ると信ずるものであります。

之等覺醒せる多數の人々を得るに至らば萎靡沈衰せる吾國の經濟を挽回し牽いては實際勞働者技術者の品位を向上し以て勞働蔑視の積弊を一掃し、國運を隆昌に導くは火を見るより明であります。

此の秋にあたり何を苦しんで上司の鼻息を窺ふに目も之れ足らず、政變毎に失職に恐のかざるべか

らざる卑劣不安の道程に登らんより獨立獨歩己のが天分を充分に發揮し得て而も現在の國狀に最も合致し、希望と光明に輝く實業界に進出し此の新天地に各自の地歩を開拓せられよ、敢て諸君の一考を乞ふ。

註 日田漆器株式會社は日田工藝學校と姉妹關係にて同構内にあり生徒の實習を依託教授して居ります。

## 農の根強さ

谷 口 茂 夫

【 78 】

不景氣！

農村の衰退！

段々深刻になつて來た。

一部の人々によつて、農村振興、産業立國、積極政策、等々、高らかに唱はられるのも随分長いことだ、今にも華やかな黄金時代が現出するかと待ち受けたが、掛け聲のみで遂に仁丹程の利き目もな

い、結局、之は百姓自身の問題だ、先づ吾等自身の眞剣味を要する、之が打開轉換は決して容易ではないが、幸にして吾等農は斯る場合にも或る根強き特典が惠まれて居る。

頻々として日々の新聞紙に報導せらるゝ、彼の市井の生活難に因る家族心中や、虚榮に災されたる悲惨事は、世人の心を傷まして居るが、吾等百姓は、米が乏しくなれば麥が稔り、麥に次いで芋が出歩野菜が惠まるゝ、如何に貧しくとも大根を呉れる隣人があれば餅を贈る知る邊もある、やがて又豊稔の秋がおとづるれば、舌鼓打つて銀の米飯に満腹する、吾等の木綿着物は、假令質素でも母や妻の眞心こもつた暖み味がある、吾等の詰襟は假令見すばらしくとも肩はこらぬ、纒紐の浮目を受くる心配はない。

少々過言ではあるが、債鬼門に迫るも蜘蛛の如く平たくなれば、命に別條はあるまい、誰かど「味噌もあり、薪もあり、餅も澤山に搗き申候」と農を代表して氣焰を揚げ、都の友を羨望させた。

殊に、明かるき光線、清き大氣、うるはしき山川草木、淳訥なる村の人々、之が如何して金銭で購はれ得るか。

併も、研究工夫、經營良しきを得ば、農の収益の堅實で少からざるは、遠きデンマークは見ずとも愛知を始め各地の精農家の實績が證明して居る、徒らに悲鳴を上げる勿れ、他の救済援助を待つ勿れ。吾等は、此の根強き特徴を根城として、協力一致、一旗擧げようではないか、農村の人々よ、就

【 79 】

中若き青年諸君、今一息、太平の里、理想の村の建設に邁進しよではないか。  
菜根譚の著者は「繩鋸も木斷じ、水滴も石穿つ水到れば渠成り、瓜熟すれば蒂落つ」と教へた。

## 實社會に處する覺悟

都 甲 格

最近數十年間に於ける科學の進歩は人類歴史の上に一つの大きい記録を作つた、曾て想像もされなかつた様な世界が今日では實現の社會となつて吾等の地上生活の上に一大變化と衝動を與へたのである中にも機械工業の勃興によりては産業の革命となり山は開かれ大工場は至る所に設置され鐵道は敷設され海路は開かれて地上を短縮し人口は各所に集中して今日の煩雜なる社會を醸成するに至らしめた。もとよりこの著しい文化が吾等人間生活の上に一大思想を與へてゐる事は明かだ吾々はこの浸々として休まない文化の爲めに日夜努力を重ねてゐる次第である、併しながら物質文明のみによつて人間生活は幸福であるとは考へられない、物質文明と對してこれを價値づける思想方面換言すれば精神文明の推移はどうか考へて見たい。

所謂歐洲文明と對して起つた思想は多くが自由思想であつてそれは數理的又は打算的のものであつて倫理的分子を含む事が極めて少なき様である、今日見る多くの社會問題が利己的思想に根據を有し共存共榮の實精神に乏しい上より考へてもこの兩文明の不釣合を改正して圓滿なる社會を作る事は刻下の急務と謂はなければならぬ、かくの如く今日吾等の社會は畸形の状態にあり動もすれば其の本來を誤らんとする危機にある、爰に於て吾國の文化をよく堅實なるものとし國勢の充實を計らんが爲めには國民一人一人が自ら醒めなければならぬ吾人は爰に國民の中堅となるべき、學校教育を了へて實社會に活動せる状態につきて只狹き範圍乍ら記して見たいと思ふのである、現代社會の實狀は如何なる人材を要求するかも、あらゆる社會に於て現代は一面不合理であり虚偽である事多く醜惡なるもの數多ある様であつて屢々吾等をして迷惑の状態に陥れんとする、併し乍らそれは畸形状態にある社會の事であつて永續性のものではない、現代社會が實際に要求してゐる人材について吾人は次の三點を擧げておきたい。それは第一力の人（又は意志の人）である即ち活動大なる人である、複雑なる競争場裡にあつて活動力の大なる事は最も大きい強味である尙現代各方面に於て能率増進を喧しく叫ぶる、折柄この力の人各方面に歡迎されつゝあるのも無理からぬ事であると思はれる、吾々は屢々己の力なきを歎する事がある勿論人間の能力には大小の差異なしとは斷言出来ない、けれどもそれは意志の未だ弱きが爲めである、徒らに客觀的に見る事を止めて大いに内力を涵養したならば天的能力の

差など敢し問題とするに足りないものと考へるのである。

第二誠ある人 虚偽で固められた様な今日の社會にも要求さるゝものは人の誠である、虚偽なる社會に虚偽は歓迎されそうに考へらるゝが決して實際はそうではない、これを見て現代の社會は己は虚偽をなしても他人の虚偽は許さないと云ふ有様である、併しながら苟くも社會に大をなす人々は決してそうではない、例へ小なる虚偽が間違つてあつてもその奥に一貫した誠ある事を見るのである、何を云つても實社會に起つ上に人の信望を得る事は最も大切な部分である。

第三和ぎある人 (又は共存共榮の價値を具ふる人) 前二點の要素を具へても人と和らぎ協調するに缺けてゐたならば大成する事は困難である、現今の如く社會生活が複雑ですべて集團的活動となすに於ては尙更の事と言はなければならぬ、屢々見る社會の忌はしい鬭争もこの協調的精神の培養によつて大いに輕減する事が出来ると信するのである。社會が要求する要素には數多あるが以上三點は實社會の活動場裡に於て最も大きな要素でありまた他の小なる要素も見方によりては以上の中に包含され得ると考へるのでこれで止めて置く。

ひるがへて學生時代の事を對照して今少しく考へて見たい「良き卵はよきとりとなる」實社會の状態も大体この例にもれない様である、よき學生であつたものはやはりよき活動の人となつてゐる只愛に注意すべきは學生時代並に卒業直後の青年時代は精神的革命の時機で周圍の事情よろしきを得なかつ

たならば遂に惡變する事數多い事である、吾人はこれを多くの場合家庭の注意不十分なるより起る問題であると考へるのである、精神的訓育の方面は家庭に於て常に學校教育の主旨に基いて聯絡を缺がなかつたならば學生の惡變する大部を救ふ事が出来るものと考へられる、實社會の生活にふれて家庭教育の結果が著しく現れる事を見て吾人はいかにこれが重要なものであるかを痛感する次第である

歐洲大戰反動の後より財界の不振未だおさまらず加へて思想的混亂期にある吾國は今や幾多の危難に遭遇してゐる、人口食糧の問題に、失業問題に、勞働問題に、農村問題に、思想問題に其他幾多の社會問題に大なる悩みを有してゐる、これらの危機に臨んでこれを打開し我國運の隆盛を期し世界の平和を希はんとするは吾々青年の赤心である。吾人は同胞として連る多くの青年諸君がこの責任を充分に自覺し實生活の上に健實なる歩みを進められん事を切に祈るものである。

## 農村青年子女に反省を望む

時代思想へ眩惑してはならぬ

松 本 千 城

農家の青年子女が、現代思想に眩惑して、徒らに都會に憧れ、父祖年代の大切なる農業を嫌ひ、所

謂一種の都會病に罹つて出郷するものが年代多い、要するに鋤鋤を捨て、官吏、公吏、會社員等の如き勤人になりたがる氣風が盛んになつて來たので、愈々農村は疲弊して來る、土地は荒廢して來る、本來農は國の大本であるが、此の風潮で押して行くならば、地方の爲め國家の爲めに眞に憂ふべき遺憾の事象であると思ふ、一休斯の如き氣分の醸成されるに就ては、相當の理由がなくてはならぬ、即ち農業は賤しいもの収入の少いものであると云ふ觀念に支配された結果らしいと思はれる、然し此の觀念が果して正當のものであるかと云ふに一つとして正當ならざるばかりでなく、反對の結果を見つゝあるのである。

農事は勞苦が多いと云ふけれども、事實は反つて都會の勞働者の方がより以上遙かに勞苦が多いのである、其の上都會の勞働者は煙草休み、食事休み、其他の休憩の如きも凡て時間を制限されて思ふ様に出來ぬ、農業者が野良に出て氣儘に自由に勞作し、雨の日風の日は之れを休み、寒ければ炬燵に暖を取ると謂つた勞働状態は、都會勞働者の夢想も及ばぬものである、勤人生活者の日常を見るに、成程一定の収入はあるけれども、それに應じて随分無駄な費用もゐる、夫れ等を相殺すると、反つて農業者よりも収入が少いのみならず、一朝本人が死亡すると家族は直ちに路頭に迷ひ、親戚知己のお情により寄附金募集となり、それによつて漸く露命を繋ぐと云ふ、みじめな末路を見る者が多いのである、之を云ひかへれば洋服を着た高等乞食である、斯る高等貧民になりてまでも、淺はかなる

現代文明の偽つた生活様式を辿らうなどは思はざるも甚しきことであると思ふ。

農業は平時に於ては、國家の指導者であり、監督者であるが、戰時に於ては國家の干城であること忘れてならぬ、伊太利のムソッリニ宰相は世界戰爭の疲弊を回復せんため地方農民の居所を去つて都會に移住するを嚴禁したのも此の理に外ならない、今の世に苦勞せずして生活し居るものが、何處の世界にあるか、勞苦は生活に伴ふ一大要件である、而かも其要件が比較的収入が多く、且つ之を行ふ興味と快樂を伴ふことは、農業以外には求められないのである、農は此の意味に於て健康、享樂長壽の三大源泉である、若し農村にして萎微するならば、國家の壯丁は如何にして保たれるか、國防は如何にして完全を得るか、此の間の責任に想到すれば、農村勞働を厭ふなどは、實に思はざるの甚しきものである。

今茲に一言を弄する、現代の中等學校程度卒業の青年子女は漸く一人前の常識の修養は出來て、之れより前途の光明に向い、男子立志出郷關、學若不成不歸死、の青春の意氣を以て東都に遊ぶもの、或は家庭の都合上直ちに官吏會社銀行員等夫れ／＼の志望を以て各自の目的に前進せんとするものが多いのである、此の現象は文化の賜ので結構なことではあるが、又一面から考へて見ると、國家社會の爲めに嘆聲せずにはいらぬ、なせなれば青年子女たちが、徒らに都會に憧れ愛郷の念なきことである、試みに想へ將來農村の監督は誰れがなすか、指導は誰れがするか、將た思想善導は誰の責任

にあるか、或は地方農村の進興、産業の發展等幾多の責任的指導者なくして、何んとして完全なる地方農村政策の劃立が出来ようか、諸士は茲に地方照明塔の目標となり、農村新生への雄叫びをなせ、嗚呼眞に憂國の志士あるならば、天恵の農業國たる我が國体の歴史を貴び、聖示を奉じ祖宗の遺訓を思ひ、愛郷の至誠を以て、須らく國家の監督者たれ、將た又立國の干城たれ、爰に社會的信念を披瀝して、農村青年子女の反省を望む。

## サラリマンの感想

(附、消費節約の經濟的及道德的意義に就て)

高橋保

五月の野邊に萌え出た若草の様な、最も美はしく、最も純眞な、而も最も強い力こそ、若人の内に漲る若き魂の力である。それは向上進取の精神でも。眞理を渴仰し、正義を愛する氣魄であり、同時に理想を書き夢を見る力である。夢を見る力は生きる力である。學窓を巢立つた若人の胸に如何に

多くの夢が書かれたか。嘗つて其の一人であつた僕は先づ自分自身について考へて見よう。十幾年を育んでくれた春日の森を捨て、敢然と都に出てから七年目である。そして現在數多く書いた夢を現實に對してどの程度迄適應し得たか、エンジンヤである僕は、ある會社の技術課に一つの椅子を見つけ、仕事そのものを快樂として働いた、だが僕の夢は席末の椅子と僅かな給料で滿される筈がない。二年の後、僕はある専門學校に入學した、そして三年の後には、高級社員を自任して再び社會に出たが、そこに待つてゐたのは何であつたか、——就職難——呪はしい言葉だが、事實として存在する以上如何ともしたい、でも辛うじてあるちつばけな商會で働くことになつた。生活意識が次第に判然として來るにつれ、夢を見る力は逆にうすらひで行く、そして遂には「必要さへ足りてくれたら」と云つた様な、いちけた根性にまで惰落して行く。——サラリマン——學校卒業者の大半を包含するこの階級には、必然的に激烈な智的闘争が巻き起こされる(それは、幾何級数的に増加する人類の生存闘争の一端ではあるが)其の爲に生ずるサラリマンの價値の低下は己むを得ない。「遊ぶより」そう云つた言葉の絶わぬ内は、サラリーで生活することは困難である(これは偏見であるかも知れないが、三流以下の小會社に落ちぶれて集ふものにはである)茲で再び夢を書く、然し此の夢は、打算的なみにくいものであるが、この夢こそ生きんが爲の夢である。生活を離れて存在する思想は、單に理論であるに過ぎない、茲に於て切實に消費節約の實際化を考へる、それは國家の一員として、

一個人として、廣義にも狹義にもである。で今次に消費節約の經濟的及道德的意義について、貧弱ながら述べんとする所以である。

消費節約の經濟的及び道德的意義を論ずるに先立ち、吾々は先づ、より根本的な問題として、消費の意義及び範圍を知らなければならない。

抑も消費とは何か、廣義に於ては人が價値を減却すること狹義にては特に有形物の價値を減却することを云ふ。換言すれば生産の反對である。こゝに注意すべきは有形物の消費は、恰も生産に於て有形物の價値を創り出す能はずして、只單に價値のみを創り出すと同様に、物質を減却せずして單にそれに於ける價値を減却する事もある。この有形物の消費は、更に一部宛の減却と全部の減却とある、前者を使用と云ひ、後者を狹義の消費と云ふ。本論に云ふ所の消費とは、即ち之れを指すのであるが、この消費には又、生産的消費と、不生産的消費とがある。前者は生産又は營利の爲の消費、即ち資本とも稱すべきものであるから、問題の消費からは當然除外されなければならない。即ち不生産的消費を節約することの、經濟上及び道德上に於ける意義は果して如何。

不生産的消費は享樂の爲の消費である。生産的消費の手段の爲の消費であるに反し、不生産的消費は目的の爲の消費である。

人生は慾望の連鎖である。宗教も哲學も、道德も科學も凡ては慾望の結晶である。そしてこれ等の

慾望をより多く滿すものは幸福である。道德的慾望満足は精神的であり、經濟的慾望満足は物質的である、けれ共物質は精神より根本的なものである。

孟子曰「恒産なければ恒心なし」と、又マルクスの言を借りて云へば「人類は彼等の生活の社會的生產に於て、一定の必然的の彼等の意志より獨立したる關係に、即ち彼等の物質的生產力の、一定の發展階段に適應する所の生産關係に入り込むものである、此等生産關係の總和は、社會の經濟的構造をなすものにして、それは法制上及び政治上の上層建築が、據つてもつて立つ所の、又一定の社會的意義形態が之に適應する所の眞實の土臺である、物質的生活の生産力は、一般に社會的の政治的の及び精神的の生活過程を條件づける……云々」即ち本論にて經濟的意義を明らかにすることを先にし（これは現在の社會現象が凡べて經濟的基礎に立脚し、又自分個人の現状から考へても當然さうすべきであると思ふから）道德的意義を後にする所以である。

却説、我々人類は永遠に慾望の奴隷であり、常に少しでもその慾望を滿さんことを希ふ、而してかの不生産的消費即ち享樂財の消費は、その慾望を滿す最もプリミチヴなものはあるが、又最も普遍的な永久的なものである、そしてこの消費の益々大なるだけ、それだけ人は幸福を増す、又人生を充實するものとも云ひ得やう、けれどただその充實にのみこれ努める結果は、やがて經濟上重大な結果を生じ、又理論上彼自身大なる矛盾に陥るものである、即ちかくの如くなれば、只享樂の爲の消費のみ

徒らに進んで、生産營利の爲の消費が、比較的おくれることになる、その結果享樂の本源が弱くなり遂に將來の享樂を減少せしめるものである、それは文化人としてなすべきことでない、永遠の將來まで考へることが即ち文化人の文化人たる所以である、従つて生産と消費とを釣合ふ様にしなければならぬ、人はその生産に於て、たゞに享樂財のみならず生産營利用の資本たるべき、原料や助成品を生産し、生産營利に依つて得たる凡てのものを享樂に供せず、其の一部を他日の爲に貯蓄すべきである、諺に「入るを計つて出づるを制す」とはげに之を云つたものである、人々は其の収入を以つて支出を満し尙殘餘多からんと希はなければならない。

(収入の全部を生活費に當て、更に餘裕のない僕自身としては、少々出にくい説ではあるが)永遠を眺め地上に深き足跡を印するの士は常にかゝる事を念頭に置くものである。精神的に人を律する道徳も、結局かゝる足跡の連鎖である、即ち斷言する——最も堅全な經濟組織を有する國民は、最も道徳的な國民である——と。

消費節約は經濟上、上述の如く重大な意義を有するものである、且又消費節約の思想の發達せる國民は常に永劫に對して進み行く文化的國民であり、且道徳的國民である、最後に吾々の疑問といふ點は國民全体が生産したものを凡て直ちに享樂しなかつたならば、結局生産過剰とならないであらうかけれど之は心配する必要のないことである、今日の如く商品の販路廣大なる時代には、消費節約に依

つて剩つた商品は海外に輸出され、却つて國民の福利を増大するものである、且また——享樂漸減の法則——があつて、消費の大きさと享樂の大きさは比例するものである、此の點より見るも享樂の爲の消費は適度にやめなければならないことは明かである。

## 生意氣盛の子供に對する 最良なる教育手段

近 藤 政 夫

子供の過激時代にありては母は先づ滿幅の愛情を以て之に臨み、彼等の刺激され易き感情に對して常に多少の斟酌を加へねばなりません、殊に彼等が發表する意見に對しては、絶対に之に抵抗することを避け、事件の重要ならざる以上は、彼等の爲すがまゝに任すのが宜しいのであります、彼等が飽くまでも意志を貫徹せんとする場合に於て、強ひて之をさへぎらんとする時は、必ずや一種の反動を起し、却つて母の希望と相反する現象を生ずることがあるのです、また子供が此の過激時代にあ



る時は、名譽心の刺激が極めて鋭敏であります故、端なく親子の間に衝突を生ずることもありますが母にして少しく思慮を廻らし、巧なる手段を以て之に對する時は、左程の困難なくして、其鋭鋒を避けることが出来るのであります、總じて過激時代に於ては、嚴重なる譴責よりも、寛大なる許容の方が遙に好結果を奏することは、何人も異議のないところであらうと思ひます。

七郎制帽を今手に持ちながら、突如として、母親の面前に來り「之から同窓會へ行つて來ます、今日の會には是非出なければなりません、それに友達にも約束して來ましたから、もうお母さんが何程お止めになつても、今日は是非とも行つて來ます」彼は言葉の末に斷乎たる決意を現はし、さながら戰闘準備の整頓せる兵士の如く、いざと云はば打つて懸らんばかりの擬勢を示して、母親の前に立つたのであります、不意を打たれて母は驚くこと大方ならず、吾が子が如何にして斯くも不穩なる言動を敢てするやを解するに苦んだ位で、其面には見る／＼不穩の色が浮び來り、おはや一場の舌戦は避け難き形勢に見わたのであります、然し母親は此時何事か心にうなづくことありしにや、忽ち色を和げ、満面に笑をたゝへて「左様、それは結構だね、では遅くならないうちに一刻も早く行つて、ゆつくり遊んで來るが宜いでせう」此の答を得て一驚を喫したのは七郎であります、彼は母の非難の必然其の頭上に落ち來らんことを覺悟し、既に戰闘準備にまで及んだのであります、案に相違したる此笑顔、此の温言、驚かざらんとするも豈得んやで、擬勢忽ちにしてくづれ、茫然自失之を久しう

したる後「行つて參ります」どの簡單なる挨拶の下に、彼は走るやうにして室外へ出て行つたのであります、然るに一時間ばかりして彼は歸り來り

「此様な詰らないことはありません、會場は奇麗な廣い場所だらうと思ひの外、狭苦しい頭の支へさうな汚い一室で、加之誰も彼も負けぬ氣で煙草を吹かすものですから室の中は煙だらけで碌々人の顔の見分も付かない位……ビールと思ひの外會費の不足とかで、やつこのことで澁茶一杯……もう懲り懲りです、如何なことがあつても、二度と同窓會へは出かけません」

母の快諾は彼の家を出づる前に於て、既に其膽を奪つたのであります、彼は母の晴れやかなる笑顔に送られて、さて同窓會場へ趣いたものゝ、事は總て彼の豫期と違ひ彼の眼に映する光景は、案外にも彼を喜ばすに足らなかつのです、然し彼が家を出づるに當り、若し母の譴責や抑留に遇つたのならば、彼が同窓會席上に於て得たる感じは決して右の如き不愉快なるものではなかつたのでありませう、禁じられたること兎角に犯したくなり、隣の庭に咲く花は兎角に手折りたくなるのは、これ人情の常であります。

x  
x  
x  
x  
x  
x  
x  
x

# 同胞意義の喚起

故堀之内克 二

十八世紀後半より十九世紀に亘つて起つた産業革命は嘗つて從來の歴史に見なかつた經濟的征服者と被征服階級との明瞭なる對立の姿を現出せしめた。今日に於ては何人と雖も此の階級對立の事實を疑ひ或は否定する事は出來ぬ、斯くしてF.エンゲルスが謂つた如く無産労働階級がの歴史が蒸氣機關及び紡績機械の發明と共に始まつたのである、労働者は資本家の奴隸となり機械の從屬者にまで成り下つたのである、此に於て彼等をして其の悲惨なる生活から脱出せしめんが爲めに幾多の人類愛に燃える先覺者の労働階級を解放せよとの標語の下に絶わざる奮闘努力を續けた彼等は一切の階級を包含した、そこに彼等の誤謬がある、地上に「ユートピア」を建設せんとする努力、或は政治上の諸種の權利を獲得せんとする運動——然し乍ら總ては失敗に終つた、夫等の尊き努力はブルジョアジの莫大なる利益を助成するの外何物でもなかつた、彼に残された者は意氣揚々たる經濟的特權階級たる資本家と、煤煙に被はれたる工業都市に虐げられつゝ悲惨なる生活を營む労働階級との、より明瞭なる對立の姿であつた、労働階級の解放は労働階級自身の外にはあり得ない無産大衆の團結の力を以て

する外はない、と云ふ事を、インターナショナルは實に此の自覺の上にて起る労働者の國際的團體である彼等は中産階級的平和主義の代りに無産階級の資本階級に對する階級闘争を主張する、彼等に採つては、「ブルジョアジ」の所謂自由平等の權利なるものは一片のパンにすらも價しないものである、労働階級の經濟的解放——夫れは全世界の労働大衆の窮極の理想であり最後の目標である、故に彼等をして資本の下に從屬せしむる所の、そして嘗つては彼等の所有であり、今は彼等から奪はれたる生産手段を奪還せんとして、之が獨占者たる資本階級と相争ひ、階級支配を絶滅して、均しく人類としての平等の權利及び義務を獲得せんとするのである、インターナショナルの前身たる正義者同盟は「一切の人は同胞なり」を以て標語とした、然しマルクスは既に一八四八年のコンミュニスト、マニフェスト（共産黨宣言）に於て「萬國の労働者よ團結せよ」と叫んだ、彼及び彼等にとつては、最早や「一切の者」ではなくして「一切の労働者である、而して彼等労働階級の指導者は「一切の人類の歴史は凡て階級闘争の歴史であつた」事をそのまゝ認めて、現代の二大階級たる資本家と労働者との闘争を主張するのである、即ち、彼等にとつて必要なるものは人類同胞の精神にあらずして自己の階級に對する同胞意識なのである、此の意味に於て勞資協調を夢みる事は愚劣極まるものである、眼を轉じて世界各國經濟制度に基く社會状態を見よ、産業革命の洗禮を受け、近代的大工業の行はれる所に於ては、英國たると佛國たるとの區別なく、伊と獨との區別なく、存在するものは、資本の労働

に對する專制である、其の結果勞働階級被壓迫階級として産みだされた、彼等の生活は悲惨此上もないものとなつた。平和とか幸福とかは永遠に彼等の生活から奪はれた、彼等の生活資料を生産すべき生産手段は彼等から分離した、彼等の人格は失はれ、彼等は唯機械の附屬品たる役割を演ずるに過ぎなくなつた、より低い賃金とより長時間の勞働とが彼等に與へられたる待遇である、そして彼等に與へられたる待遇である、そして彼等は國民的嘲笑の中に、侮蔑の中に虐使の生活を送ることを餘儀なくされたのである。勞働者にとつて國家はない國境はない。勞働の存在する所が彼等の國家である、従つて勞働階級の解放は一國に限られたる問題ではない、ましてやそれは一地方限りの問題ではないのである。實に近代工業の行なはる、世界各國の勞働者に共通する普遍的大問題である、此の問題の普遍的なることを意識することに依つて、勞働者は眞の自己解放の原動力を得るのである「萬國の勞働者よ。團結せよ」とマルクスが絶叫する所以はこゝにある、勞働者は階級として同胞意識に眼覺めねばならぬ、否同胞意識を喚起せねばならぬ、彼等にとつては人類や宗教や國籍の如何は問題ではない、彼等は勞働者たるの故を以て團結しなければならぬ。昔十字軍の起るに際しては基督教徒たるの故を以て結合し、伊太利の獨立に際しては伊太利人たるの故を以て、日露の役に當つては日本人たるの故を以て團結した、而しながら勞働階級解放の團結は、人類宗教の如何を超越して勞働者たるの階級意識によらねばならぬ。今や彼等の敵は何某の國民ではなくして各國の資本階級である、何れの

國家に属するとも、彼等が階級を同じくする限り同胞である。換言すれば、彼等の同胞意識は階級の上に築かれたものである。

高く叫ぶ「萬國の勞働者よ。團結せよ」

終りに同情と理解とに富む吾が敬愛する綠窓會員諸君にして、彼等を受するならば彼等の解放の爲めに努力せられんことを望む。

自由と獨立とは早稻田大學の持つ最大の光榮である。——一九二六、

### 椿の趣味

萬木は皆枯れて葉が落ちる只杉松檜などのみが青い葉が残つて居るそれさへも寒中の野や林の中では目に立つて見へるから常盤木と云つて人が賞美する、此等の賞美する常盤木の緑と椿を比較すれば椿の方が更に一段縁が濃くて光澤を持つて居る之を例ふれば婦人の洗ひさらした髪を油をつけて結つた髪さを比較する様な感じがする此の一點でさへも椿には味ふべき深い趣味のある。尙其の上に此の濃厚の深緑色と同じ様な強烈な眞赤な花が咲く其反對色の青と赤の對照は實に美しいものである竹叢中にある椿は勞働せる農婦の群に盛裝した美人が一人交つて居る様な感じがする椿の趣味の極致は茲に存するのである、昔は罪人を打首にした刑場に座らせて置いて一刀の下に首を打落したものである椿の花が色も變らず萎れもせず根元からホタリと散つて落つる状が打首にして居るさ云ふので甚しく忌む人もあるが御幣も擔げば際限もないものである。

## 現代青年を誠む

大分中學校五學年 仲町 容

現代の青年に最も缺けたる点は理想と自覺であると思ふ、現代青年の理想は何か樂な職業に就き高き月給をもらひ美しき妻を持つこれである全部といはぬ迄も九分迄はこれである、何といふ意氣のない賤しむ可き考であらう、彼等は學校に於てあらゆる物を犠牲に置いてこそ勉強する、而して其は彼等の其低級なる理想——いや理想なる語を用ふるを得ない程低級な——を實現せんが爲である而して其の得るや彼等は得々として天下第一人を以て自ら任じ唯其社會的地位を向上せしむるに汲々とし其爲自己の貴き自主と自由までも犠牲に置く彼等は世の氣に入らんが爲に出世せんが爲に自己の眞の叫を聞ぬのである「徒に高い空想がたい理想をいだいてそんなことが出来るものか、それよりも世の氣に入り出世をし樂に世を過した方がよい」と彼等はいふ、然し青年よ、聞け郷等のいふ出世は眞の出世に非ざる事を、又聞け、郷等の所謂樂は眞の樂に非ざることを郷等のいふ理想は眞の理想ではないのだ、眞の理想はたとひそれは實現されずとも其理想により自己の現在の生活をより正しくより意氣あ

らしめこれに向つて着々として實行して行くのだこれが眞の出世であり樂であるのだ、僕は現代の青年に向つて要求する自己の本心の上に立脚した正しき理想を持って、自覺とは何か、自己を知ることである、自分は何であるか、自分は何をなすつゝあるか、これを知ることである、眞にこれを知ることとは或は聖人といへどもなし得ぬかもしれぬ、然し或る程度までは何人でもなし得ると信ずる自分は何れくらいのものであるか、これを知れば自己を過信しない、徒なおだてにのらない、カフェーに行つたりセーラーパンツをはいて大道を歩いて得ぬとする様なことはないはずだ、又自分は今何をして居るか、これを知れば徒らに輕舉妄動はしないはずだ、總ての自己の行動をことごとく自己の理想に向つて統一して行くはずだ、僕は再び現代の青年に向つて要求する常に自己を知らんと努めよ。

## 學生の立志

大分中學校第五學年 平川 千博

學生よ志を立てよ、そして學べ、而らば汝等は如何なる難事といへども成し得るだらう、若し成し

得ざりし時は汝の志のいまだ堅固に立たざると知れ。

その志としていたづらに富、地位名譽を望んではならぬ、學びの道にあるものは常に人間として愧ぢない人格とならうと志すことが大切である。

學生の志はあくまでも大きく、あくまでも固くなくてはならぬ「男子志を立て郷關を出づ、學若しならずんば死すともかへらず」志は全生命のあらはれでなくてはならぬ、かくして始めて志を成し得るに至るのである。

次に吾人學生は志を立つるに際し、確固としてあやまたざる信念が無くてはならぬ、だん／＼世が文明になるにつれて此の大信念を缺ぐものゝ出來たことは甚だ憂ふべきこと、云はねばならぬ。

信念の堅實でなく過てるものは實に危険である、何となれば信念の堅實でなきものはその志も堅實でなく、その過まてるものは志も過またざるを得ないのである。

その不堅實な過まてる信念のもとに身の富、名譽、地位を望む結果として利己主義的な個人主義に墮するもの、又は思想悪化せるものが續出するのである、故に吾人學生は堅實にして過たざる信念のもとに志を立てねばならぬ、その信念とは如何なる信念か、いふまでもなく忠君愛國の信念である、しからは吾人學生は幕末志士の如き熱烈なる忠君愛國の信念のもとに各人の志を立つることを忘れてはならぬ。

## 現代の青年を誠む

大分中學校第五學年 佐藤正見

殊に國家觀念の腐敗せる現今の學生として、特に必要を感じる、此の大信念のもとに志を立てるならば、立派な國家有爲の青年となることが出来るだらう、従つて國家隆盛を見ることは明かである。

或る識者は云ふ「現代の青年はごうも思想が淺薄でいかん」と成程尤も言葉である、而してこれは當然彼の明治初年の其の意氣天を衝くの概ありし憂世慨國の志士等と現代教育を施されたる現代の青年を比較しての言であらう、さらば何故に堅實なる思想の所有者であつた我々祖先の血を承けた現代人にして彼等の頭に淺薄なる思想を宿らせる者があるのか、これは時代の推移の大に影響するところである抑々古の日本には他の諸大陸に位置せる國々に比して政治的變化に乏しい随つて思想等の變化の如きも當然少なかつた一天萬乘の大君を戴いて日々安寧なる生活をしてきた國民には思想的に煩悶がなかつた、徳川末期に至り徳川三百年の鎖國の夢が破られると當時の我々祖先は大きな現實に直

面した、西歐の文化は怒濤の如く押し寄せた、その中には當然西歐の歴史に醸し出された悪い思想もあつたに違ひない、確に危険極りなき時であつた、が彼等には爲さねばならぬ幾多の事業があつた、彼等もそれを自覺しその希望の達成を願ふ外何物もなかつた、そしてこの危険な時代は現實性に富んだ彼等の目的とそれに献身せし努力とによつて思想的難關に陥らずに濟んだ、その一段落の後を承け繼いだのが我々現代の青年の青年である、そしてその青年達は西歐の文化を毎日毎日彼等の頭腦に詰め込んでゐる、我等の祖先の直面した如きこれと云つて切迫した急務がない、それで思考に比較的大きな餘裕がある、どの時自己の大日本帝國の一臣民たるの先入觀念を以てこれ等の思想を玩味すればいゝのだ、而るに多くの者がこの自己の境遇を忘れる、この際に悪思想が侵入するのだ、一度人間の体内に喰入つた考へは或程度までこれを腐蝕せずには置かない、他人を欺く人間はその人には或程度まで善良な人間に見へるものだ、一度この悪思想と云ふ害虫に捕へられた人間はその時はこれを以て自己最大至上の寶物となし、之を他人にまで見せびらかし鼓吹するこの悪思想に捕へられる動機に於ては、それは宗教方面の缺陷もあらう、又教育方面の缺點もあらう、が確乎たる信念があれば、そしてその信念を基として樹てられたる現實性の希望があれば我々青年は無事に其の中に處して行けるのである、思想にも誤つた偏見を持たずに濟むのである、青年に叫ぶ、汝等は信念を養へ、そしてその上に希望を戴け。

## 學生の立志

大分中學校第五學年 吉 弘 貴

我等を善導し、闇夜にきらめく燈臺の航海者をして危険を免がれしむる如く、暗黒なる社會の大波に揺られながら、望まれる髣髴たる一條の光明こそ志なれ、志は心の標的なり、志にして立たずば恰も舵碎けて行手定めず大海を放浪し、遂には沈没の止む無き運命に遭遇する難破船の如くならん、世の失せし者、ひとしく皆此の類なるを見ずや。

志は須らく遠大ならざるべからず、志遠大にして、天下の覇者たらん事を望み、而も力及ばずして僅に一國の主となるとも、志の遠大なるにより、己の品位を高きに保ち、如何なる難關をも切り抜け過ぎ、如何なる邪念も僻易し去り一向專念學に向ふを得ば其快果して如何ぞや、志にして極低極小ならば、懈怠の心生じ、放縱となり、一小事と雖も完成する能はざらむ。

即ち今の學生の往々徒らに志のみ高きを尊び大言壯語するを以て快とし、日々に行ひ之に合致せざるあり、或は慢に世の趨勢に走り、需要の潮流に乗じて一生を托すべき仕事を定むるあり、或は自己の才能を盲信し適當なる仕事を見誤り、悔を千載に遺す有り、豈慎まざるべけんや。

我等は「能はずといふ字は愚人の辭書にあり」との大奈破翁の喝破せし言をまともに信仰し「舜も人なり、我も人なり」との信念を確持し、全人格的努力を以て勵まざるべからず、彼は志を執りて大政治家、大學者となれり、我亦其の志すところを志して奮勵努力せば、豈大學者、大政治家たるを得ざらんや、凡そ世の成功者と稱せられる者は、皆大努力の結晶ならざるなし、誠に努力向上の一大決心を持ち、志に向つて邁進突進せば、天下何事かならざらん。

既に確定せる志に向つて一步を踏み出す、亦愉快ならずや、遼遠なる前途は、志に依つて照らされ歡喜に溢れて我等を迎へむ。

## 學生の立志

大分中學校第五學年 高橋安美

立志は成功と云ふ標的に對する我々の狙とも見ることが出來ます、或矢は低く、或矢は右に、又は左に、中には途中で落るる様に、或者は失敗します、夫れは大多數の人々です、稀に的に矢が當りま

す、即ち人生には少數の成功者が見出されます、狙所が良かったのです、志が正大着實だったのです。

クラーク大佐の日本學生にのこした一語「青年よ志大なれ」と、誠に志の正大なるべきことは議論の餘地がありません、我々は真的の真中に射當てる覺悟がなくてはなりません、小さな事を考へて居るは何も成就せぬと云ふ結果に陥ることが少くありません、毛利元就の話は此の事を雄辯に物語つて居ります、全日本を志しても中國位が精々だ、と、然し又一面、或程度迄は着實な目的に對して志すべきです、徒らに遠大な目的に對して志しても、全く成就の見込のない、空中に樓閣を築く如きものとなつては、何の足しにもならないばかりか、空想にのみ耽つて自滅するやうな事にもなりかねません、此處に成算ある目的、即ち、現在の實力、境遇に於て、確實に成功の可能性ある目的、所謂着實な目的に志すの必要が生じて來るのです、ではあるが、着實な目的に對してのみ志すのは、卑近に流れ、小成に安んずるやうな結果にならぬとも限らない、故に此の點に留意して、高きに失せず、低きに止らず、宜しきに合するやうにせねばなりません。

孔子は近きより遠きに及ぼすと云ひました、彼自らは其言の如くに、十有五才にして學に志してより、着實なる目的を達成しつゝ、而も大目的より眼を離さず、刻苦勉勵、遂に七十才に至つては、心の欲するまゝに身を處して矩を踰へざる迄に大成し、あの大聖人となつたのです、我國に於ても、低い

地位に居る時は、其の地位に居る者の中の第一人者たらんことを努め、而も大望を常に腦中に藏して片時もわすれずに居た豊太閤は、遂に位人臣の榮を極めたではありませんか。

彼を思ひ是を考ふる時、吾人學生は、正大且つ着實なる目的に志し、寸時も忘却することなく、以て生涯猛進の目標たらしむべきことの必要が、痛切に感じられます。

## 學生の本領

大分中學校第五學年 黒田明良

久しい沈黙から靜かに心強い何者かがよみがへつて叫ぶ「今日の活動は見事であつた。榮冠の輝きわ汝の前途に光を増すであらう。もう一息だ斷然がんばれ」私は大地を一步一步踏みしめながら歩みを運ぶ、工場の煙突からは煙が黒い線を残して靜に空に向つて登る。夕空を仰げば高崎山を見越して別府の山々が清くはつきりと浮き出て居て果は茜色に薄くばかされて溶込んで居る。私は日暮の路を家路に急ぎながらこう思つた。眞の偉人の要素は何だらうか。頭だらうか、天運だらうか「いやいやそれは皆違つて居る」と其の瞬間力強く又私の何者かが之を否定する。そして次の様に答へる「生れ

た時は皆白紙の如き者だ、それが努力と思考によつて次第に其の頭の差を増したのだ、慥にそれに過ぎぬのだ。白痴でも努力する意志があり。實行に進み得るならば必ず普通人の如く賢くなるに違ひない。私は度々或程度まで人間は偉大になると聞きますが、私は之れに不服であります。何故きつぱり偉大になれると言はないのでせうか。如何なる不幸な天運を持つて居る者でも、意志と實行と命さへあれば、何事も無限に上達するものだと思は信じて居ます。しかし事實無限に行き得ぬのは唯命が無限に續き得ぬからであります「俺の辭書には不可能と言ふ字は無い」と言つたナポレオンを私は心から尊敬します。彼れは若々しい元氣があります。學生は此の意氣が與へられて居る。そして此の意氣は吾々をして無限の元氣を出さしめるものだ。彼の維新の大業も若き意氣ある志士によつて、かくも偉大に成し得たのに違ひない。さうだ此の意氣だ、意氣に相違ない。過去に於ても意氣は成功の最大要件であつた！。今後いつまでも又かくあるべきである。そして此の意氣の高鳴りは學生時代に特に脈打ち響くのだ、學生にして此の意氣の高鳴りを聞き得ぬ者は日蔭の草花の様に希望なく常に淋しさを感ずるでせう。次に吾々は絶大なる意氣を持つと同時に父母の恩に感謝せねばならぬ。かくして一日一日を感謝と満足を持つて送ると言ふことは吾々として何をさし置いても第一に爲すべき必要があります。今吾々は學生です。學生とは一般に父母の温い懐にいだかれた自由な若者を言ひます。若人の血管には熱い血が流れて居ると聞いて居る。それは偉大な者の言を聞き美しき物を見て忽ち共鳴



して其の心に成り得る特權を言ふのだ、吾々の父母は此の特權を保護しつゝ、宛然森の女神が木々の希望するがまゝに眞直に高く高く大空へ成長さす如く、人生の怒濤に乗出さすべく吾々を大きく太く成長させて呉れます。しかし吾々は考へねばならぬ。吾々は何時までかゝる温室の中に居て温い蒸氣を受けることが出来るだらうか。それは不可能である筈だ。自然がそれを許すまい。吾々は乳を離れた赤子が固い飯粒を食はねばならぬ如く、固い／＼社會の苦痛をなめねばならぬ逆境に突落されるのだ、而もそれは宛然綱を離れた河舟が刻一刻萬丈の大瀑布に近づく如き状態で一刻も準備をゆるがせにすべき時ではないのです。獅子は子を産めば三日にして千丈の斷崖より突落すと言ふ事である、吾々も之と同じ境遇に在ると言ふことを自覺せねばならぬ。獅子にして此の災難を突破せんとすれば三日の間に十分母の乳を吸つて強く丈夫に太らねばならぬ。吾々にして此の難關を突破せんと欲すれば總ての方面に勇ましく活動し強く大きくならねばならぬ。而も斷崖より落ちて安全ならんとするには手も足も十分な強健を要求する。如何に手が發達したりとしても、もしそれ足に於て修養缺ぐならば立ちどころに足を折つて不具者とならざるを得ないであらう。又現代の社會は綜合的英雄を要求して居ると言ふ見方から言ふも吾々は完全無缺なる發達を必要とするのである。運動を忽にして鹽で萎れた青菜の如き學生を見て私は屢々憤慨する。此の様な學生に限つて君どうしたのか少しは運動でもしたらどうかと言へば青白い顔を一層沈鬱な顰面にして黙つてしやがみ込むか、或はやつと「勉強せん

といかんから」と聞き取れないやうな哀れな聲を出し得る程度だ、私は残念です、之れが而も若い學生の言葉です「君は父母が有りますか」とこんな時反問してやりたいです。そして「ね君君は父母が有りませう。そして君を愛して呉れるでせう、知つて居ますか君の父母達は毎日夕暮が迫り赤い太陽が西の空に夕焼を残して沈む時一日の勞苦を忘れて君の前途を祝つて呉れて居ますことを!!君は父母が唯一つを望みとして唯君の前途に光を添ねんが爲のみ此の世に喜んで生きて居られると言ふ事を知つて居ますか。そして之れに對し君は父母さんが明日死んでも自分の日頃に對して濟まなかつたと思ひませんか。君は多分非常に残念がるでせう。私は考へ違ひをして居ますよ。吾々は男です、而も若者ですよ。運動に勉強に大活動をしたくありませんか。君は四年の時生理で此んな事を習つたのを憶つて居ますか、或部分の筋肉のみ使ひ他の筋との平均を飲んだならば、其の筋の痙攣を起し遂には衰弱を起すと教はつたことです。君僕等の生活もきつと之と同じだと思ふがね。君はどう思ひますか君もさう思ふでせう。君の父母さんはきつと君の身体のことを心配して居られるでせう。さあ明日から總ての方面に努力しませう。朝夕の足取りから眞剣に男性的に動くことですよ。さうすれば一日も數日の價值ある者と成りはしないでしょうか」と言つて勵ましてやりたいです。吾々は實に來るべき未來に於て恐しい飛躍をなすべく頭に身体に完全な發達を期せねばならぬ。此の自由な親の愛を十分に受け得る時より自身に満足が來る程度に毎日努力する人が、一日を最も有意義な美しい繪巻として

一生を飾る花環を作る人に成るのです。そして死んで後までも其の見事な繪卷は天國に祀られ永久に地上の人に呼掛け未代までの手本として尊ばれる様になるのです。

## 學生の本領

大分中學校第五學年 矢野正一

吾人は學生である。吾等は學生の本領の何物たるかを自覺し、其を指針とする事に依つて高潔な人格の所有者となり、健全に理想の彼岸に達する事が出来る。現代學生に取つて最も自覺して欲しいものは本領である。近來學生の中に神聖な學園から罪を裁く法廷に立ち、暗い鐵窓の下に繋がれたり、或は尊い學窓を師弟爭亂の場所とせんとするが如き學生の出づには何が故か。夫は忘本領に外ならぬ。本領なき者は足元の定まらぬ醉人と同じく舵なき舟の如く之程不安定なものはない。然らば學生の本領とは何か。管仲の言に「溫柔孝悌、母驕恃力。志母虚邪、遊居有常必就有德」。中心必式。夙興夜寐衣帶必飭。……」と云ふのが之こそ現代學生の必ず行ふて少しも誤らぬ道と信んずる。志に虚

邪が有りはせぬか。家を出て居る時にも家に居る時も行ひが一定の規律通り正しいか、どうか有徳な人や經驗ある人について教を受けるか、時代遅れの人々として輕んじはせぬか、服装が正しいかどうかを吾人は猛省して見らねばならぬ。さうしたならば吾人は學生としての本領を確實に胸に付けて覺得る。

亦學生は之より社會に立つ上に於いて、自己の本務を盡すために強健な、頑丈な身体を造る上に深甚の注意を拂はねばならぬ。現代は頭腦の良、虚弱者より健全な身体の所有者であり且、刻々と奮勵する人を要求する。學生は若しんで勉強するのだ、苦しんでで而る後尊い知識人格が得られる。そしてその中にこそ吾人學生のユートピアは見出される。私は苦悶の中にこそ眞の理想境が存すると信ずる。不斷の努力だ、苦闘だ、其處にこそ眞の學生の本領があり生命が躍動する。知識欲に燃わ、學のために苦闘すること、之こそ吾人學生の本分である。徒に試験制度をうらんだり、ストライキを起して怠學したり或は夫を學生の學生らしき處となす如き學生も數多い。之等は亦本分を忘却と云ふより寧ろ知らないと謂ひ得よう、勇敢に苦しい入試験をも受け奮勵することこそ本分である。苦しmandとする學生には寧ろ其は愉快であり刺激劑である。務めてよく苦しみさねしたら間違はない。樂の中には必ず誘惑がある。

亦自分は時に對する觀念が學生本領の一要素と思ふ。現代の學生は時の價值否尊さを知らねばなら



が「天下を望んで中國を得、中國を望んで安藝を得る、しかるに安藝を望んたら何をやるか」と言つた  
此事は志を立てる上に於て重大な要件の一つであつて、我々は此の點に深く注意を拂はなければなら  
ない。

最後に志は堅きを要する。志を立て、後は、學もし成らずんば死すとも歸らじと言ふ信念、即ち必  
勝の信念を持ち、必ず志を達成しようと思ひ、一意専心に自分の目的に邁進する事が必要である。  
必勝の信念の前には困難なしと信ずる。(終)

## 學生の本領

大分中學校第五學年 清水俊之

近頃になつて我國では種々の立場から見、いろいろの國難來が叫ばれてゐる、或は經濟國難來とい  
ひ或は思想國難來といふ、すべて皆憂慮に價する問題である、しかし此から將來、このやうな問題が  
益々深刻となり、更に多種多様の問題の現れてくるといふ事は、想像に難くない事である、それで將

來この多事な國家の中堅となり、國家の大任を背負つて行かねばならぬ我々として、こゝに學生の本  
領は一体何だらうか、と考へて見る必要がありはしないだらうか、熱心に勉強せよ、運動せよ、……で  
あれ、とかいふやうな分りきつた事は、述べるまでもない事である、要はその實行に勉めればよいの  
だ、これら我々の守るべき事は、明治大帝の御下しになつた教育に關する勅語や、關東大震災の際の  
御勅語の中に、明らかに示されてゐる、又近くは今上陛下御登極の際の御詔書中に、その片影をうか  
がふ事が出来る、大正十二年の御詔書中に、輒近學術益々開け人智日に進む、然れども浮華放縱の習  
漸く萌し輕佻詭激の風も亦生ず」とおほせられて國民の進むべき途を御示しになつてゐる、思ふに文  
化の進歩は生活程度の向上を伴ひ、生活程度の向上は一面では奢侈放縱な風を伴つて來たのである。

近頃學校争議は増加してきた、中途にして退學する者も多いらしい、これらは一面から見、學生  
が純眞な思想を失つて、從順さを無くした爲だとも解せられる、好奇心を慎め、世間には往々學生で  
ありながら、煙草を飲んだり、酒をのんだりする者がある、これらは明かに國法に禁せられてゐる事  
を、犯すのであるから、國家の犯罪者たる事を免れ得ぬ、明らかに學生としての本分を失つてゐる、  
彼等は唯學生といふ假面で身を包んだ悪人に過ぎない、元より學生たるものゝ、近づくべき所でない  
上級學校の生徒で、思想問題で退校になつたり、法の裁きを受けたりする者もある、彼等は我國の如  
何なるかを知らないのだ、本より眞の日本人と見なす分には行かぬ、好奇心が主としてこの結果を産

出す、なるほど好奇心は一面に於いては、コロンブスをしてアメリカを發見せしめ、マゼランをして世界一週を企てさせたとはいへ、他の一面では頗る危険である事を知らねばならぬ、煙草をのみはじめたり、酒を飲みはじめたりするのも、一には好奇心に本づく所が多い、同じく詔書の始めに「國家興隆の本は國民精神の剛健にあり」とお述べになつてゐる、あゝ！剛健！明治維新の志士が、よくあの大事業を完成したものは、種々あらうがこの大精神が實に大根本をなすのである、今我國は歐洲の物質文明の追従から離れ、こゝに世界に誇るべき東洋の精神文明を以て一大飛躍をなさしめんとする時しかも尙大國難の眼前に迫つてゐる時である、昭和の維新である、この多事な時代に、皇國の爲何事をか爲さんとする者の、常に旨とすべき物であるといはねばならぬ、ともかく我々は、新時代の要求に應じるため、俯仰天地に愧じる事のない心を以て、學生としての本分を守り、學生らしい眞の學生になる事を勉むべきである。

x x x x x x x x

## 學生の本領

大分中學校第五學年 房前今夫

「學生の本領」如何、此の問題を解決する前に私は「我々學生は何を目的として學問に従事するか」といふ問題を研究しなければならぬ、誰も言ふだらう「社會に出でて獨立し、よりよく生活せんが爲なり」と勿論さうである、それには學課の習得に精勵すべきは勿論である、併し學課の習得だけで我々は完全に社會に立ち得ようか、否、否、決して然らず、健全なる生活には健全なる思想の所有を必要とする、健全なる思想の修養期は何時か、私は思ふ、思想の大本は學生時代に於て確立せらるべきだ。

明治以來西洋の文物は盛に輸入され、人民の中には三千の歴史を持つ光輝ある我が國個有の精神文明の存立を漸く忘れるものがあり、或者は左傾者の名を得ても猶平然として居るではないか、斯くして我國は思思的に一大混亂状態に陥らんとして居る、しかも猶武家時代の餘風を受けて、一朝有事の際には、武士の血を受けた我々大和民族は、常には内に潜んで居る大和魂の發揮を見得る、が之も漸次其の影が薄らいで行つては居ないだらう。元來精神文明は物質文明の如くに何れの國も共通といふ

わけには行かなく、其の人種が遠い祖先より傳統的に繼紹し、練磨して來たものでなくてはならぬ。將來の我が思想界を支配するものは誰か、それは現在の學生であらねばならぬ、我々學生は將來苟も外來の輕卒な思想に流されないで、毅然として起ち、我等の祖先が常に有して居た、熱烈なる忠君愛國の大精神を先づ學生時代に修養し、將來國家の中堅となつて、國家の爲に努力し、永久に我國を世界の重鎮たらしめようではないか。

この修養こそ現在の學生の本領であり、且つ將來の學生の本領であらねばならぬ。

次に來たるべき問題は健康である、由來日本人に結核病者の多いことは世界の第一人者とも云ふべきである、且つ日本人の平均壽命は、やはり他國に比して短命である、これは我が國の爲に大いに寒心すべきではあるまいか、西洋の諺に「健康は富に勝る」といふのがあるが、健康と富との價値は比にならぬほどである、それは我々が重病に侵された時でなければ覺ることは出來ない。

若しも我々が虛弱であつたとせよ、如何なる壯圖も結局放棄せねばならぬ、然るに我々は身體の鍛錬により大部分の病氣は避け得る、一生涯の健康は若い時、特に學生時代の鍛錬に與つて力あり、と云はねばならぬ、身體の鍛錬を忽せにせぬやう留意することも學生の本領を完くすものである。

以上を綜合すれば「學生の本領」は結局「學問に精勵し、思想の確定を謀り、身體を強健になすべく努力する」と云ふ平凡な事に歸着する、しかも此の平凡なことが容易に修養、鍛錬に成功し難い、故

に拙文を以て、敢へて愚見を述べて諸賢の同情を仰ぐのである。

## 學生の本領

大分中學校第五學年 永野健 二

自分は、學生の本領を述べる前に、學生と云ふものに對して考察してみる。

學生と云ふ言葉は、讀んで字の如く「學ぶ人」である。「學ぶ人」と云ふ言葉に於ける範圍は、現代或種の勞働に従事してゐる人々、或は見習弟子、見習職工等の人々、そして我々の如く、學びの道にいそしむ人間、等の全てを含んでゐるものである。然し普通一般の所謂「學ぶ人」とは、最後の我々の如き人間である。であるからして自分は、世間一般の言葉を使用して「學ぶ人」即ち現代的意義の學生と云ふものに對して、多少の意見を述べて見る。

古の學生と現代の學生とを、今假りに同時代に生れた人間として比較をしてみれば、更に雲泥の相違が出て來るのである。同時代の人間としては、時代の變遷に依つて、明らかに異なつてゐるのであ

るからして、多少の誤謬も無いではない。が、其の精神、學に志す精神に於ては、同一でないを否定する人間は、恐らく此の文明化された日本には、居らぬと斷言をするのである。現代學生と云ふ位置から、古代の……といつても三四十年前の人間であるが……學生を望見してみれば、古の學生と云ふものは、一般に粗暴で、一口に言へば野蠻であつた。又其れだけ單純でもあつた。さて西洋に於ける古の、種々様々の英雄偉人の學生時代についての傳記を、現代に活用して觀ようと思ふ。

「自己犠牲」の四文字を標語とし、數々の不正、利己、壓倒の妨害にも恐るゝ所がなかつた、かの米國宗教改革者チャンニングの學生時代は、實に貧苦と奮闘とに追はれてゐた。或るクリスマス冬の寒い晩、招待された人々は、皆外套に包まれてゐたが、唯一人外套を着てゐない青年があつた。此の貧乏書生こそ誰あろう、後日雄大なる新教理を唱へた、ウヰリアム・チャンニングに外ならない。チャンニングの生命は「自己犠牲」而して終始一貫である。蘇蘭土の民衆詩人ロバート・バーンスは不遇な天才であつた。當時の民心は、此の偉大なる天才詩人を觀るに。路傍の人に對する様に殘酷で、冷淡であつた。彼は搖籃より墓穴に致る迄の一生を、絶えず貧苦と云ふ荆棘の路を、血潮に染まつた足を曳摺つて行つた。詩は如何なる場合に於ても血潮の結晶である。彼の大學時代の詩は、變化ある光明と暗黒、辛苦と慰安、災害と喜悅、熱烈な愛國心、等を巧みに敘述したものである、ロバートは詩人として最高の報酬を得た。貧苦が彼を苦しめても、彼は自作の詩を決して賣らなかつた。如此にして彼

も又、苦闘の中に世を送つたのである。以上は西洋に於ける不幸な人間の略記である。唯歐洲のみならず、我が日本にも苦闘の青年時代を送つた人は幾らも居る。伊藤博文公の學生時代、二宮尊徳翁の青年時代、總て是皆貧苦と挑戦と忍耐の外には、何物も無かつた。而かも此等の中から彼等は満足と喜悅とを棄てなかつた。實際眞に偉大なる力は、精神的肉体的苦痛に遇ひ、幾多の試練を経て、初めて其の威を顯すものである。而るに現代の學生は果して此等の試練と挑戦との中に、活躍をしてゐるだらうか？學生の本領を體得して學に進んでゐるか？「試練のパン」を食えずに如何して此の變化の多い世に起つ事が出来るか！古の學生と今の學生とは、如何なる處が異なつてゐるか、言を俟たずとも明らかに知る事が出来るだらう。

次に學生と國家とを連結して考へてみれば、學生の風紀如何は、眞に國家の盛衰に關するものである。一八四八年二月、佛國二月革命時に於ける、奧太利政權爭奪は如何？學生にして眞に其の國家を愛し、剛健、武勇、質素、嚴肅等の美德を有して居たならば、其の國家は幼年時代の偉人の如く、芽を出し始めた若芽の如く、スク〜と成長し、國家は永久に盛大であらう。然しながら國家の前途を双肩に負ふ學生が、柔弱、遊蕩、殘忍にして、私利を營み、學生の本分たる事を忘却してしまつた時には、彼等の祖國なるものは、滅びざるを得ない。羅馬は如何、羅馬の盛衰と青年との精神には如何なる關係があるか？土耳其は如何？實に了解する事は易々たる事である。

終に學生としての本分は、以上の事柄を總じて知る事が出来るのである。即ち我が日本帝國の學生たるものは、「一に沈着、二に剛膽、三に勉學に、四に國家に對する自己の責任の自覺である。學生學ぶ人」にして學生にあまじき行爲をするもの、自己の修養に力を與へてくれる國家に反抗するが如き不貞の徒、社會主義、共產主義、何れも祖國に適せぬものとして、忠實ならざるものとして、此等の撲滅を計る人間となると云ふ事である。多聞が學生の本分では無い。學生が學生の生命ではない。精神である。清淨化された生命である。試練によつて生成した魂だ。學生の學生たる所以は、忠實に、其の國家に對して自己の任務を盡す事である。

## 學生の立志

大分中學校第五學年 阿 精 部 一

志立ちて一大難事の解決の扉は開かれる。否、一大難事をも成就し得る。志の立たない者は、航海者に羅針盤のない様に行手定まらずただ荒波に翻弄され、遂には陸地の影さへ見ず海底の藻屑と消ぬ

なくとも社會の容赦なき荒波に揉まれて、自己の歩むべき道をも見失ひ、人生の慘敗者として無意義な生涯を送らねばならぬ。

有史以來の數多き聖人賢士は洋の東西を問はず。幾多の民族より現はれた、此等の人々は或は富裕な家に、或は貧乏な家に生まれたが、境遇の如何に拘らず早くより自己に自覺め、高きに志し、死して永劫に生きんと欲して、その理想に向つて着々と實現に努力し、よく時代の汚濁に染まず、圓滿崇高なる人格を完成し得たのである。

振返つて現代の學生を観るに、殆んど大部分の者は高きに志しながらも實行意志の薄弱の爲め遂には日没の悲運をまぬかれぬ。

知つて行はないのは眞に知らないのである。眞に知るものは自己の信じた事は最後まで追求する。世には自己を犠牲にして死なぬ人の仲間入りする事を馬鹿正直と見るものがある、慾の念よりすればさうかもしれぬ。然し凡そ人間の善事で身を捨て、他を救ふほどの至極の善が他にあらうか。

我等の生命には限りがある。限りある生命を永遠に生かさんと欲するのは人情である。即ち死して後生きんとするのは人情である。我等學生は今修養の道を歩いてゐる。この内的必然性——永劫に生く理想を追求せんとする——を學問より得たる智識を以つて益々高め理想の實現に努めなければならぬ。即ち我等は内的必然性に得たる智識を加へ、死して生きんと理想の實現に努め、自己を價値ある



ものとして創造する様に志さなければならぬ。

## 學生の立志

大分中學校第五學年 麻生 一雄

志あるものは事竟に成る。天意に合した吾人の意志力は偉大なるもので、吾々が眞面目に而も誠の意志を以て邁進したならば、必ず彼岸の目的に達し得る。志ある者となき者は現在に於ける人格創造に既に大なる差を生じ、將來に於ては尙更兩者の間は隔離されることは明白なことである。

志なき學生は前途の洋々たる、そして光輝ある世界を毫も想像しない。若し想像するとしても其は淡い幻影に過ぎない。彼等は現在のみの愉悅に浸り、それに満足してゐれば他人より優越してゐると感じてゐるのだ。彼等は總ての點に於て、其の場限りの主義を抱き、此の意義深い學生時代を盲目的に送つてゐるのである。

是れに反して潑刺たる志を抱き、清い希望に輝いてゐる學生は内に豊かな未來を深く胚胎してゐるあ

の美の眞實を持つてゐる冬に酷似してゐる。彼等には熱烈な精氣があり、押へても押へ切れぬ意志があり、向上進歩の力が籠つてゐる。確固たる志を立て、ゝれば決して眩惑されたり、欺かれたりすることが無く、蕭條、寂莫の中でも常に形容し難い悦びが内に溢れてゐる。常に生氣に輝いてゐる天を仰がない者は地に俯さねばならぬ、天に翔け登る勇なき靈魂は地に匍匐せねばならぬ運命である。

我等の學生時代に於ける立志の如何は實に吾人の前途を支配する黄金の鍵である。

今昔の英雄を察しても彼等の大雄圖には堅く、深い志のあるのを見免す事は出来ぬ。立志は偉大であらねばならぬ。志なき者が一世の偉傑な人格者となることは不思議な事實であらねばならぬ。

## 學生の立志

大分中學校第五學年 一宮 章 藏

吾等學生に取り最も重要にして缺ぐべからざるものは即ち、立志の二字である、吾等は立志の二字

あるにより、己れの現在の境地や己れの進むべき道を知り、而して己れが志の實現へと努力奮闘を續け得るのである。

然るに、學生にして立志の二字を忘却せる者は丁度舵無きの舟、銜無きの馬の如く一定に己れを保つ事能はず、常にその中心を動揺させて、勿論己れの踏み行ふべき道は毫も辨へず、たゞいたすらに感情のままに走り誘惑に破れ、遂には醉生無死し世にその名を顯はすを得ずして地下三尺中に不覺の涙を吞まねばならぬ不運を醸すに至るのである、かく思ひを巡らせば吾人は立志の如何に重大なるかと、志無き吾人が將來の如何に暗澹たるかを恐れるのである。而しながら若きが致す所か、吾人は屢々輕卒な行爲に出で易く、吾等が須臾も忘れてはならぬ立志の二字をも、等閑に附し甚だしくは己れが聖淨である可き學生たる事も打ち忘れ、朦朧として自我の觀念なく、たゞいたすらに安つばい外面的悦樂に自己満足を見出し勝ちなものである、そこで吾等はかくある事から斷然退き、一旦志させし所のものを金石の如く堅く持し、石に嚙り付いても成功の榮冠を得んの氣概無かる可からずである。然るに往々、蔽衣蔽袴にして郷關を出で他日錦の榮を飾らんと夢みし幾多の若人、志半途にして敗れ、あはれ敗殘の骸骨を郷里にさらすに至るは之れ何んぞ、即ち立志の二字を固く持する事未だ足らざるに外ならないのである。滿天下の儕輩諸君よ、夢々墮惰安逸をさぼる勿れ、吾等は立志の二字の上に深く立脚して、互に己れの智徳を練磨し他日有爲の人物たらん事を期しようではないか。

## 學生の立志

大分中學校第五學年 疋田吉武

入學難？就職難？生活難？の叫びは津々浦々にまで響き渡り、我が國經濟界は悲境の底に沈んで居る現今に於て、將來國家の中堅たる吾々學生の須臾も忽せにすべからざるものは立志である、立志は萬事の源である、志は實に船に於ける水先案内人や羅針盤の様なものである。

然し志は徒なる空想を意味しない、吾人は空想と志とを混同してはならぬ、志を堅くすれば聖たらんとすれば聖人となり、賢たらんとすれば賢人となり得られる。

或る者は自己の志を人間の到達し得ない所に置く、それは即ち志にあらず徒らなる空想に過ぎない。

吾人は立志によりて社會の激浪を乗切るのだ。

夫の王陽明も龍場諸生に示すに、立志を以て第一とせしは何を意味するか、是れ即ち立志は學生たるもの、第一に心掛ねばならぬ事を明示して居るのである。

徳川三百年の大平の地に眠れる人民に邊防の急を告げし夫の林子平は個黨にして大志を有し、身を

忘れて警鐘を亂打し國家の難を憂へて奔走した。

遠き西土に於ても世界の四聖と歌はれし、孔子の如きは十五にして、慨然として天下の爲に大平を致さんとするの志を立てた。

實に志を定める時は此の青年時代だ、吾人此の機を逸せず志を立たよ、第一等の人たらん事を期せよ。

天地創造以來人類は常に進化して來た、そして遂に今日の偉大なる物質文明、精神文明を築き上げた、之れ祖先の人々の立志の賜である。

人間が志を有して居る間、人類社會には進化がある。之に反して志の無い下等動物には進化はない。

吾人の立志も人類の成長に貢献し、人類終極の幸福の建設に役立つ事は當然の歸結でなければならぬ。

吾人の志は自己生活上の事を計る、單なる利己的行動にあつてならぬ。

自己完成否大きく國家完成、人類完成、之こそ吾人の眞の志である。

一度立志したなれば火の中でも水の中でもあらゆる苦痛を突破せよ。

我々と志を同じし又月桂冠を得んとして勉勵する若人よ？時は刻一刻我々を恐怖と希望と絶交との

交錯せる彼方に送る。

見よ？人間の不幸は惠念になれないより甚だしきはない。一生何事にも専念になれないで、あれかこれか、と思ひ迷うて死ぬ人の生涯程悲惨なるはない、その人は曠野にさ迷ふ狗の様に、あてもなく人生の荒野を彷徨してゆく。

何の事業をもこの世に残すところなく、たゞ一日々々を、焦躁の情に充たされながら暮してゆく、かゝるは實に人生の悲劇である。

吾らに大切な志の實現に邁往せんために總てを斷念する、甘い青春の誘惑に襲はれず、高き志の下に充實して生の躍動を見つめよ？

吾らは若い？が何時まで青年では居られない。

吾人よ？青年有爲の日に眞に己が内心の姿を凝視して、一生の方針を決定せよ。

人の志を立つるは青年の日を惜いて外に無い、若し我々が物に感じ易き青年時代に、生涯の希望を決定する事が出来なかつたら、我々は中年老年に至つて決して、人生の安定といふ事を味ふ事は出来ない、人の世には風浪が多い、この風浪に處して迷ふところなき決意を現はす爲には、我々は純潔なる青年時代に内心を整理しなければならぬ。

學にあこがれる若人よ？世の萬事を忘却し給へ。

前途に輝く志の光明のみ望め。

苦よ、逆境よ、悲哀よ、

我等の堅き志の前には何物でもないのだ。

自己の志に向つては七轉するも八起し、すべての悲しみと苦しみを懐いて俺はたゞ真理に歩いて行くのだ。

成功へ！吾人の理想へ！志へ！。

## 學生の立志

大分中學校第五學年 板村眞一

個人に於て立志なげんか、それは蟬のぬけがらの如く、肉体のみにして精神なき一個の死物なるのみなり、大にして國家に一定の國是なく、國民にして確固たる目的なしとせんか、その國家國民は毫も存在の意義なし、立志は人生を愉快にす、さればもし、個人にこれあらしめば、心を無限に樂しま

しめ、其心常に春の如く、青年の心を失はず、老を知らず、澁澗たる心を持し世に活躍するを得べしかるが故に立志は必要なり。

往古學者説けるあり、即ち「志不立天下無可成之事」と、又曰く「期爲天下一等人」と、然れども立志には空想を思む、志はあくまで高尚遠大ならざるべからず、されども、實現の可能性なき且つは實行の伴はざる志は意に何の益なからん、而して志は道に合し、苟も善に違ふことあるべからず、孔子曰く「道は近きにあり」と、又英國の哲學者ジョンステューアートの格言に「いつ死ぬかも知れない生きて居る今日の中に働いて置かねばならない」と、此の故に學生は絶大無邊なる志を立て、一日一日の豫習復習を勉め、將來飛躍の基を築かんことを要す。

## 學生の立志

大分中學校第五學年 土師貫之

現代の日本は、社會相のどれにも難の字のくつつく時だ、之を除くのは、吾人將來國家の中堅にな

る學生の任務だ、近頃の學生は、實よりも花に走り易い、唯、名譽、地位、富を得んが爲に、大切な青年期を、うやむやに過して居る様だ、理論、學術の蘊奥を極め、人格の陶冶及國家思想の涵養を終へて來た、人達の上になさへ、就職難と云ふ難がくついた事は何を語る、又専門學校出と、大學出は社會に於てそう差は無いと言ふ様な事を屢々聞かれるのは、何を示す、目標が低い爲に、程時的勉強、義務的勉強に由て眞の自己の力を養はなかつたが爲に、大學出の實力が低下して、専門低度の水準線に下つた事を明に示すものではないか。又近時學生間に獨立獨歩の精神に缺く者の多いのは、國家將來の爲憂慮すべき事だと思ふ。

美しいレツテルを張た品物は多くの人目を引く、然し内容の未完成は、其品物に對する信用、價値を失ふ。

卒業證書は、いはば、レツテルの様なものだ、今の學生は、學校と云ふ人間製造會社から、美しいレツテルをはられて市場に送り出されて居る、然し内容は極く悪い、社會は、昔の様にレツテルばかりには目をつけてないで、其内容……其人の實力に氣をつけ始した。

レツテルは良いが、内容の悪いものには、一文だつて拂つてくれないと同じに、美しいレツテルを持つて、未完成で飛出した學生が、レツテル相應の待遇をせよとは少し無理と云ふものだ。

年々「役立たずの高等遊民の數は増す一方であるが、實力の人は一向は増へた氣が少しもない。

日本と云ふ小さな國の中に、今に止の出來ない程の高等遊民の蛆がわく、所謂獅子身中の虫とは此の事だ。

此んな事では難は益々増加するばかりだ、教育の進だ今日、多くの人を未完成のまま、社會に出すのは遺憾だ、宜しく吾人學生は、社會の要求の聲を良く聞いて、充分なる實力を得るべく務むべきだ、勉強の努力點は國家社會發展に貢献すべき基礎的修養を習得する事だ。

今の日本の要求は、百人の未完成人よりは一人の實力者だ。

そうだ、眞面目に自己完成に各人が務めさへすれば、下りつゝあるとも思はれる今の日本を、上りつゝあるんだとの意識に迄引上げる事は、我々日本人に取て難事でない、要するに學生は、自己を大きくする事に立志し努力すべきだ。

## 現代の青年を誠む

大分中學校第五學年 赤嶺正夫

自分は現代の青年諸兄を誠ましめる第一に叫ぶものは、勇氣を持ってと云ふ事である、世界に於てそ

の名を知られそして又人々より音楽の神として稱讃されたる彼のベートーベンを見よ、彼の一生は朝に貧を迎へ夕に苦を送つたるまづしいみじめな生涯だつた、しかし彼は彼の母をうしなつてよりは、けなげにも酒癖のわるい父や幼ない弟姉等の七八人の一家族を脊に乗せて、義理と人情との缺けているこの浮世の海を横切つて進まうとしたではないか、それが彼の十七八才の頃であつた、十七八才!! それは我々と同年だ。

しからは我々の中誰れか、この荒波の巻起つてゐる浮世の海を渡り得るだらうか?

たゞ徒らに岸頭に立つてためらひ、或る者は親と云ふ船の舳に手をかけて、又或る者はお金と云ふ板にとりついて恐ろしそうにし、大波が來れちまつてじつとして進まうとしないのである、勇敢であれ若人よ!! 勇氣を持つてテンブライションを破れそして又人道を進め、しからは浮世のあの大海原も君がために波を静すめ道を開いてくれるだらう、第二に私は青年はだらしが無いと思ふ、即ち流小唄を多く知つて居れば居るほど自ら得々とし又活動の俳優を多く知つて居れば居るほど自ら得々としてゐる等皆だらしが無い。試験に於て數學が出來なくても平氣で「あ、天命だ」と云つてゐる、愚だ? 馬鹿だ? 大馬鹿者だ? 彼の支那の吳王を見よ、會稽の恥辱を雪かんとして三年の長き間、何をしたか又後世軍の大本と言はれた張良が青年時代に土橋の上で老人に會つて何をしたか、現代の青年諸兄よ耐へよ!! 人間にだらしの無い程つまらぬ物はない。

現代の青年を誡ましめるといふ題にては、まだ多く書く事があるだらう、しかし自分に痛切に感じた事は以上述べた通りである。

## 我等の前途

大分中學校第五學年 横山 大一

我々は今や危機一髪の斷崖に立つてゐるのである、即ち今にして一步を踏みあやまらんか、千仞の谷底に陥るのは確實である、實に我々の現在の一舉手一投足は我々の前途を支配してゐるのである。

此の時に當つて我々は輕卒に一步を踏み出さぬ様に深甚な考慮を廻らし我々の前途に向つて以後は勇往邁進すべきものである、かくしてこそ遙か彼方に希望に満ちく我々青年を照破してゐる、赫々たる光明を放つてゐる希望塔即ち理想に到達することが出來やうと思ふ。

我々の前途には波瀾が幾多も重疊してゐる、その波瀾が平穩無事なるときは我々は前途に向つて確實に一步一步を踏みしめて行くことが出来る。併し一旦盪激奔走し盤渦轉旋して雪躍り雷轟くが如き場合に於てはその間を欣翻飄揚して過ぐる一葉の舟船の如く我々の前途への行進は最も危険である、

又前の平穩無事な時に當つても一旦這風に遇つたならば潮汐は怒激し波翻り浪躍り澎湃震撼して極めて危険な状態を露呈するやうになる、吾人の前途には所々方々から我々青年の破滅の道に導かんとする悪魔の長い恐るべき魔手が伸びてゐる、その魔手にかゝりあたら一生を墮落腐敗に終る青年の多いのは遺憾なことである。

理想に達する道は細くして眞直な路でもなく坦々たる大道路でもなく恰も迷路の如く曲折し又高低起伏してゐる、理想塔に入る門は狭くそれを通過する人の何と少いことよ、これを思へば我々の前途に潜在する幾多の障碍を排して雄々しく進む爲には先づ第一に確乎たる決心の必須缺くべからざることは絮説する迄もない、これと同時に皆自分に與へられた職分に對して忠實に正直に眞剣に傍目も振らずに働くことは理想境に到る最も確かな誰でもさうと思へば爲し得ることであらうと思ふ、各人不斷の努力はやがて自己の幸福のみならず社會の新生命をも導くものであることを知るならば前途への進出は如何に有意義な貴いものであるかが分るだらう。

以上を包括して我々が前途へ對して一步を踏み出しやがてはあの光明赫々たる理想境へ到達する最も安全な確かな外界の影響の少ない方法は次の事を自覺する事と思ふ……「我々は各自の職分を信する所に全力を盡せばよいのだ、職分、それは我々が人類として當に努むべき事である。自己のなすべきことはたゞ其處にのみ存在するのだ」と。

## 現代の青年に誠む

大分中學校第五學年 中山 一一一

自分は現代青年に誠む立場に在る者として熱感を陳べんと思ふ。現代青年の一般の缺點としては、自分の存在を他から認められようとして殊更に人並外れた行ひをする事、たゞ何の理由なくして他人の悪口を言ふ事等である。

たゞ人から認められんが爲に常軌を逸した行爲をなす事は現代青年の總てが有する最大缺點である。

又他の一面に於ては新説、異説等には正しい判断を下さずそれにすぐ附和雷同する様な短所も見える。之が故に危険思想等を懐くのではあるまいか？深く反省すべきである。それには現代講話主義の教育も幾分影響もあらうが、やはりそれに支配される青年にも罪はある。

故に吾人は此の教育制度——熱の無い情の無い智識一點張りの——を徹底的に廢すると同時に吾人の健全なる思想を作らねばならない。敢て非難するのでは無いが、職員同僚間に於ける軋轢も多少影響せざるを得ない。苟且にも人の師たる者が其の醜い内面を見せ如何にして前途希望ある青年を指導

し得るであらうか、立派な校舎が建ち、生徒の数が多く何から何まで到り盡せりの状態にあるのを以て眞の教育が普及されたと言ふのではあるまい。憚りに學問をさせれば反つてそれを悪用するのである。要するに今日の教育界の腐敗が今日の青年の腐敗墮落を起したによる、而し教育界ばかりが悪いのではない。其の腐敗墮落させられる青年の意志の薄弱な事が根本原因である。實を云へば現今の青年に長所と稱すべきものは殆ど皆無である。凡てのものが短所ばかりである、かく言ふ自身は勿論の事。

之を矯正するには全然白紙に戻つて教育を始むべきである。「八十の手習」と諺にもある通り學問修養に年齢の制限はない。思ひ立つたらやるべしである。次に現代青年には修養等と言ふ事は陳腐な事であると考へて居る者が甚だ多い。大いに誤つた事と言はねばならない。修養が出来ればこそ健全な精神——健全な思想をも包括した——を持つ事が出来るのである。修養が足りない。實行する人が少い。

彼の辯論大會などに於て徒らに美辭麗句を連ねてゐるが果して實行する者が幾人あらうか。口先ばかりの辯論會等は絶対に廢止せねばならない。「沈黙は金、雄辯は銀」「寡言實行」たゞ實行。現代の様な腐敗せる青年を持つ日本の前途如何？

自分は言ふ現代青年に誠む事は唯

「健全なる精神を有し然して實行」と。

以上愚感を陳べて現代の青年——大日本帝國の爲、世界に飛躍せんとする——に對して踐別として贈らんとするものである。 「をばり」

「不朽の名譽は獨り徳に存す」ペトラーク

「運命も徳に勝つ事能はず」ブルターク

「名譽は徳に伴ふ事恰も其影の如し」シセロ

「沈黙は無窮の如く深く、談話は時間の如く淺し」カーライル

「言ふよりも多くを知れ」プロータス

## 我等の前途

大分中學校第五學年 二宮伊五郎

我等の前途は廣くなつた。又狭くもなつた。



現在の世界は實力主義である、働らく者の世界である、如何に學業が出来ても實社會に出ては實力が無ければ食つて行けぬのである、中等學校出身のものが其の儘では他の中等學校出身者よりも實用向でないのも此の爲である。

然しながら中學出の者が實業に適しないのではない。

中學校は小學校一段程度の高くなつた者との見られる、故に中等程度の學力があれば小學出身者が容易に實業に就き得る様に容易に實業に就くことが出来ると思ふ、然るに結果の多少反對であるのは何であらうか、其れは自己の中に「自分の中等學校出である他の小學出と一緒にされては困る」と云ふ自負自惚があるからではなからうか、勿論小學校出身者とは程度が違ふ、故に其の勝れた頭腦、學力を以て社會に大いに盡すべきである、然るに自己をして完全なる偉人であるかの如くのさばり返つて居るのは何と云ふ馬鹿な事であらう、程度の違ふ其の頭腦學力を以て小學出身の勞働者實業に就いて居る者と同じやうに孜々と働らいたならば何うして一生を空しく送る様なことがあらう、

然し中學出身者をして全部實業へ入れしめるのではない、中學は高等程度の學校への道程である、學校を出て更に上級學校に入る者も實業に就く者も働らきに勤勉なる者のみに此の社會は廣い然らざる者に取つては此の社會は狭く苦痛である。

學校を……例へ高等程度の者でも中等程度小學程度でも……出た者を充分に働らかしめよ、或る者

は海外滿蒙南洋ブラジルへ又或る者は内地で一生懸命に働らくであらう、其れは何れにしても同じ事である。

故我々が此に向等程度に進んで又此に止つても如何なる状態に在つても勤勉で良く働らく事が第一である、唯單に海外發展を口にして彼の地に渡航しても働らかない者はためである、唯働らけ、眞に働らく者に對して塵程の苦痛もあらう筈がない、勞働、仕事、働らくことは神聖である

世は益々文明に赴く、然しながら此の世は働らく者のみに廣く然らざる者には狭い。 以上

## 我等の前途

大分中學校第五學年 丸 井 壽

總て此の世の中に生きてゐる者には目的がある、此の一點の目的に向つて、前途に輝く目的に向つて近附かうとしてゐる。

例へて見れば、荒れ狂ふ大洋の中の一小船が遙か彼方の地平線に見ゆる一點の陸地に向つて眞直に荒れ狂ふ大浪を推し分け色々の障礙物を切りぬけて、頓てはあの草木の青々と茂つた一孤島に到着

しよとするが如きものである。

實に我々學生は此の荒れ狂ふ大浪中の一小船である、我々の前途には色々と障礙物がある、此の障礙物を貰いて行かうとしてゐるのである、即ち吾々のすぐ前には入學試験といふ一つの大浪がある、此の入學試験の大浪を恰も一小船が大浪を乗り越す如く、あらゆる苦辛艱難を犯して、あたりの障礙物を排して高い大浪を越さうとしゐる、此の大浪を越した後は暫くの靜穩があるが併し又來る大浪を覺悟してゐなければならぬ、即ち社會の大浪に揉まれることを覺悟してゐなければならぬのである、あのごろ／＼と鳴り響く、塵の中に揉まれてゐる中にも絶えず目的に向つて我等の眼は輝いてゐる、此の社會の浪に揉まれながらも目的に向つて努力してゐる、が遂には此の浪の中に揉みに揉まれて、前途に輝く目的に達せず斃れねばならぬ不幸者もある。

此の目的を目ざしながらも達することの出來ぬ不幸な者もあるが、併し我々は此の目的に向つて社會の大浪に揉まれ、其の中に於いて前途に輝く目的に向つて艱難辛苦、あらゆる障礙物を貰いて進まふ。

「精神一到何事か成らざらん」努力、勤勉をもつて死にももの狂ひに進んだならば、何事として成らぬことがあらう。我々學生意氣に燃ゆる若人あらん限りの力を出して進まう、斃れて後己むの覺悟を以つて目的に邁進しよう。

## 我等の前途

大分中學校第五學年 安部 正

我等の前途は實に遠且大である、此の遠且大なる前途は今將に我等の前に展開されてゐる、即ち我等は將に中學の課程を終へんとし、同時に實社會の波浪に揉れるか、或は又大多數の者は進んで高等の教育を受くるべく奮進してゐるのである、あゝ、實に我等の前途は多忙多端である、此の多忙多端な前途に直面するには多量の努力と大なる理想とを必要とする。

實際此の生存競争の激烈な、思想的に經濟的に喧ましい現世に吐出されなければならぬ我等は高なる理想と、不斷の努力とを缺くならば如何なる仕事に従事することも其事業を達成する事の出來ないのは明かである。

又我等は幸福であると共に國民の指揮者とならねばならぬ、何故ならば日本全國民の數は非常に數に上るが。我等の様に中等教育を受くるものは極稀であるから、同時に我等は社會の指揮者たるべき義務があるのである。

實に我等の前途は國家有爲の國民となる事だ、日本帝國の將來を背負つて立つべき第二の國民だ。

斯くして我等の前途は遠且大と云へよう、そして彼方には我等の前途を祝福すべく赫々たる光が輝いてゐるのだ。

彼岸に達せんとするには幾度も繰返した如く高大なる理想と、不斷の努力とを要する、その間に修養を重ねてこそ、如何なる大事業も大發明も達成する事が出来るのである、而る後大和民族の爲に忠良なる國民として愧ぢざる人となれよう。

同時に我等の祖先が我等に與へられた幸福に對して一毫なりとも報いる事が出来るのである。終り

## 我等の前途

大分中學校第五學年 森 四 郎

我等は青年である、青年は人生の春とも云ふ、春は喜ばしい愉快な時節である、但し又春は一年中でばんやりとした、憂鬱な時節だとも云はれてゐる、とかく此の時節には人の自殺とか神經衰弱とか云ふ災難が起り易い、だから青年期は人生の最も危険な時節であるとも云はれる、總て偉大なるもの

、前には危険がある、青年は此の危険を越なければならぬ、これは越えて始めて人生の偉大さが解るのである、この危険を乗り越すには力が必要である、其の力を我等青年は皆な持つて居る、而も總ての人類の中で我々青年が一番豊富に持つてゐる、又此の力は抑へやうとして、抑へることの出来ない勢を有し、外部へ向つて常に伸張發展しやうとして止まないものである、此の力を我等は伸びるだけ伸ばし、發展せしめなければならない。

然して此の力を伸張發展せしめるには一つの道がある、此れが即ち、我等の前途である、換言すれば理想である、此の我等の前途は、限りのない又無限大とも云はれる程の長い路である、此の長い路を辿り進んで居る間に種々の災難に出會ふ、そこで又怠惰と云ふ病に罹る者である。

そして此の病氣を治療し得ないを世間では、よく憐れな人と呼んで居る、又實際憐れむべき人である。此の憐れな人とならない爲には唯一の強健な意志と力とを必要とする、そして又我等の進むべき清き、美しい路の選擇にも心掛くべきである、此等の總てを終へて眞に偉大な、尊い、前途が開けて來る、此の時に於て始めて眞に純な、歡喜を以つて前途を猛進することが出来るのである、嗚呼今、丁度我等は此の長い暗い又尊い前途を進んで居るのである。

## 我等の前途

大分中學校第五學年 加藤正木

我等の前途には輝く日もあれば灰色の日ある。

有頂天になることもあれば悲觀して厭世的心理にもなることがあり、前途數十年の間には種々な日があるであらう。

然し我等は前途に於て如何なる時にも理想を有する人であらねばならぬ。我等は如何に沈淪の淵に沈むとも又は榮耀に輝く時でも天の一方に常に光明を認めてゐるべきである。「理想なき人類は亡ぶ」誰かが斯う云つてゐる、理想なき一個人に於ても然るべきである。

理想！、我等は常に之を心深く刻み込んで我等の前途を輝く方へと開拓せねばならぬ。

人生に理想があれば必ず意氣がある。

昔よりの大偉人——大學者にせよ、大經世家にせよ、大哲人にせよ——彼等の生涯に意氣は漲り溢れていた。彼等は幸運に彼の如き成功を爲し遂げたのではない。彼等も人間である、永い生涯に於て誘惑もあれば沈淪もあつた、而し彼等はよく打克つた、それは意氣があつたからである。眞に價値ある

理想に向ふに意氣をもつてしたからである。

さうだ我等は特に生氣溢る、青年の意氣をもつて一路理想へと突進せねばならぬ。

理想と意氣があれば我等の前途に輝く日は續くであらう。灰色の雲も打ち拂ふ事が出来るであらう。我等の前途は之から何十年續くか分らないが常に理想と意氣とを持たねばならぬ。輝く我等の前途を價値ある方へと創造するが人生の眞の意義であらう。お、輝かしい我等の前途、我等の前途。

## 現代の青年を誠む

大分中學校第五學年 後藤憲一

英雄!!!

向上に燃へ元氣旺盛なる現代の若人の常に目標とし理想としてやまない言ではないか。

彼のナポレオンの如きゲザールの如き膽の人、熱の人何れも皆我等若人の缺ぐべからざる堅忍不拔の所有者ではないか。現代の青年にして現代の浮華輕縱を一掃し、現代の目標たるべき着實、剛健の

氣風を一層旺盛にし國運隆昌を期するを得ざれば何を以つて健全なる現代の青年と言ひ得るか。

健全なる現代青年たらんと欲せば、すべからず英雄を崇拜せよ。その人格を其の言行を、其の風姿を、而も其の英雄たるや惟に風雲に乘じ幸福を捉へたるが如き風なる者にあらずして英雄のきまりとも言ふべき、貧の中に生れ、苦の中に生長し、總ての神の試練に勝ち得た、苦しみを經たる英雄。堅忍不拔を目標とし体得し得たる英雄をこそ眞の英雄として崇拜せよ。彼等の青年時代の試練を見よ、貧の爲に靴がなくて外出の出来なかつたベートーベンを、彼の徒なる婆羅門哲學に壓迫せられながら雄々しく一世の木鐸となりて氣毒な一生を終へたる釋迦を、……等々……何れも皆凡人等の迫害を物ともせず不撓不屈の精神で各其の道に精進したではないか。

リンカーン、ソクラテスの苦しみは申すに及ばず總て後世に名を成した者にして我等の時代に安樂に月日を送つた者が唯の一人としてあるか。昔の若人は言つてゐる「今爲さずとも時機來らばやる」と現代の賢明なる若人達は此等の言の愚の極なる事は充分に了解してゐるでせう。

青雲を志す者よ、健全なる現代青年たらんと欲する者よ、爲せ、爲せ、今の中に。「志あらば事必ず成る」だ、我等の後世の苦樂は獨り我等の青年時代の修養如何にあるのみだ。

然り、而らば如何にすべきか？

苦を友とせよ。不屈を。忍耐を。着實を。リンカーンを。釋迦を。否々。此の全世界に出現せる總て

の英雄を。

是等英雄たる英雄は皆我等健全なる現代の青年の必要とする要素の總てを所有し我等に最も適切な模範を垂れるからである。

## 現代の青年を誠む

大分中學校第五學年 原 田 成 一

嗚呼。現代の青年!!之を思ふ時、自分は胸に異常の鼓動を覺ゆる。殊に、夏の麗しく太陽の輝く朝や、星影稀に月光皎として流れる秋の夜などに、心靜かに之を思ふ時、新らしい血液が勢よく自分の血管に高鳴るのを感じる。嗚呼、現代の青年!!、或は學の窓に、或は野邊の畑に、心は常に高き空を仰ぎつ、無限の思を胸に潜めて、洋々たる前途を望みながら、血と肉と意氣に進み行く青年の壯姿は宛然氣魄の權化である。其の崇高な姿を望めば、何人も思はず天を打ち仰いで、理もなく虚空に叫びたい様な氣分に襲はれるであらう。そうだ、青年は何處までも、あのアフリカの高野の清月に咆哮

する獅子の如き、猛烈な意氣と白熱せる迄の熱情とを持つて進まなければならぬ。意氣と熱情——それは青年の全生命であり青年の第一要素である。併し此處に我々は深く考へなければならぬ、意氣と熱情は餘り燃ゆる易い。何處かに遠くから自己を見詰るものがなくてはならぬ。あの強い獅子が弱い餌物を狙ふ時、恐ろしい程の落着と間隙もない綿密な注意を持つて居る。己の力を以てすれば、決して意とするに足りないあの小さい餌物を狙ふ時ですら、一歩々々と着實な落着いた歩みをとる。そして其の姿の間にも、晝間砂漠の熱氣の中を漂浪した意氣は常に潜りまかせて居る、嗚呼、此の落着——此の沈着、これこそ現代青年我々に飲けて居る半面ではなからうか。これは懸て人にとつては静觀の姿となつて現れる。凡そ百般の事物は静觀して始めて其の真相眞價は突き止められるのである。たゞ漫然と觀たゞけでは、其の外形は推察されても其の真相は容易に判るものではなく、それに多くの危険を伴ひ勝ちである。我々が事物の靜觀さへ出来るならば、近時喧ましく世間に論議せられる思想問題などは木葉微塵に吹飛し去る事も出来ようし、實生活の深淵の渦に卷込まれる慘禍からも免れ得るであらう。其の他多種多様な問題にも自から鍵は與へられるのである。此處に於て自分は叫ぶ——現代の青年、我が友よ、必ず沈着なれ。熱血兒たれ冷血兒たれと。我々青年に此の沈着があるかないか、即ち我々の思想が堅實であるかないか、それは明らかに祖國の命に關する。思想は全く其の國を支配し其の國の運命を定めるのである。我々は深く此處に省みて、我々の一思想、一舉一動、一言一句

が直ちに社會國家一切の關係に切實な影響を及ぼすかを自覺しなくてはならぬ。盛んな意氣、深き落着、そして健全な思想、社會は正に此の三つを融合した青年を要求して居る。自分は此の青年を讃美し讚歎し讚賞するのである。

現代の青年よ!!、我が友よ!!、彼獅子を見よ。

## 我等が前途

大分中學校第五學年 利 光 道 生

吾人は密かに吾人の前途を考へる時、實に眞面目ならざるを得ないのである。試みに今山に登ると假定せんか、一度その正道を踏み迷つたならば、頂上に到達することは容易ではないのであります。抑出發點に於て已に一足間違つたなれば、如何にもがかうとも、あの遅々たる牛の歩みにも及ぶ能はないであります。又、如何なる駿馬たらんども、常に晝夜兼行全速力で走り續けたなれば、之れ又最後の目的地に到達することなくして路傍に其の醜き屍を横たへるであります。

吾人は此の事を考へた時、誠に寒心に耐へぬことがあるのであります。吾人の前途は洋々たる大海否々其れ以上、實に無限の遠きにその路は通じてゐるのであります。かく思ふとき、吾人はこの遠き永きとして實にあやまり易き此の道を如何にしたなれば、正しく、間違なく、而も敏速に前進することが出来るであらうかと、考へさせられる次第であります。

お、吾人の前途を照す光は何ぞ！

あ、吾人の躍進を勢づける聲は何ぞ！

絶海の孤島の燈臺の如く、吾人の前途を照す唯一の光こそは、實に「我が師」である。吾人の稍もすれば弛緩せんとする精神に勇氣と緊張とを與けて下さるのは、實に「我が父母」であります。

小學校の鼻たれ小僧から「への字」なりにも中學の五年にまでして下さつたのは、實に我が師、我が父母の鞭撻と限りなき慈愛との賜物であります。だが吾人の前途は、今からだ。今からがほんとうに自己の力を發揮して、我等が前途に獸王獅子の如き、元氣と力を以て躍進すべき時である。

吾人の前途は、實に洋々としてゐる。而して又實に困難なることであらう。吾人は一足々々と着實に吾人の理想に向つて勇進しなければならぬ。そして父母や恩師の教訓を身にしめて、一足も迷ふことなく、目ざす目的の彼岸に到達しなければならぬ。

吾人は理想に生き、希望に輝き、我等が前途に躍進せねばならぬ。

## 我等の前途

大分中學校第五學年 福崎清

我々は青年である。青年である限り誰もが壯年の必らず來ると云ふ考へを頭裡の何處かに閃めかしてゐるだらう。否それ以上定め的事實として……丁度春去つて夏の到來を待つ様に、人は決して死の冬を豫期してはならない。

我々は春である。あの意氣と筋肉とに舞る人生の春である、そして常になる縁に咽び活動に叫ぶ夏を思ひ、際ない高遠な空想の實現を夢みる時だ。

我々の空想理想が遠くに見わたるのは人生の高點がごんなに高くに存在してゐるかを知らぬものである。だが一步退いて人生の最低を眺めて見る時我々はその非常な深みに戰慄せざるを得ない。此の全局を含むものが人生だ。此處まで考へる時今更世間の莫大な廣さを見いだした様に感じる。

世界は廣い、偉人あれば萬人あり、知人あれば必らず無智な者がある。一國に大臣大將あれば使丁が存する。

故に青年はその何處に向はんとも任意である。だがその道に大家たり權威たらんとして人生の夏を

迎へんとするは同量の努力と苦痛の中を進行しなければならぬ。古の偉人の何人もが明表する通り彼等はこの元氣溢るゝ人生の春にあつて決然として高い理想を指し猛進に猛進を重ね——遂に理想に達したではないか、我々は立たねばならぬ今正しく我々はその位置に臨んだのだ、人間として男として而も日東男子として世に生れた以上、夏の偉大な天國を目ざして勇敢に前途を開拓しなければならぬ。

我々の前途は強い助力を持つてゐる。それは國家といふものだ。前途は國家をはなれて開かれる筈はない、何となれば國民たる者は等しく偉大な國家の力によつて育てられたものであるからだ。故に我々は國家を脱して偉人たり賢人たる事は不可能である。成功者たる者も此を離れて一人も半人も存する理由はない。我々の前途は國家社會によつて立ち、その力によつて發展して行くべきである。依つて我日本大和青年は須から強く強い愛國者をもつて自から任じ、以つて高い理想の天國に向つて前途を開拓すべきである。

x  
x  
x  
x  
x  
x  
x

## 汝の歩まんとする道

大分縣師範學校 五ノ一 竹田津文人

教師と云ふひゞき其のものが、すでに吾等の心に緊張を興へる。其の心で兒童に面して立つた時。

汝は今から教へるのだと私の心は叫ぶ、だが其の心はおのゝく、汝の心は空虚である、何を汝は子供に興へるのだ。

私は私の心を更にしたゞいて見るに、興ふべきものはない、だが誰とても所持してゐないので、と教へて呉れた。

さうだ大宇宙間を流れる知識を、若き兒童と、若き教師とがさがすので、さうだ、其れでよいのだ。けれども、其れを見つけるには根氣が要る、努力が要る、誠實がいる。

根氣と努力と誠實とで進むのだと私の心は叫んで呉れた。

私は教へると云ふより、それを見付けると云ふことに努力しつゝ子供と歩みを共にしたのであるだが嘗ては眞の見付ける方法をも授け得なかつた様である。只幾日かの道を兒童と、もに虚偽に歩を運んだのではなかつたかと思ふ、然し私は眞の歩みの中に誠實其のものを宿して歩んだ、其れのみ若



き者に捧げ得たと思つてゐる。人間、誠實、人間らしい人間に、誠實ある人間にしたい。かう思ひながら、私は努めて誠實の歩を運ぶ考へだ。

誠實さへあれば必ず児童は其の人を児童の心にくんでそれを信じてゐる。

汝よ。汝は児童に其の心をくまれる教師となれ。これが私の心の叫びである。

## 所 感

大分縣師範學校 五ノ一 高 島 涉

自分は常に清く美しく正しく真心をもつて生きようとするのである、つまらぬながらも徳にこゝろざす者である、元來意志弱く自信なく、而も天真爛漫ならざる自分は彼の孔夫子のいはれた「剛毅朴訥仁に近し」の言を見る度、聞く度に自分の淺薄にして醜い心を針の先でつかれた様な感にうたれるが併しつまらぬながらもなほ自分の使命を全うし、眞の幸福の世界に自分を導き、生きがひある生涯をなさんが爲に努力し修養せんとするものである。爲に自分は常に自分を反省する事につとめてゐる

自己を常に反省しみつめてゐる事は自己の心を優しくし他人に對して寛大となり同時に眞の道德生活に入る第一歩である、自己を反省しない者の道德は皮層的であり口先ばかりの道德である。孔子の「巧言令色鮮し仁」とは何と言ふ意義深い言であらう。現在の事にはあまりに巧言令色家が多過ぎる。口先ばかりで実行力にとぼしい所、あたかも彼の希臘のソフィストの如くである、自分は彼のソクラテスの知行合一を叫び同時に自分も之を実行しようとするものである。

自分は徳をしたふと同時に自然への憧れをもつ、自分のもとむる徳か善か眞があの美しい大自然の中に具備されてゐる事を知つてゐるから、あの草木の明るく美しく清らかな、あふるゝ様な幸福さうな喜びの微笑と自分も望んでゐるから、自分はあの大自然の様に清く美しく正しくやさしく真心をもつて生きて行きたいと常に心掛け又願ふものである。

## 反 省

大分縣師範學校 五年一組 宮 内 實

反省といふ言葉が餘り強くひゝかなくなつたのは何故でせうか。反省と言ふ言葉はもう少し、私等

に強い或ひびきを與へなければならぬ性質のものだと思ひます。

反省とは、過去への徒らなる愛執でもなく、過去への空なる思慕的概念でもない。反省とは、自我の擴充であり深化であり、人間的自覺の自我に表れた一形式である。言ひかへれば、反省は自我を擴充し深化させてゆく所の根元其物である、もう少し平易に言へば、反省は人間を知らしめ自分を把握せしむる根本原因の姿である。それなくしては自分なるもの、存在が否定され、自分なるもの、意識さへないのであります。此の意味の反省を知らなくなつたから、反省と言ふ言葉が強くひびかなくなつたのではないでせうか。即ち人間が退歩したから、人間が人間を見失つたから、自分が自分を知らなくなつたから、生命が伸ばなくなり、人間がひからびたからでせう。私等は生々した人間を見なければならぬ、こう考へると、次の言葉はうれしく、強く又美しくひびいてなりません。

思ひ出はうれし、されど悲し。

私は此の境地こそ、反省のスタートであり又極地でもあらうと思ひます。此の言葉には、悠々の過去が生かされ、永久の未來が示唆され、然も亦、大きな力への信頼があり、見へざる世界への希念が包まれる、只ひたすらに深み行く自我の夢が尊くも裏付けられてゐるものだと思ひます。此の境地が私の生活に、感謝もて表れん事を心から希念する。

## 意氣を以て現實に當れ

大分縣師範學校 五ノ一 伊 藤 學

人は美しいものを見れば欲しくなる、富豪を見れば富豪になりたいと思ふ、此んな慾望に左右され人になりたくない、堅い信念の下に立脚した人でありたいと思ひます。

私は小學校の時、小さい胸に宿つた希望は師範へ入學することでした、そして堅實な人にならう、人に教へる等は第二の事だ、先づ不完全な自己を、より良く向上させようと思つた。然し一年二年と過ぎ行くに連れて、右を見れば右へ、左を見れば左へ進み、色々心は迷つた。進むべき道は定つても、その道を進み行く努力は少しもせず、現今まで及んでゐます。四年何ヶ月と言ふ、師範生活を顧みて、自己の貧弱さと、愚かさを感じずには居られません。學校生活が終れば、當然社會に出ると言ふことは豫想されます。唯だ社會へ出たのみでは無意義です、社會へ出て意義ある生涯を送らうとするならば、先づ學生時代に準備基礎を整へて置く事が必要ではないかと思ふ、そして進み行く目的は、正しきものを一つ選びます。「一兔を追ふ者は一兔を得ず」此の意味に於て、私は如何なる失敗が續いて起り來るも、目的は決して換へません。唯だ熱と意氣とを以つて行きます。理想よりも現實

へ、倦まず、撓まず、最善を盡します。

生涯を有意義にする道は、遠き所よりも案外近き所にあるのではないかと思ひます。

## 巢立つ若き教育者として

大分縣師範學校 五ノ一 成 貞 久

小さき胸ながらも自己の前途を思ふ時、その奥底に波打つものは唯々言ひ知れない空虚そのものであつた、この空虚な脈動こそ現在の自我の芽生であらなければならぬ、唯々漠然ながらも理想を抱く折、否人間である限り自己の弱さを知る折、より大ならんことを祈る、この願ひこそ理想への第一歩であり自己進展の芽生であるに相異ない、底けれども自己の入學した師範教育は自己にとつてはより高いそしてより根強いものであつた、併し今はその芽生も大樹の一枝として、今當に切り倒されてより肥沃なそして温い國に芽生一個の生命を把住しなければならぬ、時に際會したのである、この懊惱こそ眞の理想への飛躍であらなければならない、人間として生血を通す限り、現實を離脱して

理想の國に生きんとする、何故斯な憧が湧くのであらう。私は折々斯な疑惑心に燃ゆる、然しそれに答へ得るものは唯々證明を許さない永遠の神秘そのものである。彼のアテネの青年を感じ社會を感じた詭辨學派に憤起の眼を注ぎ雄然と立てる大哲ソクラテースの門人プラトンが、魂の故郷であるイデアの世界を想起し思慕した事を記憶する、實に理想は永遠の神秘そのものである、社會の波に揉まれながらも尙ほ明るいそして清き天地を求めんとする幼な兒に、自己を投じあらゆる生命を脈動させ、焰々たる教育界の焰の中で身膽共に赤く燃わて、その灰にでもならうことを祈るこそ、自我の永遠に消滅し得ざる願望である、若き教育者としてこの信念のこの理想こそ永遠の神秘である。

## 自 覺 へ ！

大分縣師範學校 五ノ一 平 山 盛 雄

誰の前でも平氣で開いてゐた英語のリーダーが開けなくなつた、これが自分がこの學校に入學してからの變化を物語る最も適切な現象だと思ふ、特に教生々活を終へてから、一層感ずる事である、教



てはならない、私も最下級生から最上級生へと進むにつれふつゝかる問題も多くなるに従ひ、自然と自己を振り返る様になり、自己を知らんとする心が芽生わってきた、この心の芽生わによつて、真に現在の自己を知り、其の上に理想を見出し努力の旅であるこの人生の道を一步々々堅實に踏みしめて理想に向つて進んで行きたい。

## 我が教育者を志せし動機

大分縣師範學校 二部一組 元 重 廉 直

チン／＼と時計は夜の十一時を告げた、騒がしかつた寄宿舎も、今は全く寢静つて唯寢息ばかりが微かに聞こえて来る、私は一人机に寄り掛かつて過去の思出は耽けた、それは去年の夏の午後であつた、久り振りで里の小學校を訪れた、思出深い母校の門をくゞると、ひっそりとした校舎の中からシンミトとオルガンの音が聞こえて来る。

良く先生から兎と龜の話聞かされた教室を窺くと、鼠色に汚れた壁にはやはり昔の儘の落書が残

つてゐた、私はそれを見つと見てゐると過去の追憶が次から次へと、脳裡を走馬燈の様に廻る、懐かしい追憶、私は幾度となく心に思ひ浮べた、教壇に立たれて教鞭を採つて下さつた舊師の影が、まぎ／＼と眼に映する、慈愛深い眼、しかも侵し得ない態度を以て、立たれた白髪の老師を、私は世の中で最も偉い人として畏敬した「おれも大きくなつたら先生になりたいなあ」と、常に心に願つた、窓硝子がコト／＼と音をたて、カーテンが揺れる、私の此の思出深い教室を去つて、校庭に立つた、今や懐しい舊師も他郷に去られて影は見えないが、眼に映するもの總て懐舊の情を誘はないものはない、此の時ふと私の脳裡をを掠めたものがある「そうだ教育者を志して今一度あのおどけない子供の時の心に歸りたい」と、十二時を告げる時計の音にふと我にかへると、十有餘年前のあの純眞な希望更に去年の夏の思出も今は實現されて、教育者の一員となるべき第一歩を運び出したのである、心弱く思ふ私にとつて此の職責は分に過ぎたものかもしれない、然し私は叶はぬまでも自ら鞭つて全力を盡さうと思ふのである。

x  
x  
x  
x  
x  
x  
x

## 私の志望と将来

大分縣師範學校 二部一組 青柳干城

私は、誰でも同じでせうが、志望と進路の事には、困りましたので、今少し、此事について書きま

す。  
中學校卒業は、私の一生を光りあらしむる歴史です、而し未だ私の力は不十分でした、我等の前には幾多の進路も展開して居ました、私は種々な家庭の事情、其の他色々な事を考へました、自分は何か大成して死にたい、と考へました、誰でもさう考へたでせう、是れが我等の理想である、私は考へたまゝを申す事に致します、先づ學校卒業後の事は就職の事です、それは又考へねばならぬ事です、それかと言つても、やはり立派な學校にはいりたい、それで私は、師範二部に、はいりました、ですから、今その理由を書きます。

それは、父が、大分師範卒業であり、長く教職に勤めた事も私がそうした原因となつたかも知れません、とにかく此進路は、私が生涯の任として、決して不満足ではない。  
そは此道たるや實に、無限の進路であります。

唯努力次第では、大學總長にもなれる、いや唯でも此道を進む者、そう思ふでせう、少くとも私人は、そう思ふ、必ず初一念貫徹する考へです、又此進路は、何れの方面より見るも、立派も進路です、最後に一言感じましたまゝを申します、努力は天才なり、この事です、如何なる進路にせよ、努力無くして進歩は望まれない、血氣に任せず、冷静に自己を見て、一度決心した以上は、天の運行の如く、しつかり、先づ最初の第一歩を堅實に、踏出さうと思ひます。

## 卒業期臨みて迷へる友へ

大分縣師範學校 二部一組 杉木與市

學資なくして高級學校に入られざる秀才あり、身体羸弱にして目的校に向ふ能はざる人間あり、其他家庭的諸事情によりて自己の理想に進む能はざる學生あり、かゝる時に於て立身出世に憧れる餘り老父母の嘆願に耳もかさず、故郷を後にして笈を負ひて都門に遊ばんとするのが現代青少年の通弊なり、學資乏しき秀才は出世の爲には父母をも顧りみずに世の富豪の世話になり、身体羸弱の者ですら

父母の注意を欲けて理想の猛進せんとす、然しながら一步振近つて顧るに、彼等の成功を待つものは父母の位牌を蝕まれたる彼等自身の身体のみならずや、樹静ならんと欲すれば風やます、失はれたる健康又再び得るに法なし、親を心配せしめ我肉体を抛つてまで成功する必要あらんや。

然しながら我さて成功を忌み立身を願はざる者に非ず、人一倍の欲望と野心に燃わてゐしが、高級の學府に進まんに自分あまりに家庭的に恵まれざりき、比較的優秀なる頭腦を持ちながら中學校卒業後師範二部を希望したるも其の爲なり、中學卒業期に臨んで、右せんか將た左せんかと迷へる友よ、唯堅き決意を持って、萬難を排して高級學府に進むもよし又留つて雌伏するもよし、唯鐵をも坐く若人の熱を失ふべからず、伏龍も雲を得ば昇天する事あるべし。目的校に入られざると失望すべからず「大器は晩成す」——友よ、成功をあせるべからず、迷ふなかれ、一大理想の前には一大難關のある事を思ひて、唯火の如き決心を以て自己の現代の務を盡すべし、これ君を成功に導くの道なり。

x  
x  
x  
x  
x  
x  
x

## 師範學校二部入學の動機

大分縣師範學校 第二部一組 阿南房夫

僕も殆んど空想に近い程の望を抱いて中學を卒業した者の一人でした、其して同級の者で當時二部にパスした者なども、顧みる餘裕も持たなかつたのでした、お門達の二部などへ行かなくてもよい今に見て居れど云ふ意氣で或る専門學校を受験して、見事に失敗しました、今迄の意氣も何處へやら有頂天になつて騒いでゐた熱しきつた腦を、鐵槌でドシンと、たゞかれた様な心持です、當時は總てのものが癩でくでたまらなかつたのです、此の時程人世の空漠を感じたことはありません、此の時程人世の無情を感じたことはありません、又此の時自分を、つまらなく感じたことはありません。

其れから一ヶ月二ヶ月と所謂浪人生活を續けました、其してだん／＼と熱した腦の冷却してくるにつれて、又一人淋しく田舎に引込んで、友もなく常に考へさせられた、めか、何だか今迄の自分の考へがあまりに大き過ぎ、其のくせ空虚な、上表作りの、人見せの何の價値もないものに考へられる様になつて來ました、此の頃です、丁度父が半身不隨の中風に罹りました、其のためでせう、今迄は僕の意志を尊重してくれて、何の束縛もしなかつた父が頻りに父の過ぎし歴史を語つて、平凡人が





## 我々の覺悟

大分縣師範學校 二部 河野 憲 一

世の中の最終は眞の理想境へ達せんが爲である、進歩發展は其の理想境へ達せんが爲の途上にあるのである、世の中が進歩發展する以上必ず其處には、積極的建設的一面がなくてはならぬ、何故ならば低劣な價値を否定し打破する事なしには、優秀な新價値を創造する事は出来ぬ。

世の中が時々刻々進歩發展し、我々の境遇が時々刻々變化して居る以上、我々の覺悟が、消極的に常に先人の後を追ふのみならば、我々は進歩發展の爲に否定し、打破され價値の上を歩むばかりでなく、世の中の進歩發展は期し難い、我々は常に積極的覺悟を持たなければならぬ。

我々は我々の中學卒業當時の進路に於て、進むべき方向は殆んど定まる、我々の積極的覺悟は野心となつて表はれる、我々は我々の境遇の許す限りの最大野心を持つて、進まなければならぬ。

我々が中等學校を卒業して、伸ばす一階級、理想へ向ふ第一歩は我々の積極的性質により成功するものである。

要するに我々は消極的性質を捨て、積極的に活動的に進まなければならぬ。

## 迷へる諸兄に告ぐ

大分縣師範學校 第二部一組 山本 宗 夫

昔、封建時代では天下の民は士農工商の四階級に分れ、此の階級制度は儼として相侵す事許されなかつた。

而して武を最も尊しとして、農は次に、商は農の次に位して最も卑しとされて居た。

然るに明治維新後となりては、義業世襲の制度は撤せられて四民平等の世となつた。教育は小學校令發布と共に全國に偏く普及して、文明の進歩は駛々として一日も止まる所なく、其の裏面には生存競争が次第に激烈となりて、世は謂所せちがらき世となつた。

此の間に立つて將來の方針を立てんとする事は、決して容易な事ではなく亦早計に斷定すべきではない。

先づ自己の趣味に向ふ所に依りて定むる事も肝要である。時に末だ迷へる友人諸兄よ。

兄等の或る者は政治家に、或は實業家に、或者は軍人に教育家にと各々志ざされるであります。

其の中で私は兄等に教育家たらん事を切に希望致します。今日田舎の青年は一躍成功を夢見て故郷

を去りて都會へくゞ集り、而して職なくして碌々として遊ぶ者が多し。

爲に郷家の軒は朽ち、父祖傳來の資産を傾け良田は荒廢し、農村は益々衰微してゐる。世の中は滯手で粟を掴む様に行ける物ではない。阪をたどり谷を越えて、難艱辛苦を嘗めてこそ高山へも登り得らるゝので、物には順序次第がある。辛抱、忍耐、勉強、勇氣を出して農業に精を出して、現代農村衰微を救済すべき第二國民を導く教育家となられよ。

## 教育者を志して

大分縣師範學校 二部一組 田村 孝 治

世に「職業に貴賤なし」との語があるが、實際には高尚なるものと卑俗なるものがある。併し乍ら職業はそれ自身絶對的に貴賤を論ずることは出来ないのである。要は之に従事する者の態度如何によるものである。然し一般に精神的の仕事は物質的のそれよりも高尚である。人格的利他的の仕事は機械的利己的のそれよりも高尚である。教育事業は精神的人格的利他的である。教師と兒童の人格的

接觸である。個人としての人格の陶冶であり、同時に次代の國民の養成である。

人は生存上社會的地位を得んとしてゐるものである。或は名譽のため、或は金錢のため。この考よりすれば教育者は物質的には恵まれてゐることが少いだらう。凡ての職業にはそれ／＼對象がある。そして、その對象は人の精神上多大の影響を及ぼすものである。教育は兒童の生きた心の世界を對象とし、思ひのまゝ、人格的接觸をなすことが出来る。この意味に於て大いに精神的満足を求めることが出来る。そして眞の教育の意義を理解し、至純熾烈なる教育的動機を以て之に従事するときは、他の職業に於ては見出し得ない怡樂があり満足があつて、所謂天職として之に甘んじ、献身的に精進することが出来ることを信じてやまぬものである。

一 驛長を志し中途家事の都合上代用教員として教育界に身を投じた經驗をもつ私は却つて新生面を開き得たことを嬉しく思つてゐるのである。

×

×

×

×

×

×

×

×

## 自己の天職に安住して

大分縣師範學校 二部二組 本 莊 吉 雄

人間の常として、誰でも一度は必ず考へる事であるが、つい先頃まで子供であつた私は、もう將來を考へなければならなくなつた。否確かにさうされてしまつたのである。何がさうしたのであらうか。時……確かに時である。

取り止めもない理想……空想といつた方が、至當であるかも知れない……を描いて古巢を出たが、當然の結果として目的は達せられなかつたのである。然し之に依つて、私の目的を定める事が出来たのである。

一ヶ年を如何にして過すかといふ事は重大な問題である。さう考へる事は私に取つては、堪へられない不安であつたが、所詮一路を選ばなければならぬ運命にある私は、分岐點に立つて前途を眺めた。何處も暗黒である。此の中の何處に光を求めようとするのであらうか。歩いてゐる中に東天が白むかも知れない。これが私の唯一の光であり望みであつた。ふと代用教員をして見る氣になり。數ヶ月前の一生徒は、教壇に立つ身となつて、約一年を過したのである。此の間に兒童に接したが、純真

無垢だ。悟らない釋尊のやうだ、子供に接してゐると、魅力を感じ、知らず識らず引きつけられて行くが、自分ではどうする事も出来ない力だ。

私が師範二部を志したのは、家庭の事情は勿論あるが、この教員生活が今日の様にしたのである。國運發展の基礎をなし、根底をなすのは初等教育であると思ふ。私の道はあまりに大きいが、教育者となる事は、私に開かれた道であるから、如何なる困難が起つても、恐れる事なく、自己の天職に安住して進むのである。

## 意氣地が無かつた

大分縣師範學校 第二部二組 河 野 繁 喜

「理想を持って、理想を持たねばならぬ目的を建てよ、目的を建てねばならぬ」と云ふ先生の言葉は幾度我が耳を通過したか。然し其れは單なる通過であつた。何等の共鳴もなく中學四年間は夢と過ぎた。夢の内に五年となつた。流石に最終學年である。緊張味が總ての點に於て見受けられた。私も其

れに刺激されてやむを得ず勉強した、然し目的の無い勉強は駄目であつた。或る時は高い理想を描いた。或る時はどうせ百姓だから平々凡々と百姓で暮さう、其の方が安樂であると思ふこともあれば、又中學を卒業して、じつと家に居るのもあまりに意氣地が無いと思ふこともあつた。

かくして終に確たる目的は建たなかつた。むしろ百姓で暮さうと思ひあきらめた。

私は私の將來のことに付いて一度も父に相談したことは無い。又父も一度とてさう云ふことを話し掛けてくれたことは無かつた。私は話し掛けられないのを却つて嬉しく思つた。さう云ふことが、家中の話題となることを常に避けてゐた。と云ふのは中學を卒業させて戴くのもやつこのことで、家政上許されないことを知つてゐたから。時に高い理想が浮んでも最後には常に抑制することが出来た。其の爲向學心は遞減し學校へ行くのもさほど興味を覺えず、平凡に卒業してしまつた。

今から考へると、あまりに意氣地が無かつた様であるが、然し無理をして上級學校に進んだとて、其れが果して意氣地があるか、いたすらに父を苦め、家を苦しめるのが意氣地があるのか。

× × × × × × × × × ×

## 二部入學する迄の動機と將來

大分縣師範學校 二部二組 伊 東 玄 八 郎

毎日、二階の欄干に漸く立てる様になつた。私の脚氣の身を凭せて、元氣よく登校してゐる友を見て、悲奮の涙を流したのは、去年の九月から十二月の長い二學期であつた。

其れも、一學期の夏休みに過度の勉強から脚氣を引き起し、遂に九月に入つて、三日間登校し、後の二學期全部休學した。それも足が立たない様になり、醫者からも危険視された程の脚氣であつた。あまり勉強せず、運動をすればよかつたのだが、高等學校に入りたいと言ふ野心と、友等に負けまいと言ふ野心から、一心に勉強したのがわるかつた。

噫、私の一生であの二學期、松葉杖をついて、漸く歩き出した喜びと、悲しさは忘れる事の出来な事であるかもしれない。

三學期漸く登校する事が出来る様になつて、學校に行つた時、皆の友が来て慰めてくれた。中でも一番親しかつた由布君が、僕の所へ来て「玄ちやあん悲觀するな、一年位入學が後れても先はどうなるか分るもんか」と言つて慰めてくれた。